

HI EE
比 惠 遺 跡 群 (15)

—比恵遺跡群第41次・49次発掘調査報告書—

1995

福岡市教育委員会

比恵遺跡群(15)正誤表

頁	行	誤	正
例言	4	遺構と遺物の写真は	遺構と遺物の写真撮影は
8	Fig8	SK12	SE12
13	26	為の遺構で	為の施設で
18	1	長形	長径
22		Fig. 18	Fig. 19
35	1~5	241、242、243の番号	251、252、253へ
36	9 Fig29	219~223は蓋 Fig. 29 SD41底杭列	219~223は蓋 Fig. 29 SD41底杭列
37	13	228	238
42		Fig36 SP113-259 SP101-260	SP113-260 SP101-259
46	Fig38	土層説明欠落	下(才間にあ)
49	Fig45	石器遺物番号欠落	392
53	18	P1. 00-0	P1. 14
56	Fig56	遺物番号259	251
58	Fig64	46-296が2点あり	下方を46-503とする
PL2		(2)北壁 (3)南壁	(2)南壁 (3)北壁
PL4		(3)SK1.2	(3)SK11
PL5		(4)SK54、(5)SX58土器群	(4)SX58土器群、(5)SK54
PL8		SK69遺物番号なし	SK69 40

段落ち3土層名稱

- 1 褐色(Hue7.5YR3/3)砂質シルト、硬く締まる
- 2 1と同じブロックと暗褐色(Hue7.5 YR8/4)砂質土ブロックの混合
- 3 にぶい黄褐色(Hue5YR4/3)粘質土(シルト質で軟質)

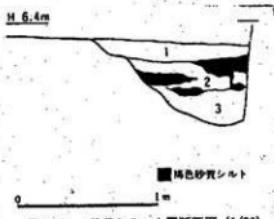
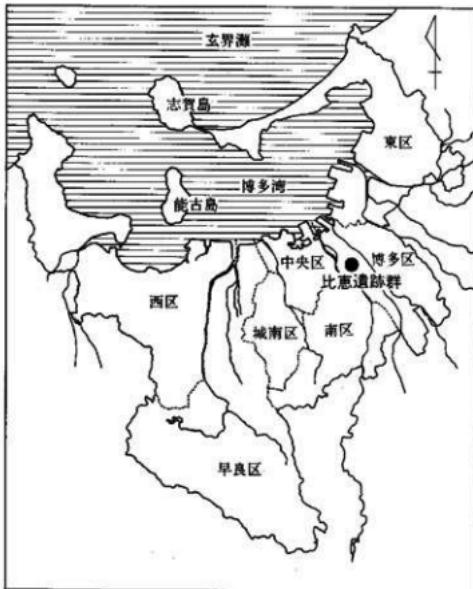


Fig. 38 段落ち3 土層断面図 (1/30)

HI E
比恵遺跡群 (15)

—比恵遺跡群第41次・49次発掘調査報告書—



HIE-41、HIE-49
調査番号9211、9318

福岡市埋蔵文化財調査報告書第401集

序

比恵遺跡のある博多区は弥生時代の奴国を中心として、学史的に有名な板付遺跡を始めとして、数多くの埋蔵文化財が包蔵されている地域です。またこの地域は博多駅を中心として市街地化が著しく進んでいる地域でもあり、それに伴う発掘調査が盛んに行われています。今回報告する2地点は民間のビル建設に伴うもので、調査では弥生時代から古墳時代にかけての数多くの遺構と遺物を検出しました。その成果を今回、本書というかたちで市民の方々に公にすることが出来ました。本書が文化財保護と活用の一助になることを願います。最後になりましたが、株式会社第一電工、日下部新蔵氏を始めとして関係各位のご協力にたいして、厚く感謝の意を表します。

平成7年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾花剛

例　　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が平成4年（1992）から平成5年（1993）に実施した比恵遺跡群の緊急発掘調査のうち、第41次・49次調査地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は上記の主体により行われ、調査組織は「第1章2 調査体制」の中でそれぞれ示している。
3. 遺構実測は第41次調査が山崎龍雄と瀬戸啓治、第49次調査が杉山富雄が行った。また、遺物の実測と斎書は第41次調査が山崎龍雄と井上加代子が、第49次調査が杉山富雄と荒牧宏行が行った。
4. 遺構と遺物の写真はそれぞれ調査担当者が行った。
5. 本書に使用した方位は磁北であり、真北との偏差は西偏6°21'である。
6. 調査に係る記録類・出土遺物は埋蔵文化財センターで収蔵保管し、活用して行く予定である。
7. 各調査記録の報告については、担当者の自主的判断に基づいて記述しており、その内容の文責については、各担当者にある。
8. 本書の編集は、山崎が杉山と協議のうえ行った。

比恵第41次・第49次調査概要

調査次数	調査番号	調査場所	調査地番	(m ²) 申請面積	(m ²) 実査面積	申請者	調査期間	事前審査番号
比恵 第41次	9211	福岡市 博多区博多駅南6丁目34-2	1037.29	633		株式会社 第1電工	1992年5月6日～8月11日	3-2-470
比恵 第49次	9318	福岡市 博多区博多駅前5丁目53-1	793	513		日下部新蔵	1993年6月23日～8月16日	4-2-388

本文目次

	頁
第1章 はじめに.....	1
1. 調査に至る経過.....	1
2. 発掘調査の組織.....	1
第2章 遺跡の立地と歴史的環境.....	2
1. 立地.....	2
2. 歴史的環境.....	2
第3章 第41次調査.....	5
1. 調査の概要.....	5
2. 調査の記録.....	5
3. 小結.....	44
第4章 第49次調査.....	45
1. 調査の概要.....	45
2. 調査の記録.....	46
3. 小結.....	59

図版目次

- PL. 1 (1)調査I区全景(西から) (2)同I・II区全景(南から)
(3)同II区上面全景(北から) (4)II区SD41検出状況(北から)
- PL. 2 (1)SD41検出状況(南から) (2)SD41北壁土層(南から) (3)同南壁土層(北から)
- PL. 3 (1)SD41杭検出状況(南から) (2)同遺物検出状況(南西から)
(3)SD03・14・15・20(西から) (4)同(南西から)
(5)SB62(南から) (6)SE02(南から)
(7)SE40上層(東から) (8)同井戸底遺物出土状況(東から)
- PL. 4 (1)SE12(南から) (2)SE59(西から)
(3)SK12(南から) (4)SK16(南から)
(5)SK17(東から) (6)SK18(北東から)
(7)SX21(北西から) (8)SK28(北から)
- PL. 5 (1)SK42(北西から) (2)SK49・50(西から)
(3)同遺物出土状況(西から) (4)SK54(南西から)
(5)SX58土器群(南西から) (6)SK63(南西から)
(7)SK67・68(北西から) (8)SK69(北西から)
- PL. 6 (1)SX47(北から) (2)同遺物検出状況(北から)
(3)同遺物検出状況(西から) (4)SX52遺物出土状況(西から)
(5)SX46(西から) (6)SX46(南から)
(7)SD41上層遺物出土状況(北東から)
- PL. 7 (1)II区水田面検出状況(西から) (2)取排水口検出状況(北西から)
(3)水田面遺物検出状況 (4)II区完掘後土層(南東から)
- PL. 8 (1)II区完掘状況(西から) (2)土坑・井戸出土遺物
- PL. 9 井戸・溝・土器群出土遺物
- PL. 10 溝・水田面・ピット出土遺物と各遺構出土木器
- PL. 11 (1)調査区西半部(東から) (2)調査区東半部(北から)
- PL. 12 (1)調査区南東隅部遺構(北から) (2)段落ち3 土層断面(北から)
(3)竪穴住居6(北から) (4)竪穴住居7(北から)
- PL. 13 (1)竪穴住居8(北から) (2)竪穴住居8(南から)
(3)竪穴住居132(南から) (4)柱穴135 土層断面(東から)
- PL. 14 (1)掘立柱建物137(北から) (2)井戸5(東から)
(3)土壤80(東から) (4)土壤12(北から)

挿 図 目 次

Fig. 1	比恵遺跡群と周辺遺跡 (1/50,000)	3
Fig. 2	比恵遺跡群調査地点位置図 (1/6,000)	4
Fig. 3	比恵第41次地点遺構配置図 (1/200)	6
Fig. 4	SB62・70 (1/80)	7
Fig. 5	SK11・16～18・49・50 (1/30・1/40)	8
Fig. 6	SK11・13・16・17・28・32出土遺物 (1/4)	9
Fig. 7	SK42出土遺物 (1/4)	10
Fig. 8	SK54・69・SX21 (1/30)	11
Fig. 9	SK18・49・50・68・69出土遺物 (1/3・1/4)	12
Fig. 10	SK42・SX46 (1/40)	14
Fig. 11	SK28・63・67・68・SX47 (1/40)	15
Fig. 12	SX19・21・25・47出土遺物 (1/4)	17
Fig. 13	SX19・25・47・SK32出土遺物 (1/3)	19
Fig. 14	SE02・12・40・59 (1/40)	20
Fig. 15	SE02・12・59出土遺物 (1/4)	21
Fig. 16	SE40出土遺物 1 (1/4・1/6)	22
Fig. 17	SE40出土遺物 2 (1/4)	23
Fig. 18	SD03・14・15・20土層 (1/30)	24
Fig. 19	SD01・03・14・15・20・24出土遺物 (1/4)	25
Fig. 20	SD03・14・15・20出土遺物 (1/3)	27
Fig. 21	SD41上層・中層出土遺物 (1/4)	28
Fig. 22	SD41 (1/80)	折込み
Fig. 23	SD41中層・下層出土遺物 (1/4)	29
Fig. 24	SD41下層・底層出土遺物 (1/4)	30
Fig. 25	SD41底層出土遺物 1 (1/4)	31
Fig. 26	SD41底層出土遺物 2 (1/4)	32
Fig. 27	SD41出土石器・土製品 (1/3)	34
Fig. 28	各構出土木器 (1/3・1/4・1/10)	35
Fig. 29	SD41底杭列 (1/20)	36
Fig. 30	SX52・58出土遺物 (1/4)	37
Fig. 31	II区水田面・取排水口 (1/100・1/40)	38
Fig. 32	II区調査区周壁土層図 (1/60)	39
Fig. 33	SX58土器群 (1/20)	40
Fig. 34	包含層出土遺物 (1/4)	41
Fig. 35	包含層・水田面出土遺物 (1/4・1/3)	42
Fig. 36	ピット・包含層出土遺物 (1/4・1/3)	43
Fig. 37	比恵49次地点遺跡調査区全体図 (1/200)	45

Fig. 38 段落ち 3 土層断面図 (1/30)	46
Fig. 39 段落ち 3 出土遺物実測図 (1/3)	46
Fig. 40 溝 2・4 出土遺物実測図 (1/3)	47
Fig. 41 竪穴住居 6 実測図 (1/60)	47
Fig. 42 竪穴住居 6 出土遺物実測図 (1/3)	48
Fig. 43 竪穴住居 7 実測図 (1/60)	48
Fig. 44 竪穴住居 8 実測図 (1/60)	49
Fig. 45 竪穴住居 8 出土遺物実測図 (1/3・2/3)	49
Fig. 46 竪穴住居 132 実測図 (1/60)	50
Fig. 47 竪穴住居 132 柱穴上層断面図 (1/30)	51
Fig. 48 炉 133 実測図 (1/30)	51
Fig. 49 竪穴住居 132 出土遺物実測図 (1/3)	51
Fig. 50 炉 131 実測図 (1/30)	52
Fig. 51 掘立柱建物 137 実測図 (1/30)	52
Fig. 52 掘立柱建物 137 柱穴土層断面図 (1/30)	52
Fig. 53 掘立柱建物 137 柱穴出土遺物実測図 (1/30)	53
Fig. 54 井戸 5 実測図 (1/30)	53
Fig. 55 井戸 5 出土遺物実測図 (1/3)	53
Fig. 56 土壙 12 実測図 (1/30)	54
Fig. 57 土壙 13 実測図 (1/30)	54
Fig. 58 土壙 13 出土遺物実測図 (1/2)	54
Fig. 59 土壙 80 実測図 (1/30)	55
Fig. 60 土壙 80 出土遺物実測図 (1/3)	55
Fig. 61 土壙 114 実測図 (1/30)	56
Fig. 62 土壙 143 実測図 (1/30)	56
Fig. 63 土壙 143 出土遺物実測図 (1/2・1/3)	57
Fig. 64 小穴・柱穴出土遺物実測図 (1/3・2/3・1/2・1/1)	58
Fig. 65 小穴・柱穴出土遺物実測図 (1/3)	59
 Tab. 1 比惠49次地点遺跡報告遺物一覧.....	60

表 目 次

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

第41次調査

平成4年3月23日、株式会社第一電工社長、沖国鎮氏から、本市埋蔵文化財課に埋蔵文化財事前調査願いが提出された。同年4月10日に試掘調査を行った結果、対象地全域に遺構が確認された。その結果をもとに申請者と保存に向けての協議を重ねたが、設計の変更は困難であり、止むをえず費用を原因者が負担することで調査を行う事となった。調査は1992年5月6日から8月19日まで実施し、整理作業は1994（平成6）年度実施した。

第49次調査

1993年2月19日、日下部新彦氏より埋蔵文化財事前審査願いが提出された。これを受けて埋蔵文化財課では、対象地において同年3月5日、試掘調査を行った。試掘調査の結果と、予定工事の内容とを検討した結果、埋蔵文化財については、記録保存のために発掘調査を実施することとなった。

なお、発掘調査にあたっては、地権者である㈱第一電工沖国鎮氏・日下部新彦氏の全面的な協力を得ることができた。また工事関係者の多大な協力も得て、作業を進めることができた。調査報告書刊行にあたり、ご協力頂いた方々に感謝申し上げます。

2. 発掘調査の組織

第41次調査

調査委託 株式会社 第一電工 沖国鎮

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 埋蔵文化財課長 折尾学 第2係長 塩屋勝利（前任）、山崎純男（現任）

庶務担当 吉武（旧姓吉田）真由美（前任）、西田結香（現任）

調査担当 山崎龍雄

調査・整理 濑戸啓治、村山市次、藤岡義男、楠本純次、坂本千寿子、堀川ヒロ子、井上加代子、大賀順子、坂木智子、釣崎由美、田口美智子、坂本直子、森章子

第49次調査

調査委託 日下部新彦

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 埋蔵文化財課長 折尾学 埋蔵文化財第2係長 山崎純男

庶務担当 吉武（旧姓吉田）真由美

調査担当 杉山富雄

調査・整理作業 尾崎真佐子、武田潤子、立水清、為房綾子、西本スミ、野口ミヨ、広田安平、日比野典子、村山市次、森山恭助、森山タツエ、坂井美穂、山口典子

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 立地

福岡平野は西は脊振山塊から派生する長垂丘陵、東は大鳴・三群山地に囲まれた区域で、南北に貫流する室見川・樋井川や那珂川・御笠川、宇美川・須恵川・多々良川などの中小河川の沖積作用によって形成された沖積平野と、油山北部台地・鴻の巣山丘陵や、諸國台地、船屋台地などの丘陵台地によって形成された平野であり、この平野は油山・鴻の巣に囲まれた西側を室見川によって形成された早良平野、中央部の那珂川と御笠川・月隈丘陵に囲まれた部分を狭義の福岡平野、東側を多々良川・宇美川などで形成された船屋平野に分けられる。比恵遺跡群はこの狭義の福岡平野の北側、那珂川と御笠川に挟まれた標高5~11mの平坦な洪積台地上に立地する遺跡である。この台地は阿蘇起源とされるASO-IV火砕流によって形成されたものである。ただ現在見られる平坦な地形は戦前の昭和10年代に行われた区画整理によって削平された結果であり、本来は台地を開拓する小河川と入り組んだ谷と台地という景観を呈していたものであり、調査によって往時の自然景観を復元することが出来る。

2. 歴史的環境

比恵遺跡群周辺で最も古い時代は旧石器時代に遡る。比恵遺跡群第18次地点で旧石器時代遺物が出土している外、南に隣接する那珂遺跡群では第37・41次地点で旧石器時代の石器類が出土している。また諸岡遺跡でも同時代の遺物・包含層などが検出されている。縄文時代には南東側3km程離れた板付遺跡では早期の押型文土器が出土しており、板付市街住宅の建設に伴ってその包含層も確認されている。縄文時代終末になると、那珂遺跡群で最古の二重環濠を持つ集落が出現し、やや遅れて板付遺跡での環濠集落が出現する。比恵第41次地点では中期の阿高系の土器が採集されている。

弥生時代は前期に板付遺跡と同様に第3次・4次・8次調査地点などで貯蔵穴群が検出され、集落が出現する。中期は集落規模が拡大し、台地上に生活遺構が拡大する。甕棺墓地は4ヵ所に分布し、その内の第6次地点では甕棺墓の中に細型銅劍が1口副葬されていた。また第42次・43次調査地点などからは青銅器の鋳型片が出土しており、南側の那珂遺跡群と並んで比恵遺跡でも青銅器製造が行われていた事を示している。中期末になると第15次地点に環濠と見られる大規模な溝が検出されている。後期になっても集落は継続し、第1次・9次・10次調査地点などに終末期の一辺約50mの方形環濠が掘られており、最近各地方で検出されつつある豪族居館址の可能性が強い。今回報告する第41次地点では板付遺跡と同じように、台地際を巡る水路とそれに伴う水田址が確認された。

古墳時代に入ても集落は依然、全面に継続するが、隣接する那珂遺跡群に全長70mの那珂八幡古墳が築造され、昭和60年の重要確認調査で、後円部頂の第2主室部から三角縁神獣鏡が1面出土している。出土遺物と形態から福岡平野部で最古期のものと考えられている。また北側海浜砂丘上に立地する博多遺跡群でも前方後円墳が出現する。後期になると那珂遺跡群北側に劍塚古墳が築造され、試掘調査などによって周辺に更にいくつか未知の古墳が埋蔵されている事が確認されている。比恵遺跡群では第6次地点西側で円墳の周溝が一部検出されている。

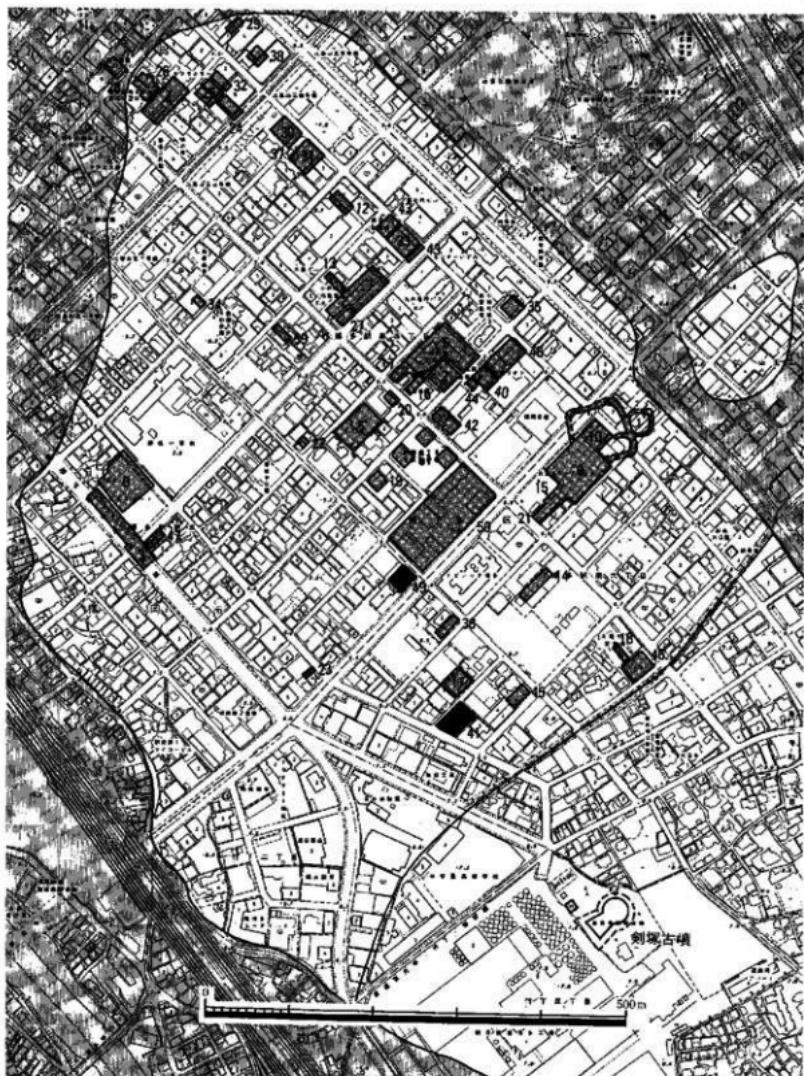
古墳時代後期から律令時代になると、第7・8・13・39次地点などで大規模な掘立柱建物群や、3本柱の櫛が確認されており、規模・配置・出土遺物等から官衙的施設と考えられる。これらは『日本書紀』にある「那津官家」との関係がとりさだされている。また那珂遺跡では同時期に大量の瓦が出土地があり、寺院があった可能性がある。古代末から中世以降、北側の博多が対外貿易を中心

に行うことで繁栄を誇るようになり、比恵遺跡群は中世の農村的景観に逆戻りする。中世には那珂郡比恵村となり、宮崎宮の所領となり、宮崎宮史料の田村大宮司文書などに比恵に4ヶ所の屋敷があつたような記録も残っている。¹¹ 戦国期には大内・大友氏の支配下に入る。

註1 福岡県地名大辞典



Fig.1 比恵遺跡群と周辺遺跡 (1/50,000)



- 北患遺跡群 1. 第1次調査地点 2. 第2次調査地点 3. 第3次調査地点 4. 第4次調査地点 5. 第5次調査地点
 6. 第6次調査地点 7. 第7次調査地点 8. 第8次調査地点 9. 第9次調査地点 10. 第10次調査地点
 11. 第11次調査地点 12. 第12次調査地点 13. 第13次調査地点 14. 第14次調査地点 15. 第15次調査地点
 16. 第16次調査地点 17. 第17次調査地点 18. 第18次調査地点 19. 第19次調査地点 20. 第20次調査地点
 21. 第21次調査地点 22. 第22次調査地点 23. 第23次調査地点 24. 第24次調査地点 25. 第25次調査地点
 26. 第26次調査地点 27. 第27次調査地点 28. 第28次調査地点 29. 第29次調査地点 30. 第30次調査地点
 31. 第31次調査地点 32. 第32次調査地点 33. 第33次調査地点 34. 第34次調査地点 35. 第35次調査地点
 36. 第36次調査地点 37. 第37次調査地点 38. 第38次調査地点 39. 第39次調査地点 40. 第40次調査地点
 41. 第41次調査地点 42. 第42次調査地点 43. 第43次調査地点 44. 第44次調査地点 45. 第45次調査地点
 46. 第46次調査地点 47. 第47次調査地点 48. 第48次調査地点 49. 第49次調査地点 50. 第50次調査地点
 51. 第51次調査地点

Fig.2 北患遺跡群調査地点位置図 (1/6,000)

第3章 第41次調査（調査番号9211）

1. 調査の概要

比恵遺跡群は、諸岡地区から細長く断続的につながる洪積台地の先端部分に立地する。比恵遺跡群は南東から北西に長軸を取る長さ約1km、幅0.7kmの範囲で、南隣する那珂遺跡群とは谷を隔てて区別される。第41次地点はこの遺跡群の南西部部分に位置する。周辺の調査例としては北西側に第11次地点、東側に第45次地点がある。発掘調査は1992年5月6日から開始したが、排土は業者の協力を得て場外持ち出しで処理を行った。調査は排土処理の関係からI区（東側）、II区（西側）と2分割して行った。II区は段落ち下の水田部にある。

調査区の標高は地表面で約6mを測る。盛土が厚くなされており、遺構面までの深さは1m以上と深い。堆積層は上から盛土、旧水田土、造構面（八女粘土）となる。地形は東側がやや高く、西側に緩やかに傾斜している。また西側は段落ちし、段落ち際に弥生時代の水路が流れるが、その堆積土上面には奈良時代の遺構が検出され、また堆積土には多量の土器などの遺物を含んでいた。

検出した遺構は区画整理時の削平や、建物基礎の搅乱などを受けたため、それ程多くないが、比較的山面の残りの良い西半分を中心に遺構が確認された。遺構の主な時期は弥生時代中期末から奈良時代頃である。主な遺構は井戸4基、掘立柱建物2棟、水路1条、上坑、溝、ビット、包含層などである。西側段落ち部では水路に伴う水田面と取排水口を確認したが、小面積のため畦畔や足跡は確認出来なかった。遺物は包含層や水路を中心に弥生時代から奈良時代にかけての各時代の遺物が出土しているが、種類としては弥生時代のものが圧倒的に多い。総量はコンテナで64箱を数える。水路や井戸からは祭祀遺物や木器類なども少量出土している。

2. 調査の記録

掘立柱建物

SB62 (Fig. 4, PL. 3)

調査区南側境界地で検出した1×1間の長軸方向をN-53°-Eに取る建物である。柱間規模は3.43m、2.50mを測り、床面積は8.58m²を測る。柱穴はいずれも隅丸長方形で、直径は70~80cm位、深さは40~60cmを測るが、底面のレベルは比較的揃っている。柱径は痕跡から20cm位である。掘方埋土は黒色粘質土と地山ブロックの混合土でよくしまっている。形態的に見て高床倉庫の建物であろう。

出土遺物 各柱穴から弥生土器の細片が出土しているが、2基の柱穴から須恵器の細片が3点出土している。1点は奈良時代の高台付窓の底部片である。

SB70 (Fig. 4)

SB62の北東側で検出した建物で、長軸方向をN-6°-Eに取り、SB62とはほぼ同一方向に近い。P1はSX47土器群下から確認された。形態的に1×1間の建物と考える。柱間規模は3.30m、2.33m、床面積は7.69m²を測り、SB62より少し小さい。柱穴は円形又は方形で直径50~80cm、深さは40cm位であるが、底面のレベルはややばらつきがある。柱径は痕跡から15cm強であろう。掘方埋土は黒色又は黒褐色粘質土で、地山ロームブロックを多く含む。P3は底面に長方形の縦板の痕跡が残る。SB62と同様高床倉庫であろう。

出土遺物 各柱穴から弥生土器の細片が出土している。中期末から後期初頭の口縁部片がある。

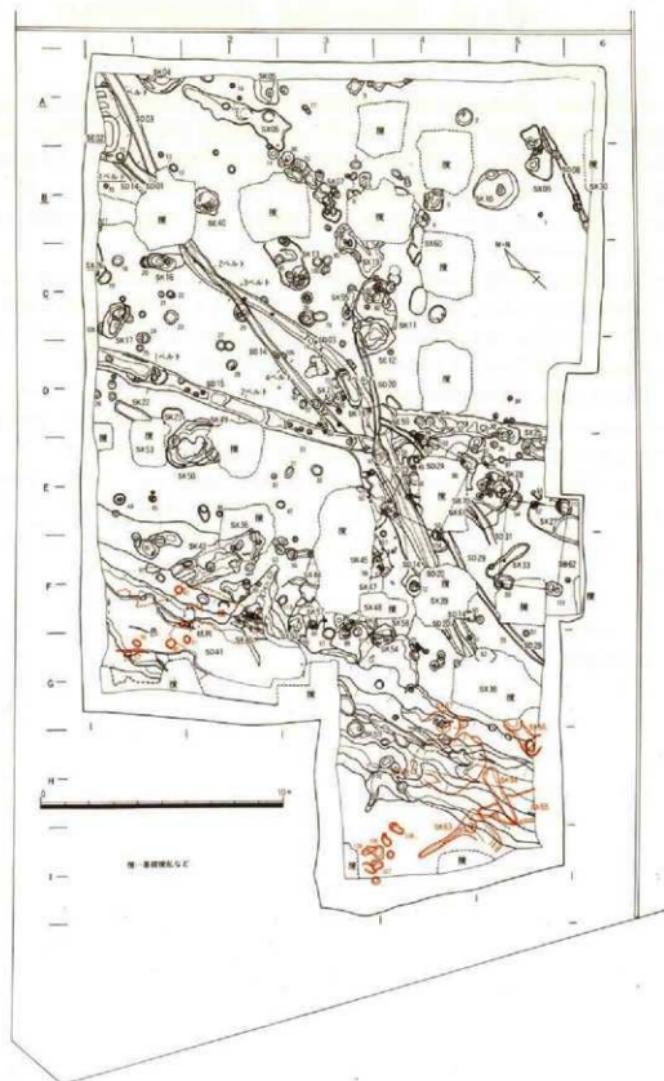


Fig. 3 比惠第41次地点遺構配置図

土坑 (SK・SX)

基礎搅乱、地山の汚れ、性格不明の遺構もふくめて、54基検出したが、ここでは主な遺構について報告する。

SK04

調査区東境界地で検出したもので、半分が調査区外にかかり、北側が搅乱を受けている。平面形は半円形を呈し、規模は南北2m、東西0.7m、深さは20cmを測る。底面は浅い皿状を呈す。埋土は暗褐色粘質土である。全容を検出したわけではないので、遺構の性格は不明。

出土遺物 弥生土器の細片らしきものが6点出土している。

SK11 (Fig. 5, PL. 4)

SE12に切られる不定形の浅い土坑。規模は長径2.14m以上、短径1.82m、深さ16cmを測る。東側半分はピットの切り合いで凸凹がある。西側部分に砾と土器片が散漫に出土しているが、まとまりはない。埋土は淡黒褐色砂質土である。

出土遺物 (Fig. 6) 弥生土器から土師器、須恵器の細片を少量含む。須恵器片から奈良時代位のものか。1は須恵器。合子状の器形で復元底径1/6片を測る。内外面回転ナデ。合子を模倣したものであろうか。

SK13

図示していないが調査区東側で検出した略長方形の浅い土坑。規模は2.4m×1.3m、深さは12cmを測る。床面はピットが切り合いで凸凹が著しい。埋土は暗灰褐色粘質土で、地山の汚れであろう。

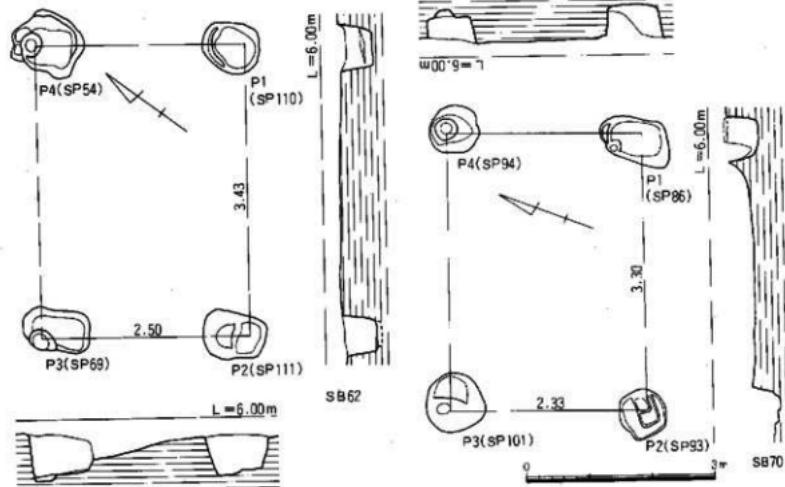


Fig. 4 SB62・70 (1/80)

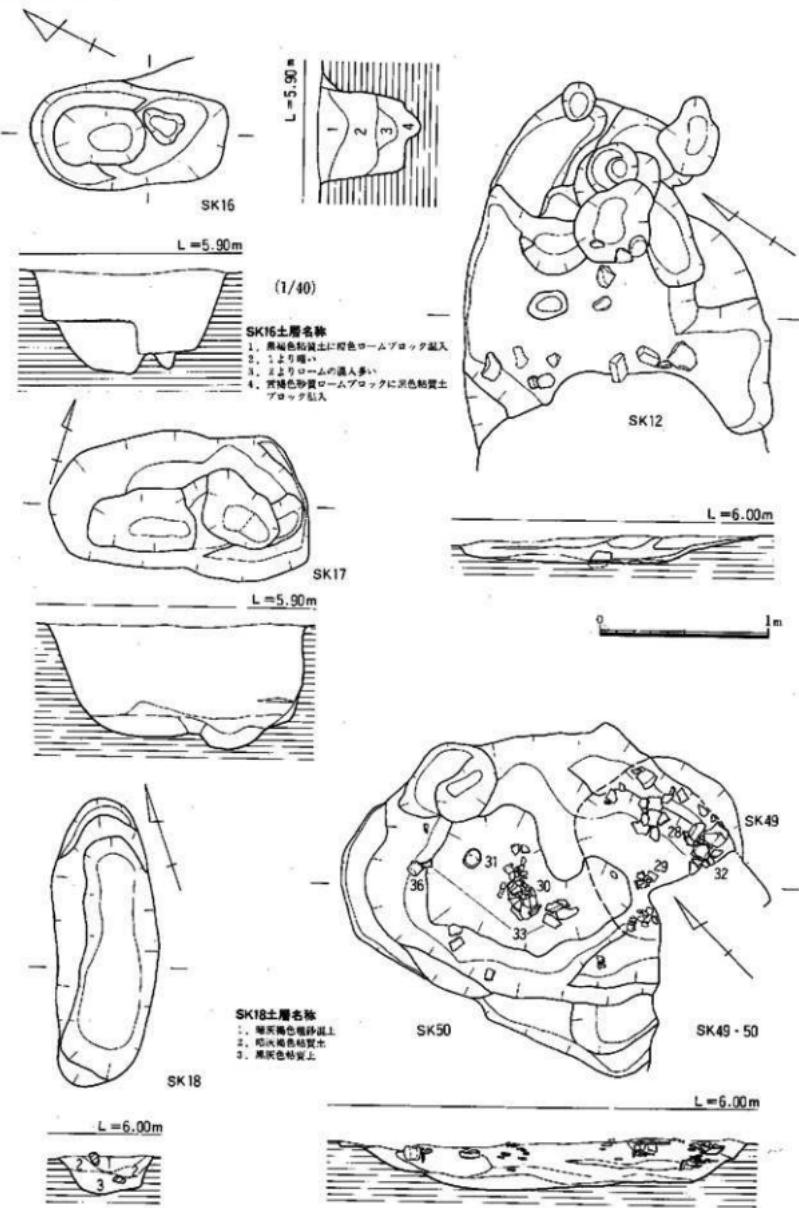


Fig.5 SK11・16・18・49・50 (1/30・1/40)

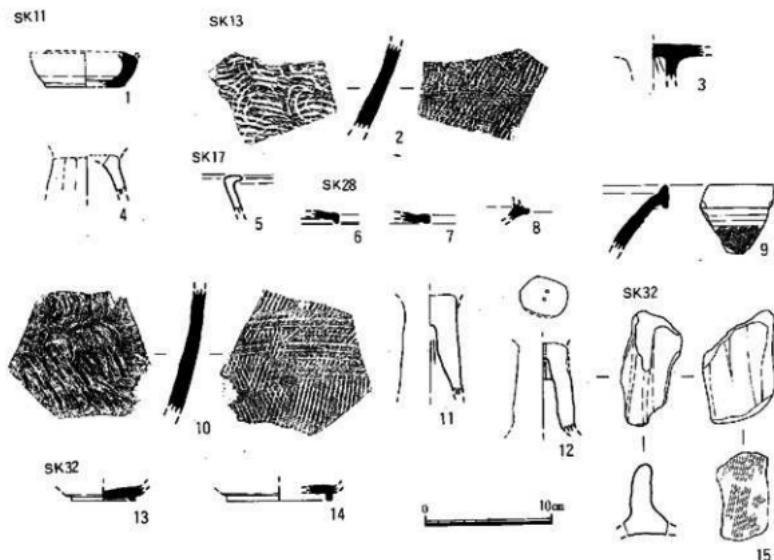


Fig.6 SK11・13・16・17・28・32出土遺物 (1/4)

出土遺物 (Fig. 6) 弥生土器・土師器などの細片を少量含むが、須恵器片を2点含む。2・3は須恵器の壺の脚部小片。外面木目直交の叩きで部分的にカキ目を施し、内面は同心円状のあて具痕と平行叩き痕が残る。3は高環脚部接合部片。内外面ナデで内面しばり痕が残る。

SK18 (Fig. 5, PL. 4)

調査区北東側で検出した、長軸をN-Wに取る隅長方形の土坑。規模は長さ1.56m、幅0.88m、深さは最大で60cm余りを測る。壁面の立ち上がりはかなり急であるが、北側と南側はそれぞれピット状に落ち込む。埋土は黒褐色粘質土を主体とし、橙色から黄色の地山ロームブロックを混入する。

出土遺物 (Fig. 6) 弥生土器片などが出土している。時期的には弥生中期後半以降のものを含む。4は上層より出土したもので土師器の高環脚部接合部片である。内外面はマツツが著しいがヘラ削りのちナデで、色調は橙色、胎土は粗砂粒を多く含む。

SK17 (Fig. 5, PL. 4)

調査区北壁近くで検出した、長軸を略東西方向に取る隅丸長方形の土坑。規模は長さ1.55m、幅0.87m、最大深さは76cmを測る。壁の立ち上がりは直立又はややオーバーハングし、底面は北壁沿いに狭いテラス状の高まりをもち、その南側は両側にピット状の落ち込みをもつ。床面は凹凸が著しい。

出土遺物 (Fig. 6) 弥生土器片がかなりの量出土しているが、時期的には後期頃の遺物を含み大半が細片である。5は弥生土器の短頸壺口縁部小片。口縁はやや内傾し短く外方へ屈折する。外面にぶい橙色で一部黒斑がある。胎土は精良。

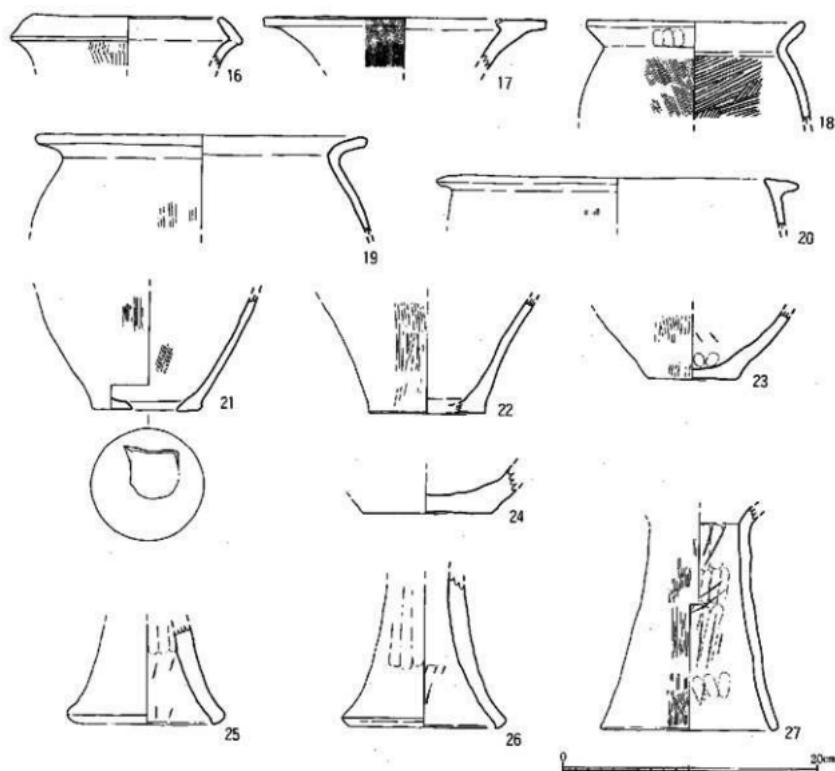


Fig.7 SK42出土遺物 (1/4)

SX18 (Fig. 5, PL. 4)

調査区中央で検出したSD14を切る長楕円形状の土坑。長さ1.70m、幅0.60m、深さ22cmを測る。土坑断面は逆台形を呈す。埋土は上層が暗灰褐色粗砂混土、粘質土を主体とし、下層が黒灰色粘質土となる。

出土遺物 (Fig. 6) 弥生土器から土師器・須恵器・白磁の細片を少量含む。奈良時代の高台付環や白磁小皿の底部細片を1点含む。42は砂岩製の凹石片。上面が使用によりやや凹む。現存長6.2cm、幅6.9cm、厚み4.1cm、重さ235gを測る。

SX21 (Fig. 8, PL. 4)

SX18の西側で検出した不定形の土坑。長径0.90m、短径0.73m、深さ15cmを測る。底面は中央を背にして北側と南側が深くなる。南北両側に直径2~5cmの打ち込まれた杭があった。底面北側には長径8~17cm位の自然石や割石が床面に密着して出土している。埋土は暗褐色砂混土で、周辺の遺構面には粗砂がかぶり、流水があった状況を示していた。このことから水田遺構の水口と考える。

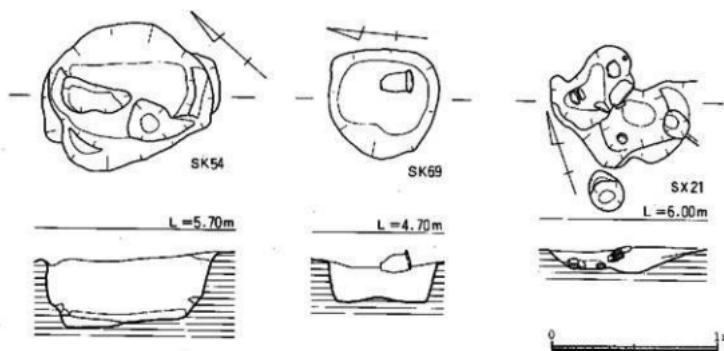


Fig. 8 SK54・69・SX21 (1/30)

出土遺物 (Fig. 12) 弥生土器から土師器、須恵器の細片を少量出土しているが、中世の須恵質土器の鉢底部片らしきものも含む。45は土師器の高環の脚筒部片、磨滅しているが、外面ハケ目、内面ナデ。65は砥石の破片。石質は砂岩で焼けている。

SK28 (Fig. 11, PL. 4)

調査区南壁近く、SB62を切る方形近い不定形の土坑で一部基礎搅乱で消滅する。規模は長径2.5m、短径2.0m、深さ10~34cmを測る。床面は平坦でなく凹凸が著しい。埋土は黒褐色粘質土である。

出土遺物 (Fig. 6) 弥生土器から土師器、須恵器の細片がややまとまって出土している。出土した須恵器から奈良時代であろう。6~10は須恵器。6・7は奈良時代の壺蓋口縁部小片。口縁部が短く屈折して立上がる器形。7は焼成がややあまい。8は壺身小片。小田富士雄氏の須恵器編年のIV期位であろう。9は甕の口縁部小片。口縁部が折返し直立する形態で外面櫛描波状文が入る。10は甕胴部小片で、外面は木目直交の叩きで所々条線を加え内面は同心円状のあて具痕のちナデ消す。11・12は土師器の高环脚部片。いずれも磨滅がひどいが、12はナデ。12は接合面の頂部に2ヶ所の径2mmの張り穴のような穿孔がある。12は胎土に赤色粒子を含み、焼成はややあまい。

SK32

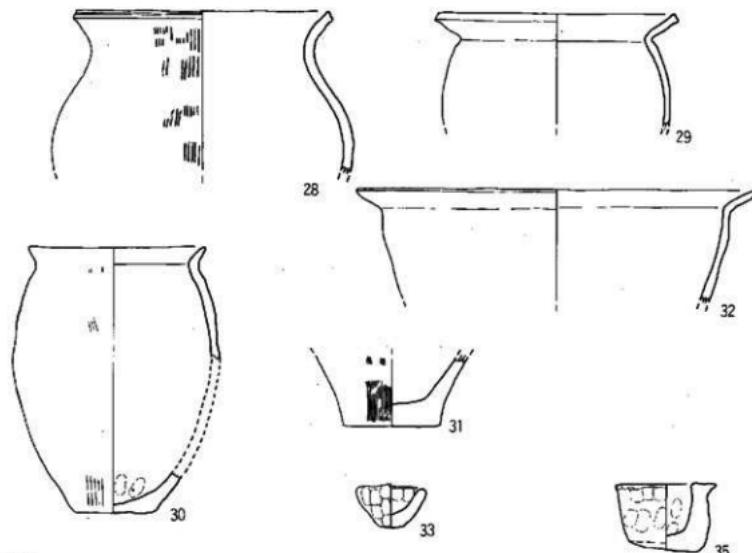
SK28の東側で検出した長辺7m、幅1.4~1.7mを測る。溝状の土坑・深さは最大で22cm程で浅い。床面は東側が深く、西側が一段高くなり、ピットなどと切り合いかつて山面が汚染されていたのか、凹凸が著しい。埋土は灰味がかった黒褐色粘質土で上面にマンガン粒子を含み下層には地山ロームブロックを含む。一部はSD15から統一溝の可能性もあるが、ここでは一応土坑の内に入れておく。

出土遺物 (Fig. 6) 弥生土器から土師器、須恵器の細片をやや含む。須恵器の形態から奈良時代であろう。13~14は須恵器の高台付環1/3片、1/8片。復元高台径は5cm、8.4cmを測る。13がやや小ぶりの器形である。13は胎土に黒色粒子を含む。14の外底には自然釉がかかる。15は土師器で移動式カマドの飼の部分である。全体に磨滅が著しいが内面は刷毛目が残る。61は小型の不明土製品で扁平な楕円形でく字状に屈折する。長さ2.5cmを測る。

SK42 (Fig. 10, PL. 5)

調査区北西隅黒色の包含層を撤去した所で検出した不定形の土坑。南東端部は搅乱によってやや削

SK49・50



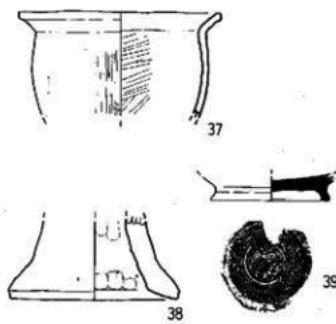
SK54



SK68



SK68



0 10cm



0 10cm



Fig.9 SK18・49・50・68・69出土遺物 (1/3・1/4)

平を受ける。規模は長さ4.1m、最大幅2.1m、最大深さは35cmを測る。断面は船底形を呈し、東壁側からだらだらと深くなり、西壁寄りに深くなり、壁の立上がりはやや急となる。底面にはビットが切り合ひ、凹凸があり、SD41に向かって水が流れたような溝状の落ち込みがあり、わずかに傾斜を持つ。埋土は上層が淡黒褐色砂礫混土、下層が黒色粘土に黄白色ローム粘土ブロックを多く混入する。底面は黄白色ロームブロックである。

出土遺物 (Fig. 7, PL. 8) 弥生土器がコンテナ1箱出土しており、出土量は多い。時期的に中期後半から後期中頃の遺物を含む。16・17は壺。16は口縁部1/4片で、復元口径15cmを測る後期中頃の複合口縁壺。17は鋤先状の口縁部小片。外面は丹塗りで細かいタテハケ。16の胎土に赤色粒子を多く含む。18~20は甕の口縁部片。18はく字状の口縁部1/4片で、復元口径17.5cm。内面は粗いハケ、外面は細かいハケ。19は1/6片。口縁の外折の度合が強い。復元口径26cm。磨滅がひどく、外面ハケがかかるに残る。20はやや外傾する逆L字形の口縁部1/6片で、磨滅がひどいが外面ハケがかかるに残る。21~23は甕の底部片。底径8.8cmを測る。21は底部に3.8×3.8cmの方形の穿孔がある。焼成後の下からの穿孔である。外面磨滅がひどいがハケ目が残る。22は1/4片で、復元底径9.2cmを測る。外面ハケ目が残るが、内面は剥落する。23はやや膨らみを持った底部片。底径7cmを測り、外面は粗いハケ目、内面へラ状工具痕が残る。24は壺の底部片か。底部の器壁はやや厚手で雑な仕上。23・24は5mm以内の粗砂を混入する。25~27はくびれ部を口縁部下に持つ器台の底部片。残存率は1/4片、1/8片、口縁部欠失で、復元底径は10.6cm、11.5cm、14.1cmを測る。25・26の内面には工具痕が残る。27は外面は磨滅するがタテハケ、内面は指おさえのちナデでヘラ状工具による調整を加える。25~27は粗砂を多く含む。16・20・22・25・26は上層。19は下層出土。18・19は上層・下層と接合した。

SX46 (Fig. 10, PL. 6)

調査区西側SD41の東壁を上端が狭く底面近くが広がるように掘り込んでいる造構である。掘り込みの規模は溝底から奥行き約3m、幅3mを測る。底面は階段状に掘り込まれ、その段は6段を数える。蹴上げの高さは12~20cm位で、下の部分ほど蹴上げ、踏み面が広くなる。下方の二段分には建築の部材らしき板材を基に木の小枝などを用いて踏み面に足置き場を確保できるような造作を加えていた。水路SD41を掘り下げる時点で確認したもので、溝に関連する造構である。水流み場か、溝底に降りる前の造構であろうか。

出土遺物 (Fig. 28, PL. 10) 弥生土器の甕や器台など破片や建築材などが出土している。206・207は同一材で建築材。206は板目の板材で、全長18.9cm、幅6.2cmを測る。中央に3.8×2.6cm以上のぼぞ穴があり、削り痕が残る。207は全長93.5cm、最大幅9.2cm、厚さ3.1cmを測る。両面には削り痕が残り、左から20cm、40cm、20.4cmとはば20cmの倍数の間隔で目釘穴が残るが、右側の2孔は貫通していない。206・207の全体の長さは112.4cmを測る。材質は椎。208も板目の板材で現存長132.7cm、最大幅8.5cm、厚さ2.8cmを測る。表面には削り痕が残り、しっかりした造り。先端は削られ尖る。建築材の転用か。材質は椎。

SX47 (Fig. 11, PL. 6)

調査区4F区で検出した造構。地山面のだらだらとした落込みの中に土器が集中する部分があつたため、不明土坑として番号を付し土器を取り上げた。落込む範囲は東西4m、南北1~7m位の範囲で北に向かって深くなって行く。最大深さ40cm位を測る。南側は上面にSD14が切る。埋土は黒色粘質土である。

出土遺物 (Fig. 12, PL. 8) 遺物量は多くコンテナ1箱程である。時期的には弥生後期後半位のもの。主なものについて述べる。47は小型の甕ではば完型。口径9.8cm、器高14.1cmを測る。胴内外面

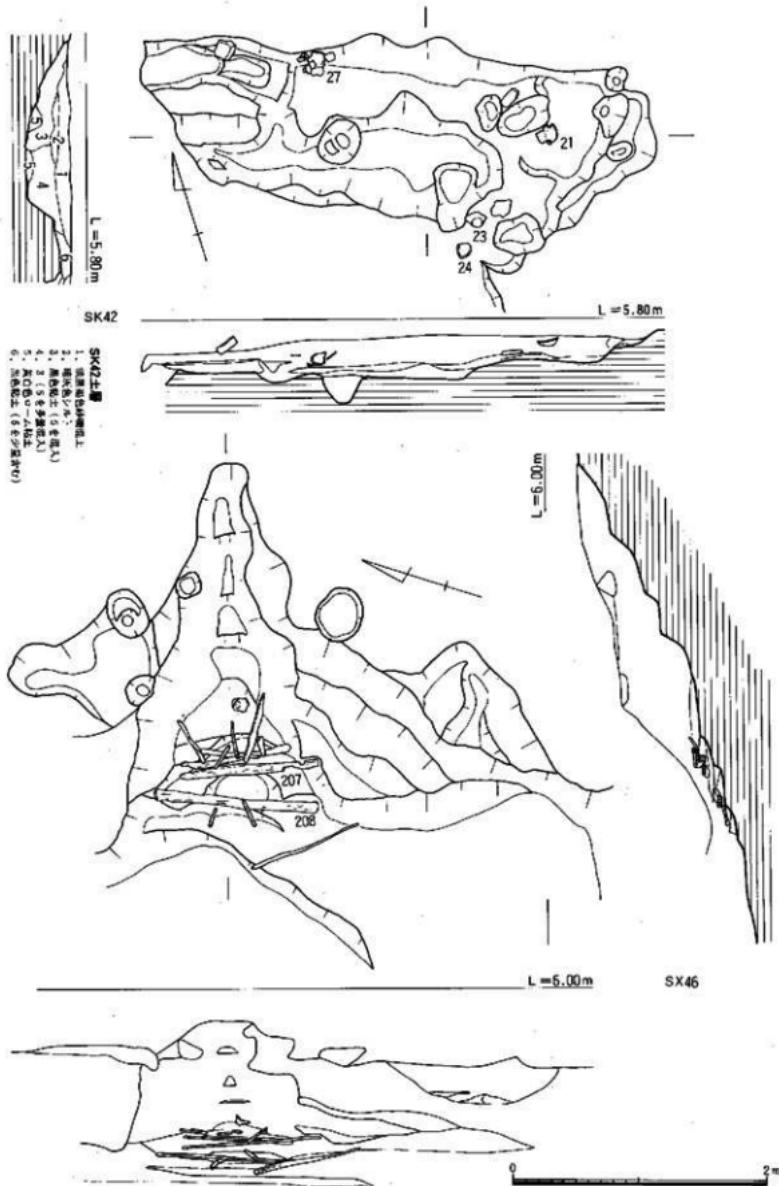
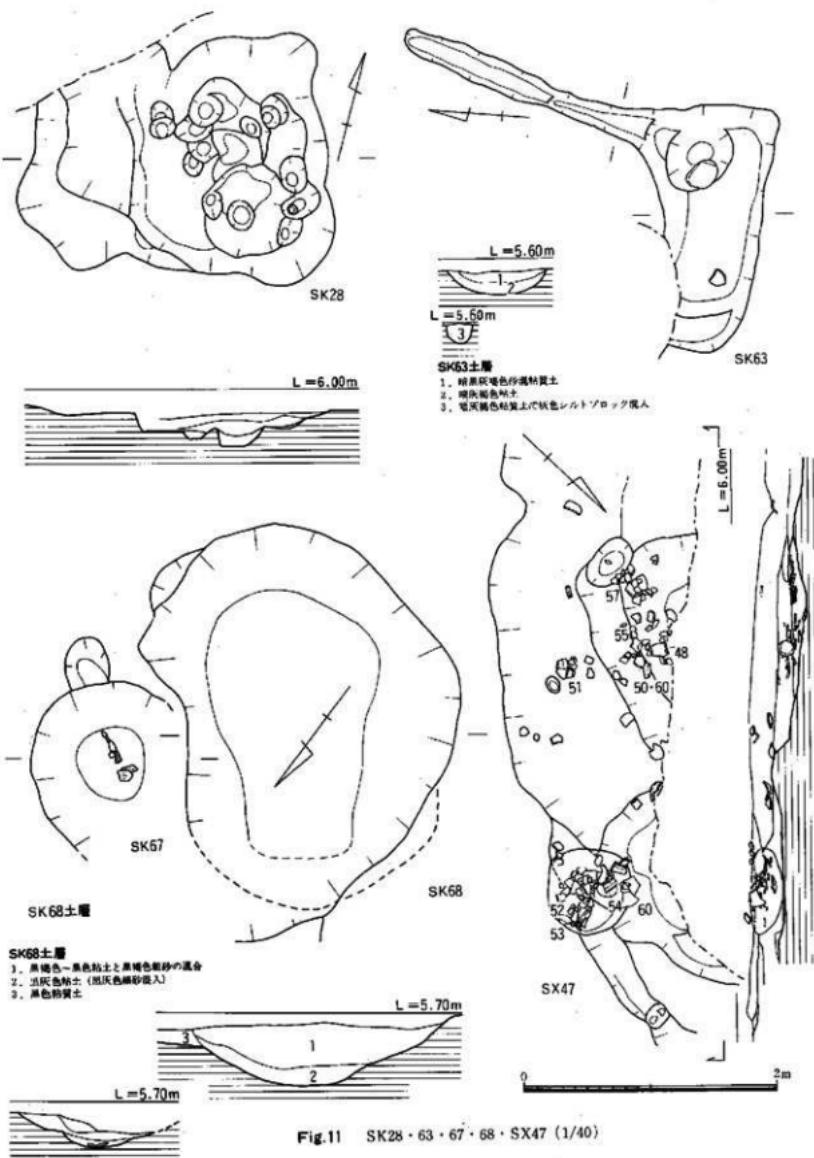


Fig.10 SK42・SX46 (1/40)



はハケ目、口縁はハケのちナデ。48~50は壺で、48は口縁部が複合口縁をなすもの。口径16.4cmを測る。調整は口縁から頸部内外面ハケとナデ。49は鋤先状口縁の1/8片。50は胴部片で頸部の境に1条の突帯が巡る。胴外面はクテ・ナナメのハケ。51はの口縁部小片。復元口径18.3cmを測る。内外面ハケ目を加える。52~56は底部片。52~54は甕で、52・53の底部はわずかに凸レンズ状を呈す。54の内底には黒色の付着物がある。55は壺の底部片。外底部にハケ目を加える。56は壺底部片である。胴部に一条の三角突帯が巡り、内面は細かいハケメを加える。鉢の可能性もある。57は高環接合部片。外面はナデか。58は鉢1/4片で、復元口径12.5cmを測る。口縁部直下に穿孔がある。59は円筒状の器台口縁部1/5片、復元口径14cmを測る。くびれ部は口縁直下にある。60はとび11状の支脚ではば完形。器高11cm、底部径12.6cmを測る。頂部はやや傾斜し、中央に2×1.3cmの楕円形孔がある。62・63は土製の投弾。62が長さ3.4cm、63が2.4cmで両端が欠失する。最大径はそれぞれ1.9cmを測り、重さは9.8g、9.5gを測る。

SK49・50 (Fig. 5, PL. 5)

調査区北壁寄り2F区で検出した不定形状の土坑。当初別個遺構と考え番号を付し遺物を取り上げたが、土層・充填状況から、まるきり別個とは考えにくいので同一として報告する。長さ2.4m、幅2.07m、最大深さ30cmを測る。底面は階段状に深くなっている、最も深い所は北西側にある。埋土は上層が黒褐色粘質土で下層が橙色ロームブロックと黒褐色粘質土の混合となる。遺物は土坑中央部と南東壁際に床面よりやや浮いた状態で出土している。

出土遺物 (Fig. 9, PL. 8) 遺物の出土量は多く、コンテナ1箱ほどである。弥生時代後期中頃の遺物を含むが須恵器片も1点含む。混入品である。28は壺の口縁から胴部1/6片。復元口径20cmを測る。しまりのない頸部から外済する口縁部を持ち、口端部は軽い凹線が巡る。外面は粗いハケ。29・30は甕。29は丸胴部からく字状に外折する口縁で、復元口径18.6cmを測る。器壁は磨滅がひどく調整不明。30は1/3片で、長胴の胴部に短いII縁がく字状に外折する器形。復元口径14cm、器高21.2cmを測る。全体に磨滅がひどいが、外面ハケ目、内面はナデ。31は甕の底部片。32は大形の鉢で、く字状の口縁部を持つ小片。内外面は調整不明。33~35はミニチュアの鉢形土器ではば完形品。口径は5.4cm、8.0cm、8.0cmを測る。33・35は手づくね、34はヘラナデか。

SK54 (Fig. 8, PL. 5)

調査区西側、SD41の東側、土器群SX58の下で検出した隅丸長方形の土坑。規模は長さ1.07m、幅0.86m、最大深さ45cmを測る。断面は逆台形を呈し、底面は平坦で、2カ所のピット状の落込みがある。埋土は上層が黒色粘質土、下層は黒色粘質土に黄白色地山ロームブロックを混入する。

出土遺物 (Fig. 9) 遺物の出土量は中ビニール袋3袋程で、甕や丹塗り土器片を含む。36は弥生土器の甕口縁部小片。逆く字形のII縁で、口縁下に1条の突帯が付く。中期中頃のものか。

SK63 (Fig. 11, PL. 5)

西側II区上面で検出した不定形の土坑。南北主軸の長方形の本体から西に細く溝状の延びる張り出しが付く。規模は南北に1.95m、東西3.1mを測り、底面は南と西からテラスを持って階段状に深くなり最大深さ20cmを測る。ちょうど屈曲部のところに0.6×0.5m、底面からの深さは10cm程の浅い楕円形状のピットがあり、その上面に25cm前後の疊があった。埋土は暗灰褐砂泥粘質土で下層は粘性が強くなる。造様の性格はわからない。

出土遺物 弥生土器の甕などの破片ほか移動式のカマドらしき破片も出土しており、古墳時代後期から奈良時代位の時期であろう。

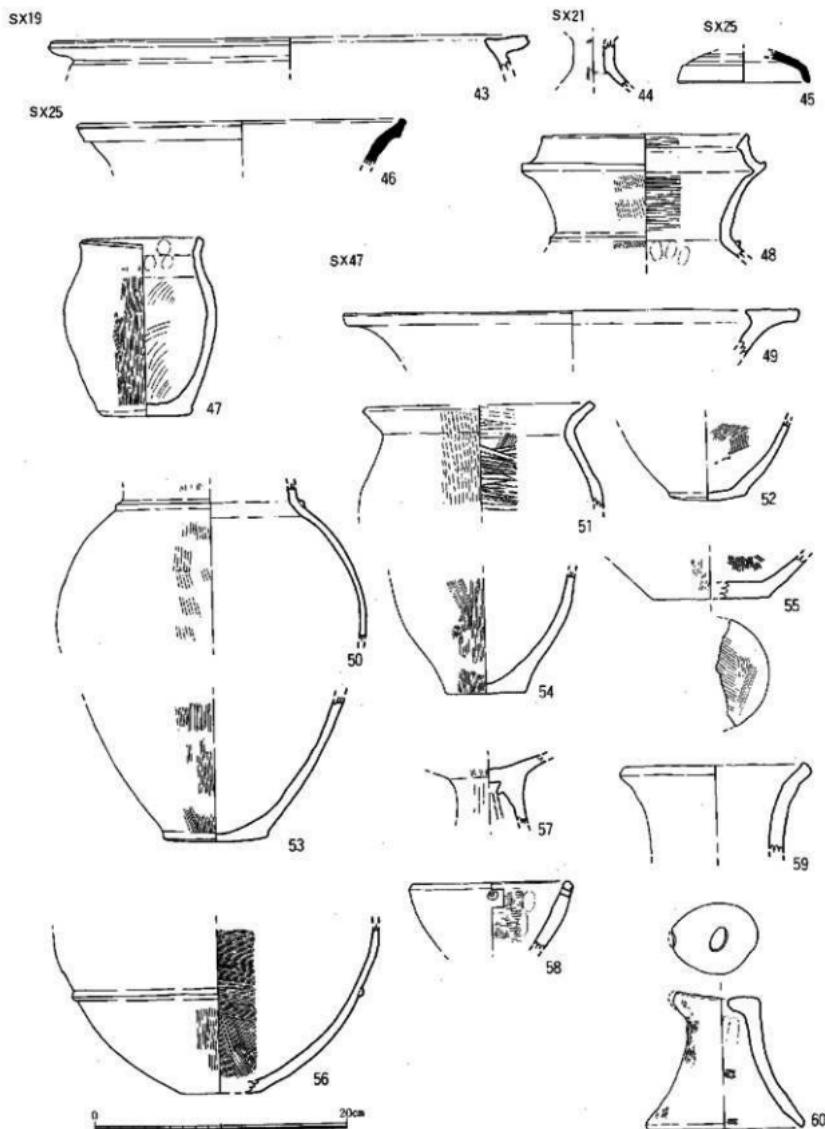


Fig.12 SX19・21・25・47出土遺物(1/4)

SK67 (Fig. 11, PL. 5)

II区上面で検出した略円形を呈す土坑で、SK68に西側を切られる。全容は不明。規模は長径1.4m以上、短径1.2m以上、深さは28cmを測る。底面は平坦面を持たず、中心に向けて深くなる。底に密着して木片が出土している。埋土は黒色粘質土である。出土遺物はない。

SK68 (Fig. 11, PL. 5)

II区上面SK67西側で検出した不整橢円形状の大型土坑で、北側は不明。長径は推定で3m、短径2m、深さ最大で56cmを測る。底面は平坦面がなく、中心部に向かって緩やかに深くなる。埋土は黒褐色粘質土と黒色粘土の混合で、上面は鉄分が沈殿し固く締まる。下層は黒灰色粘土である。人為的に埋めた状況を示す。

出土遺物 (Fig. 9) 弥生土器片が主に出上しているが、他に須恵器片を含む。37・38は弥生土器で、37は小型の鉢か甕の口縁から胴部1/8片。復元口径18cmを測る。胎土に赤色粒子を含む。38は器台脚部1/4片。胎土に粗砂を多く含む。いずれも後期後半のもの。39は赤焼けの須恵器の高台付坏底部片、高台径9.4cmを測る。外底部にヘラ記号が入る。7世紀後半代のものか。41は土製の円盤。径4.7×5.1cm、厚み0.8cmを測る。縁辺は擦って成形している。

SK69 (Fig. 8, PL. 5)

II区SD41底面で検出した不整隅丸方形の土坑。規模は0.56×0.64m、最大深さ30cmを測る。壁面は比較的急で底面は平坦。埋土は黒色の軟質粘土で下方に木の枝、葉、種子などがあった。また上面に完形の甕40が横たわっていた。

出土遺物 (Fig. 9, PL. 8) 40は弥生土器のほぼ完形の甕。口径14.1cm、器高16.5cmを測る。外面粗い刷毛、内面へラ状工具のナデ。全体にややいびつである。胎土に砂粒と赤色粒子を含み、焼成は良好。

その他の土坑出土遺物 (Fig. 12)

SX19出土遺物 SK11北側で検出した不定形状の浅い土坑で、床面は凸凹が激しい。43は弥生土器の甕口縁部1/8片。中期後半位のもの。64は石鎚か凹石で石質は花崗岩。扁平な橢円形の石材で上下両面磨かれており、両側辺にわずかな欠き込みがある。重さ265gを測る。

SX25出土遺物 45・46は須恵器で、45は坏蓋破片、46は甕口縁部破片。

井戸

SE02 (Fig. 14, PL. 3)

調査区北壁東側半分が調査区外にかかる井戸。現状での確認規模は長径2.96m、短径1.4m以上、深さは1mを測る。平面形は現状で隅丸方形の井戸本体から東側に底面が階段状を呈す張り出し部分を持つ。井筒などの内部施設は調査では確認できていない。素掘りの井戸であろうか。埋土は上層が黒褐色土で下の方ほど粘性が強く、また壁からの崩落土の赤褐色の地山ローム粘土を多く含み、軟弱となる。

出土遺物 (Fig. 15) 弥生時代から土師器・須恵器の細片を少量含む。66・67は須恵器の甕口縁部小片。66は口端部は稜を持って直立し、断面三角状を呈す。上層出土。67は口頭部小片で、外面木目直交の叩きのちかき目、内面は同心円状の叩きのちナデ。

SE12 (Fig. 14, PL. 4)

SK11を切る井戸。ほぼ円形で規模は $1.40 \times 1.64m$ 、最大深1.15mを測る。底面はすぼまり、先端は不定形状に一段落ち込む。壁面は上面から50cm下位のところで最大20cm位奥に抉れ、このあたりまでが湧水点であったのであろう。井戸の埋土は暗灰褐色粘質土で地山ロームブロックを含むが、下層部粘性が強く、灰色粘土に変わる。

出土遺物 (Fig. 15) 弥生土器から土師器、須恵器片を少量含み、黒曜石片を1点含む。68は須恵器の長頸壺か高台付環の底部1/6片。復元高台径12.5cmを測る。外面ナデ。8世紀前半のもの。

SE40 (Fig. 15, PL. 3)

北東部で検出した上面が隅丸方形、下面が円形を呈す井戸。規模は上面で $0.95 \times 1.0m$ 、深さ1.3mを測る。断面はほぼ円筒状であるが上端から70cm位下から壁が抉れ、このあたりが湧水点であったと考えられる。湧き水がひどく底面は軟弱であった埋土は黒色粘土で下の方ほど泥土に近くなる。底近くに木器や木材、完形の長頸壺などがあり、上面部には大形の成人甕棺の破片約2個体分廃棄されたような状態で出土している。

出土遺物 (Fig. 16・17・28, PL. 9) 各層から多量の土器が出土している。底の方からは木器や木の実、石器類も若干出土している。

72~79は上層出土。72は丹塗の短頸壺、1/6片で復元口径17.5cmを測る。73は鋤先状口縁を持つ壺口縁部1/6片で、復元口径37.5cmを測る。口端部にヘラによる刻目を持ち、内外面ナデ。74~76は甕。74・75は逆L字形の口縁部片。74は1/8片、75は1/6片で復元口径は32cm、34cmを測る。76は底部片。73・74・76は砂粒以外に赤色粒子を含む。77は中空の支脚1/2片。全面指おさえ仕上げ、78~79は上層に廃棄されていた甕棺片。大半が小片で完形に復元出来なかった。いずれも頸部が締まり、口縁部は逆L字形を呈し、口縁下に一条の三面突帯が付く。口縁内は打ち欠かれている。78は1/6片で復元口径46.2cm、79は1/8片で45.5cmを測る。79は胴部中央に2条の突帯が巡る。器壁は磨滅が著しく、外面はわずかに刷毛が残る。

80~87は下層出土。80~82は甕。80・81は長頸の甕で、80は復元完形、81は完形品、器高は25.8cm、31.7cmを測る。82は横位で出土している。いずれも口縁部は鋤先状を呈すが、意図的に打ち欠かれている。打ち欠いた破片は井戸内に捨てられていた。いずれも外面は丹塗りで、80はヘラによる暗文が入る。突帯は80が頸部と胴部に1条、81は3条巡り、胴部の穿孔は80が2ヶ所、81が1ヶ所ある。調整は80の外面は丁寧なヘラ研磨で底部は5分割でヘラ研磨を施す。81はナデで底部近くはハケ目。焼成はいずれも良好。82は甕の胴・底部部1/2片で丹塗り、外面はヘラ研磨、内面はナデ。83~85は甕。83・84は口縁部片。83は1/6片で復元口径21.6cmを測る。調整はハケのち丁寧なナデ。84は1/6片で復元口径30cmを測る。器壁の磨滅は著しく調整不明。口縁部内面近くはハケ目が残る。85は甕底部1/2片。外面はタテハケ。内面ナデで丹塗り。外底は雑な仕上げ。85は胎土は精良で赤色粒子を少量含む。

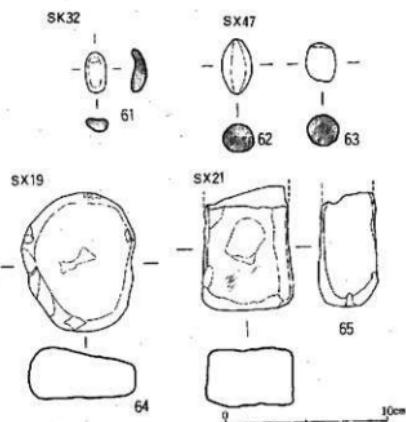


Fig. 13 SX19・25・47・SK32出土遺物 (1/3)

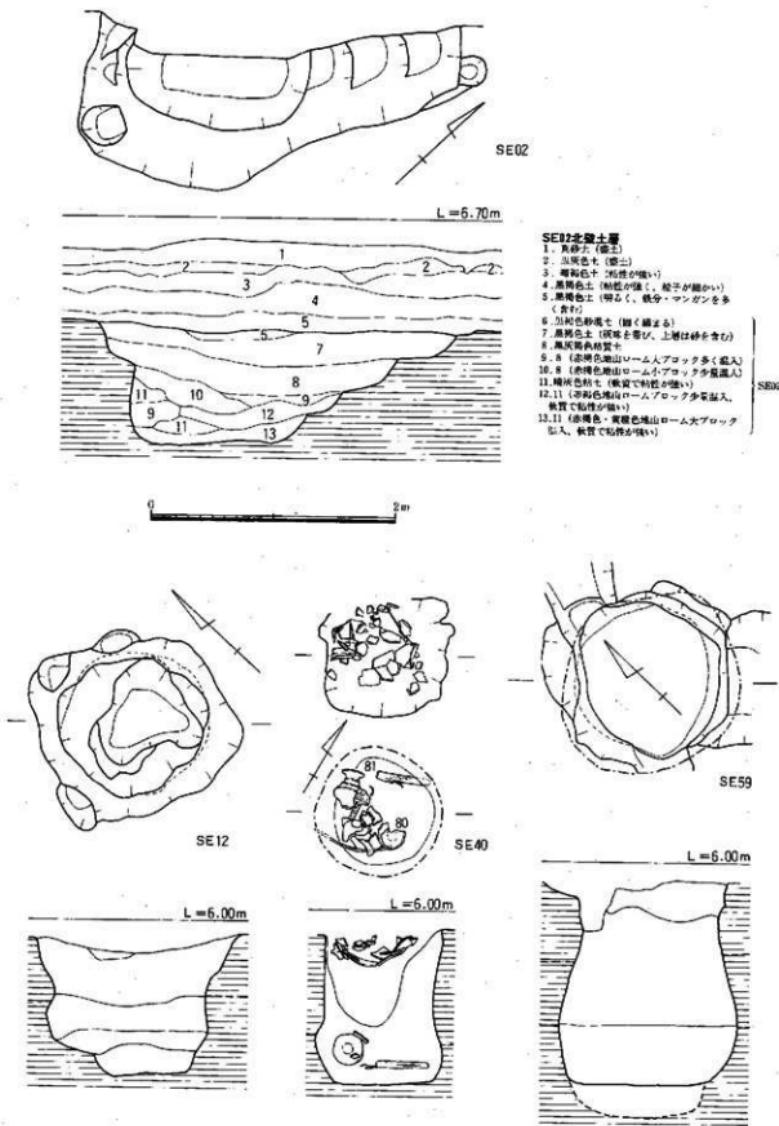


Fig.14 SE02・12・40・59 (1/40)

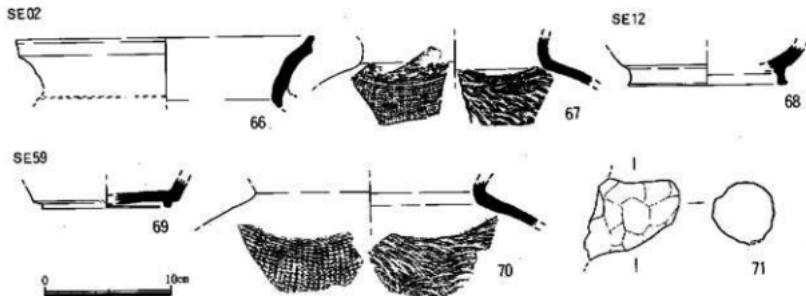


Fig. 15 SE02・12・59出土遺物 (1/4)

86は長頸壺の胴底部を打ち欠き鉢に転用したもの。器高12.3cmを測る。磨減がひどいが外面はナデでハケ目が残る。胎土は84~86は赤色粒子をふくむ。87は精円形状を呈す土製品。長さ2.1cm、直径1.7cm、重さ3gを測る。胎土は精良。203は長方形の扁平な柱目の杉の板材で、長さ14.6cm、幅3.6cm、厚み0.9~0.7cmを測り、両端が鋭角に加工されているが、両側面は削目が残り、いきていない。箱形容器の蓋の一部の可能性がある。

SE59 (Fig. 14, PL. 4)

調整区中央部、SD20、SK32の下で検出した円形の井戸で、規模は1.4×1.22m、深さ1.62mを測る。黄白色の八女粘土層迄混んでおり、湧き水の為か井戸底は非常に軟弱であった。上端から約20cm下の地点から周壁が抉れており、最大20cm位奥に入り込んでいる。あたかも断面はピヤゲル状の形態を呈す。埋土上層は人頭大の花崗岩の焼けた円礫群が流れ込んでいた。埋土は黒褐色粘質土で下層程灰味と粘性が強く、壁からの崩落土を含む。

出土遺物 (Fig. 15) 弥生土器から土師器・須恵器の細片を少量含む。69・70は須恵器。69は奈良時代の高台付坏1/4片で、復元高台径10cmを測る。70は甕頸部1/5片で、外面格子目叩き、内面は同心円状のあて具痕が残る。焼きぶくれする。いずれも胎土は精良。71は土師器の把手で指おさえ仕上げである。

溝状通槽

SD41を除けばいずれも小溝で北東から南西方向に流れる流路である。

SD01 (Fig. 18)

調査区北東隅、SD14を切り、北東側はSE02、南西側は搅乱に切られ、確認した部分は少ない。確認長1.9m、幅0.4~0.6m、深さ4cmを測る。埋土はやや粘性のある褐色土である。

出土遺物 (Fig. 19) 弥生土器から土師器・須恵器の細片を少量含む。88は須恵器の高台付坏底部1/6片で、復元高台径10.6cmを測る。やや丸底を呈す底部に外に聞く短い高台がつく。胎土は精良で焼成はやや甘い。89・90は土師器の把手で、残りは悪いが、指おさえ痕が残り、胎土に粗砂を含む。

SD03 (Fig. 18, PL. 3)

調査区を北東から南西へわざかに湾曲して貫流する小溝。SD14とSD20に切られ、南西側の先端は不明。溝幅は0.4~1.0m、深さは30~45cm位で、溝断面形は中心が深くなり船底形を呈す。埋土は灰味が強い黒褐色粘質土で、下のほうは赤褐色ロームブロックを混入する。水口と考えられるSX21が西側に

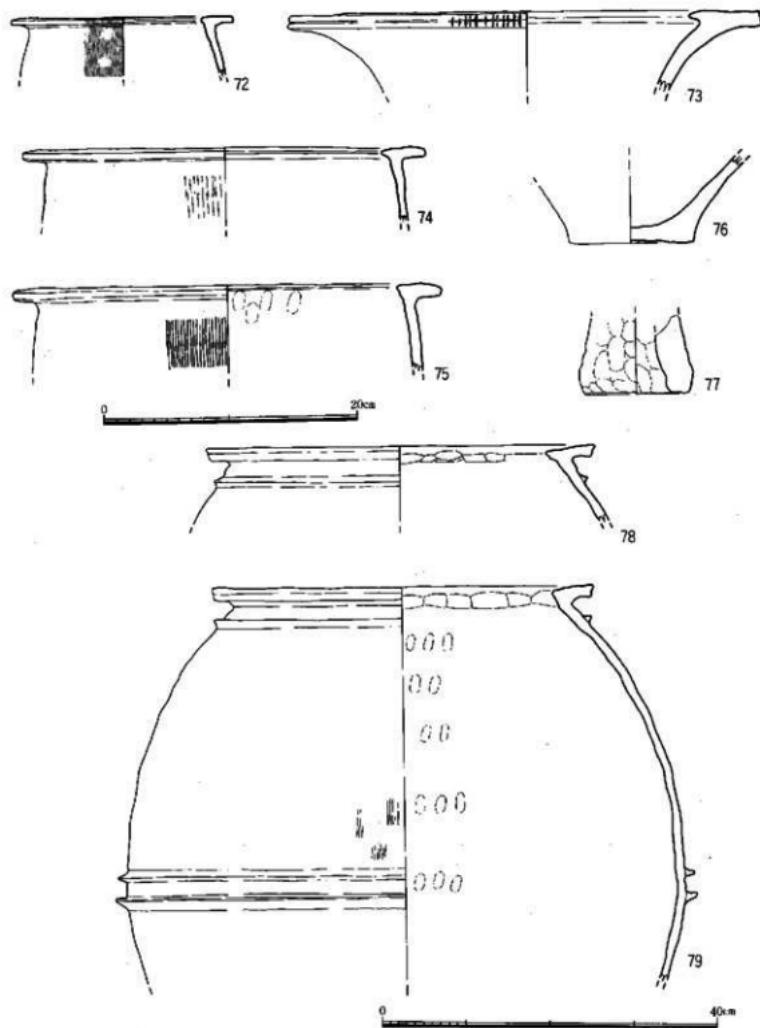


Fig.16 SE40出土遺物 1 (1/4・1/6)

隣接しており、底から西側に粗砂が流れた跡があり、水田に伴う水路の可能性がある。

出土遺物 (Fig. 18, PL. 9) 弥生土器から土師器、須恵器片がコンテナ 2 箱弱出土している。大

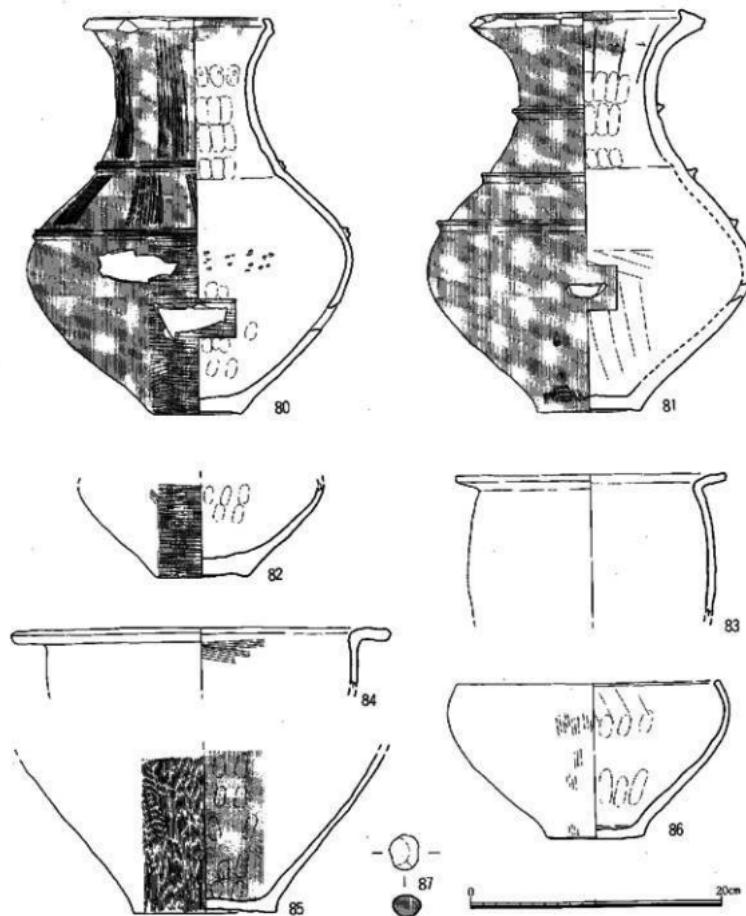


Fig. 17 SE40出土遺物2 (1/4)

半が弥生土器片であるが、奈良時代の須恵器も含む。91～99は須恵器。91・92はⅣ期の壊身小片。復元口径は91が11cm、92がやや不正確で口縁部の立上がりは直立する。胎土は比較的良好。内外面ナデ。93～95は壊蓋。93・94は扁平な天井部で口縁部が短く内折して直立する器形。4は黒色粒子を含む。95は扁平なつまみが付くもの。93～95迄奈良時代のもの。96～98は高台付壊でいずれも小片。復元口径は97が9.4cm、98が7.8cmを測る。短いコ字状の高台が付く。胎土は93～98まで細砂粒を含むが精良、焼成は良好。99は甕肩部細片。外面自然釉がかかり、焼き影れる。内面はナデ。胎土に粗砂を含む。



Fig. 18 SD03・14・15・20土層 (1/30)

0 1m

100~103は土師器。100は壊底部1/6片。磨滅が著しいがろくろ引痕が残る。焼成はややあまい。101は高环脚部片。筒部は中実である。内外面ナデ。102・103は把手で指おさえのちナデ。100~102共砂粒以外に赤色粒子を含む。115は石斧片で、現存長3.8cm、幅3.9cmを測る。右側刃に欠き込みがある。安山岩質の石材である。

SD08

調査区南東隅で検出した小溝。確認長は約5m、幅は0.3m、深さ3cm位で浅い。埋土は暗褐色粘質土である。新しい時期の水田に伴う溝であろうか。出土遺物は土器の細片が少量出土している。

SD14 (Fig. 18, PL. 3)

調査区北東から南東側へ、SD03と絡まりあって蛇行して延びる小溝。SD03を切る溝であるが、SD03よりは浅い。溝幅は0.4~0.8m、深さ10cm位を測る。溝断面は逆台形で、埋土は黒灰色粘質土で、上面にマンガン粒子が沈殿する。一部礫がまとまって出土している所もあった。

出土遺物 (Fig. 19) 弥生土器から土師器・須恵器の破片がコンテナ1箱程出土している。細片が多く、奈良時代の須恵器片、カマド片が少量出土している。104は土師器の高台底部小片。底部中央に直径7mmの円孔がある。105は内黒土器底1/3片で、復元高台径7.2cmを図る。内面はヘラ研磨で、外面は磨滅するがナデ。いずれも細砂粒を含むが精良。104は二次的加熱を受けもろい。117は凹石又は敲石。長さ10cm、幅7.7cm、厚さ4.4cmを測る。各面に使用痕が残る。石質は目の粗い砂岩。

SD15 (Fig. 18, PL. 3)

調整区中央を北から南へ流れる溝であるが、中央部でSD20・14などと切り合う。南北分の続きは不明だが、SK32につづく可能性がある。幅は6.7~1.4m、深さは25cm前後を測る。溝断面は逆台形を呈すが、底面はピットや落込みがあり一定していない。埋土は上層が黒褐色粘質土で上面にマンガン粒子を含み、下層はそれに地山ロームのブロックを多く含む。

出土遺物 (Fig. 19, PL. 9)

弥生土器から土師器・須恵器片を含み、もろくなってはいたが獸骨

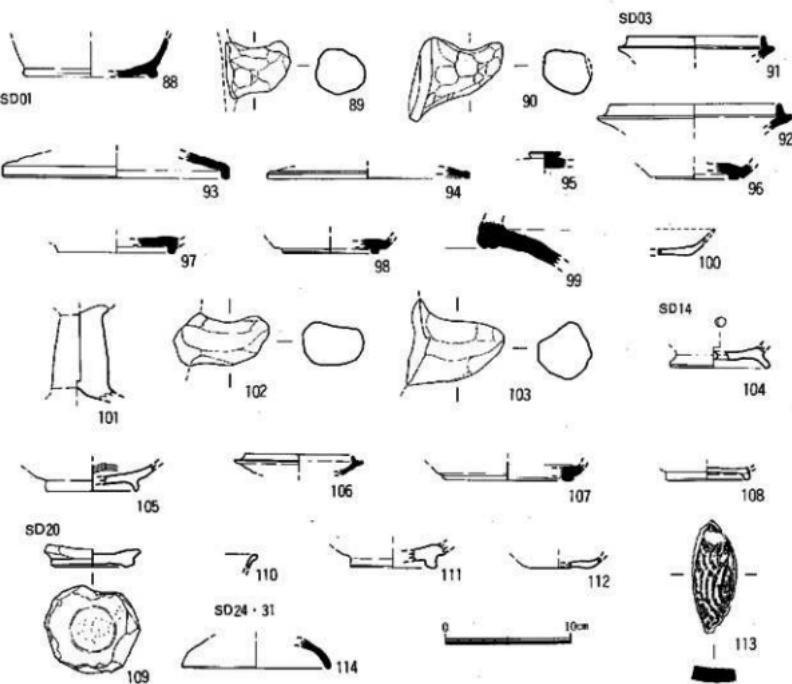


Fig.19 SD01・03・14・15・20・24出土遺物 (1/4)

なども含んでいた。106・107は上層出土でいずれも須恵器。106は环身小片でⅣ期のもの。107は高台付環底部1/6片。復元高台径10.3cmを測る。短い高台が付く。焼成はやや軟質。108も上層出土で、黒色土器椀の底部1/3片か。復元高台径6.7cmを測る。胎土は精良だが、焼きはあまり。116は上層出土の有溝石鏃、長さ57cm、幅1.4cmを測る。石質は粘板岩である。

SD20 (Fig. 18, PL. 3)

SE12から起点が始まり、西に延びるSD03・14・15などを切る小溝で、途中SD24が分岐する。溝幅は0.3~0.6mを測り、深さは10cm前後を測る。埋土は黒褐色土で、下層は黒褐色砂となり、鉄分が沈殿し固く締まる。

出土遺物 (Fig. 19) 弥生土器から土師器、須恵器片が出土するが、量はそれ程多くない。白磁碗口縁部小片が少量出土している。109~111は磁器、109は白磁碗の底部を円盤状に打欠いた玩具である。長径7.6cm、短径6.5cmを測る。110は口縁端部に丸味を持たせた白磁碗口縁部小片である。釉色はややにぶい黄白色。111は青磁碗底部の小片。疊付は擦っている。112は須恵器の小皿底部1/6片。復元口径4.8cmを測る。内外面ナデ。113は須恵器の甕胴部片を打欠いて船形に成形した不明製品である。玩具であろうか。

SD24・31

SD20に切られる小溝、擾乱を隔てて南西側のSD31に連続するものと思われる。SD14との関係は不明。埋土は黒褐色粘質土。

出土遺物 (Fig. 19) 弥生土器から土師器・須恵器片を含むが、量は少ない。115は須恵器の壺蓋1/8片。復元口径11.8cmを測る。内外面ヨコナデ。胎土は精良。IV期のもの。

SD29

SD20に切られて南西方向に延びる小溝で幅20~40cm、深さは4~10cmで、埋土は暗褐色粘質土である。

出土遺物 弥生土器から土師器・須恵器の細片を26点ほど含むが、時期を決めるものはない。

SD37

この溝はSD14又は20から続く溝である。埋土は黒褐色粘質土である。

SD41 (Fig. 22, PL. 2)

調査区I区西側からII区にかけて検出した主軸を磁北からやや西に振る溝である。この溝の西側は東岸より30cm程低くなり、水田面となる。溝の確認規模は25m、幅は4~5mを測る。深さは1.1~1.5mで軟弱な白色粘土層を通過している。溝の断面形は幅広のU字形である。溝の湧水はひどく、たえず排水をしないとすぐ水がたまる状況であった。溝は堆積状況から大きく2時期の洪水による埋没が見てとれる。堆積土は各期の溝とも粗砂、シルト砂の互層状態の堆積状況を示し、粘土堆積層は若干上面と下層に含むだけである。遺物は各層から出土しているが、下層からは祭祀と思われる胸部に穿孔を受けた完形の甕などが出土し、また若干の木器、木の実などの植物遺体も出土している。また溝底には杭が東岸沿いに打ち込まれて、SX46の北側で溝を横切るように屈折する。溝底からはSK69が検出されている。溝の西側は水田面が展開し、その水利施設である水口が確認された。

出土遺物 (Fig. 21・23~28, PL. 9・10) 上層から溝底迄多量の土器と若干の木器、石器、土製品が出土している。胸部穿孔の完形土器や手捏ねのミニチュア土器など祭祀的性格を持つ遺物も出土している。遺物は便宜的に上・中・下・底層として遺物を取り上げたが、各層から多量の遺物が出土している。時期的には弥生時代中期後半から後期にかけてのものがある。溝の性格としては板付遺跡などで確認されている台地縁辺を巡る水田の水利施設を兼ねた水路であろう。この溝の続きは今のところまで確認されていない。

119~129は上層出土。119~121は中型から大型の甕の口縁部片。119は頸部がすばまる口縁部1/4片で、口縁部は袋状を呈す。外面ハケ、内面ナデ。120は1/8片で錐先状口縁を呈し、口端部には櫛状工具による刻目を持つ。121は1/3片で、袋状口縁気味の複合口縁を呈し丸みを持った逆U字形を呈す。復元口径はそれぞれ11cm、35cm、22.5cmを測り、胎土は砂粒を多く含む。122は外面丹塗りの瓢形土器の胴部片である。頸部との境の突帯に刻み目を持つ。123~125は口縁部片で、1/4片、1/6片、1/6片で、復元口径は30.4cm、16.4cm、35.5cmを測る。123・124はく字状を呈す口縁を呈す。調整は器壁はやや磨滅するがハケとナデ。125もく字状の口縁部であるが、口縁直下に一条の突帯、内面にも突出した段が付く。胎土はいずれも砂粒を多く含むが、125は赤色粒子を多く含む。126は鉢の2/3片で復元口径13.2cmを測る。L字状に外折する短い口縁が付く。内外ハケ目で、かつ工具痕が残るが、内面は放射線状にのこる。胎土に砂粒を多く含む。127は口縁部を欠失する小型甕2/3片で、胴部の外面は細かいハケ、内面はヘラ状工具による調整、128は甕底部片で、底部に1.8×1.5cmの穿孔がある。焼成後の穿孔で、瓶として使用されたものか、内面はハケとナデ、外側はハケ。129は器台片で復元口径16.2cmを測る。下半は丸窓状に穿している。外面ハケ、内面はナデで外側に工具痕が残る。

130~141は中層出土。130は甕の胴部片。肩のはらない胴部でやや長胴である。やや磨滅するが外側

ハケで頸部に工具痕が残る。内面はヘラナデ。胎土に粗砂を含む。131~133は甌でいずれもL字状の口縁を持つ。131は1/4片欠失するが上層から下層の破片が接合した。口径14.8cm、器高17cmを測る。やや磨滅するが外面ハケ、内面はハケのちナデ。底部にもハケ目が残る。129は1/4片で復元口径22.5cmを測る。やや磨滅するが内外面粗いハケ。133は大型品で復元口径36.2cmを測る。頭部に一条の突帯が巡る。胎土に粗砂と赤色粒子を多く含む。134・135は鉢。134は1/2片で口径12.2cm、器高7.5cmを測る。外面はハケ、内面指捺え痕が残る。135はほぼ完形で口径12cm、器高7.5cmを測る。外面粗なハケ、内面ヨコヘラのちナデ調整で放射線状に工具痕が残る。底部に2.7×2cm位の穿孔がある。外面色調は橙色で丹塗りか。いずれも胎土に粗砂と赤色粒子を多く含む。136は皿形の鉢1/4片で、復元口径15cmを測る。手

づくねで粘土が付着しているなど雑な仕上げ。器壁のひずみがひどく本来と異なる可能性もある。胎土は良好。137~140はミニチュア土器。137は手づくねで口縁部を欠失する。138盃形のもので1/3片。復元口径8.5cmを測る。口端部を丸くおさめる。内外面丁寧なナデ。139・140は鉢形で1/3片、1/2片。復元口径7.4cm、7.8cmを測る。139は全面指ナデ、140も指ナデ仕上げ。141は小型の器台1/2片で、復元口径6.5cm、器高10.6cmを測る。外面ハケで、工具痕が残り、内面はナデで指おさえ痕が残る。胎土に粗砂を多く含む。

142~155は下層出土。142~155は壺。142は鋤先状口縁の1/6片。復元口径26cmを測る。口縁内外面丹塗りであるが器壁は荒れる。胎土は細砂粒を多く含む。143は複合口縁の壺の口縁から胴部にかけて、復元口径18cmを測る。頭部に一条の突帯が巡る。外面は粗いタテハケ、内面はナデ。144は凸レンズ状を呈す底部で、外面ナデ、内面はハケで、外底は丁寧なナデ。胎土に粗砂を多く含む。145は直口気味の壺の1/4片で、復元口径は30.6cmを測る。頭部に一条の突帯が巡る。内外面丁寧なナデ。胴内面にはヘラナデ痕が明瞭に残るが、外面鉄分が付着する。146~148は甌。146・147は小型甌で、146は1/4片で復元口径12.7cm、147は1/3片で復元口径14cmを測る。いずれも外面はハケであるが、内面は146がハケとヘラ状工具のナデ、147がナデのちハケ。148は底部片で、胴内外面ハケ、底部に2.6×2.8cmの略方形孔が外底から焼成後に穿孔される。149~151は器台。いずれも円筒状のものでくびれを胴部上半に持つ。149はほぼ完形で、口径8.8cmを測る。外面ハケのちヘラナデ。150は口縁部1/6片で、復元口径11.6cmを測る。外面は細かいハケが残る。151は口縁部を欠失する1/3片で復元口径12.2cmを測る。外面はハケ。胎土に砂粒を多く含む。152~154は鉢。152・153は軽く外反する口縁部。152は1/6片で復元口径16.3cmを測る。外面雑なハケ、内面は丁寧なナデ調整。153は1/4片で復元口径14.4cmを測る。口縁と頸部の境にかすかな稜を持つ。外面は細かいハケ、内面は丁寧なナデ。154は2/3片で口径10cmを測る。外面はヘラナデで指おさえ痕が残る。器壁は厚い。155は傘形の蓋1/6片で復元口径16.5cmを測る。縁辺に沿って2ヶ所穿孔が残る。全面ナデ。焼成は良好。

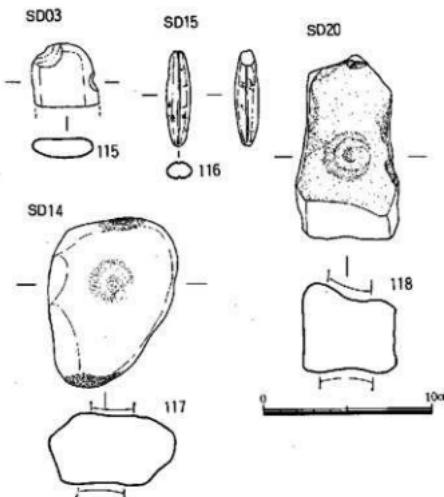


Fig. 20 SD03・14・15・20出土遺物 (1/3)

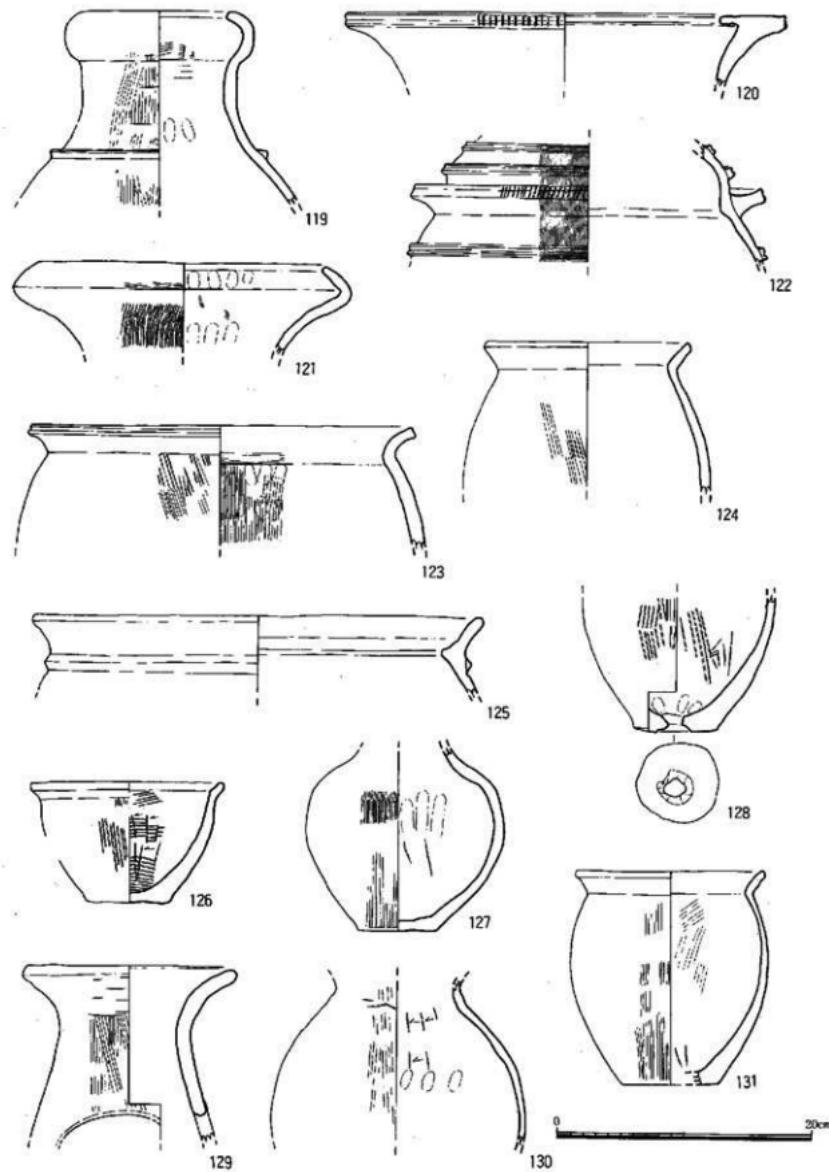


Fig.21 SD41上層・中層出土遺物 (1/4)

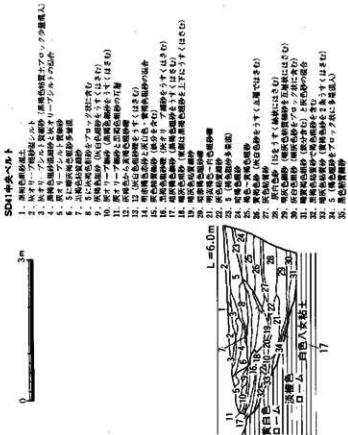
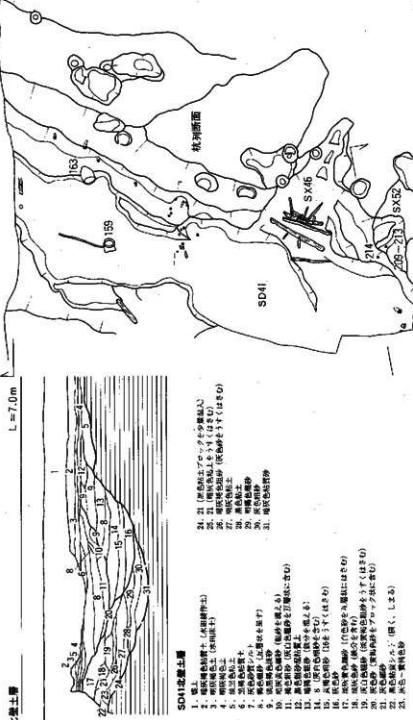


Fig.22 SD41 (1/80)

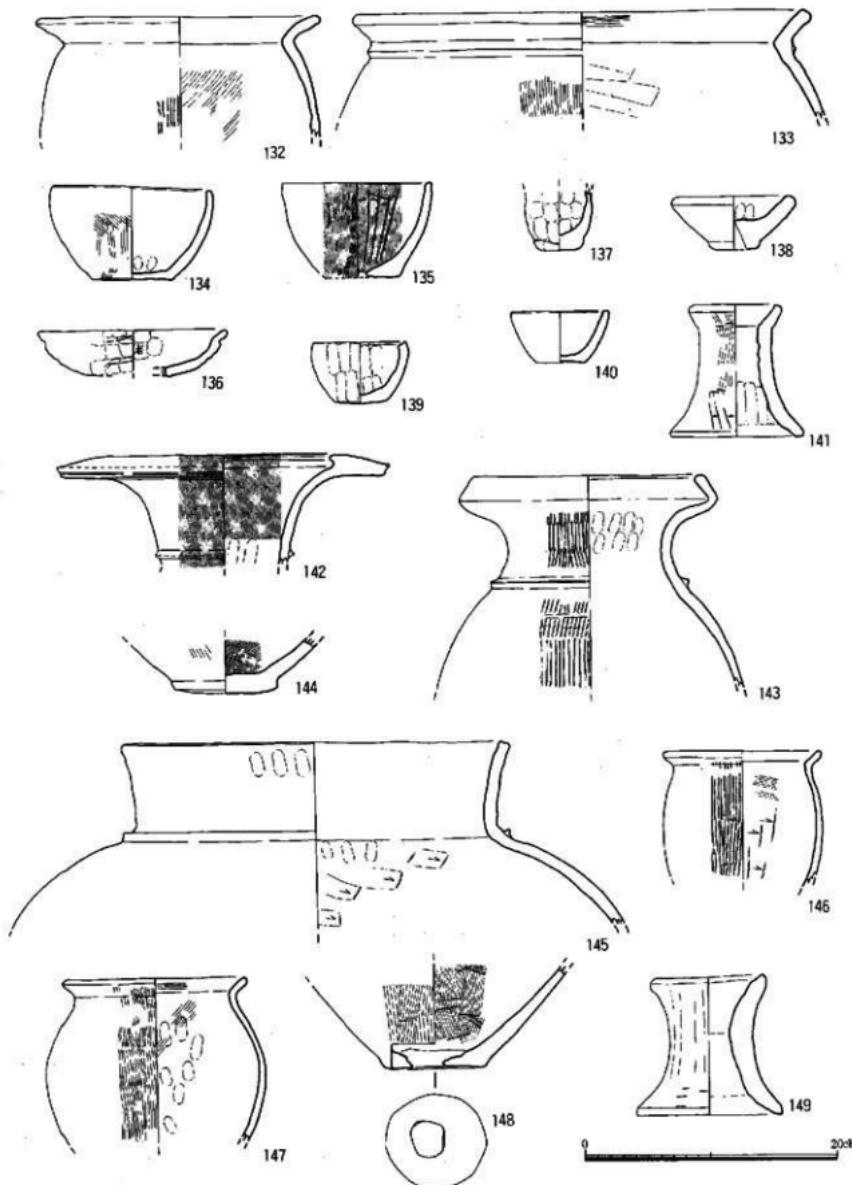


Fig.23 SD41中層・下層出土遺物 (1/4)

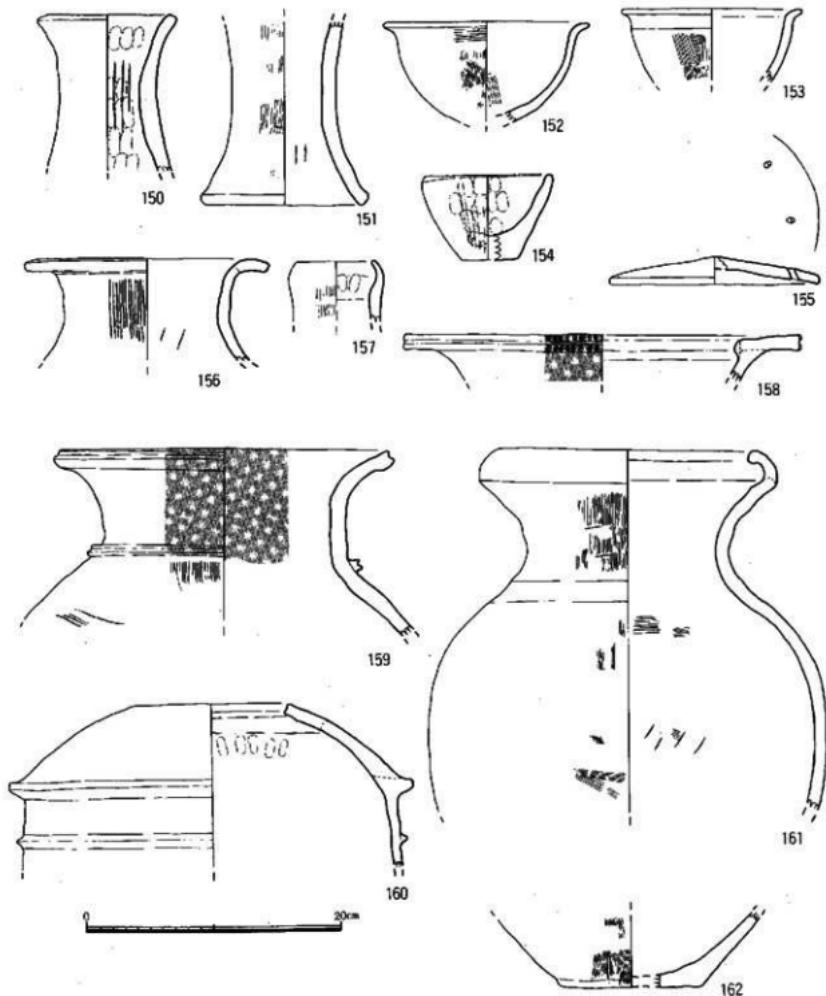


Fig.24 SD41下層・底層出土遺物(1/4)

156~179は底層出土。156~163は壺。156は口縁部1/3片で復元口径19.3cmを測る。口縁部が水平に外反する器形。外面ハケ目、内面ヘラ痕が残る。157は細頸壺の口縁部小片。復元口径6.2cmを測る。158は鋸先状口縁部1/6片。復元口径31.6cmを測る。口端部に上下2ヶ所の櫛状工具による刻目が入る。丹塗りである。159は丹塗壺で口縁から肩部片。復元口径26cmを測る。口端部は凹み、肩部の境に一条

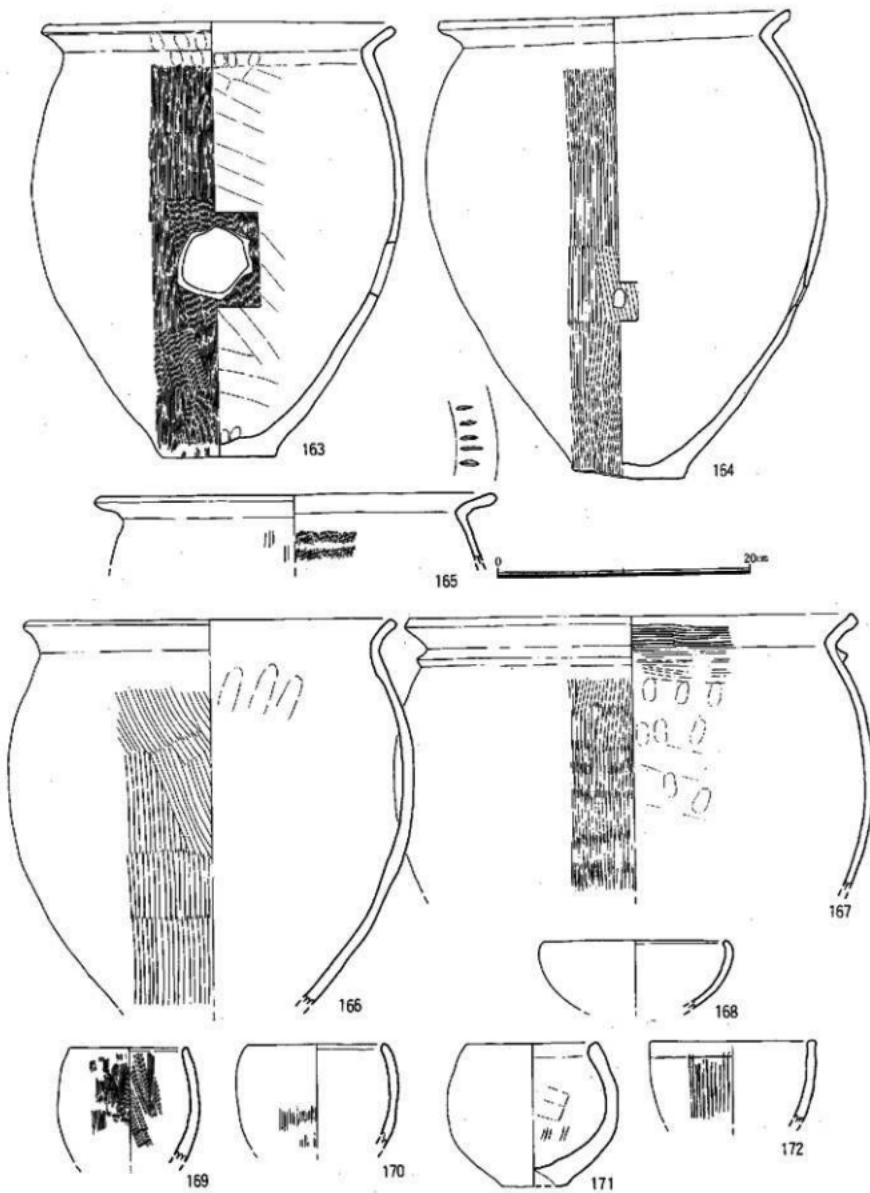


Fig.25 SD41低層出土遺物 1 (1/4)

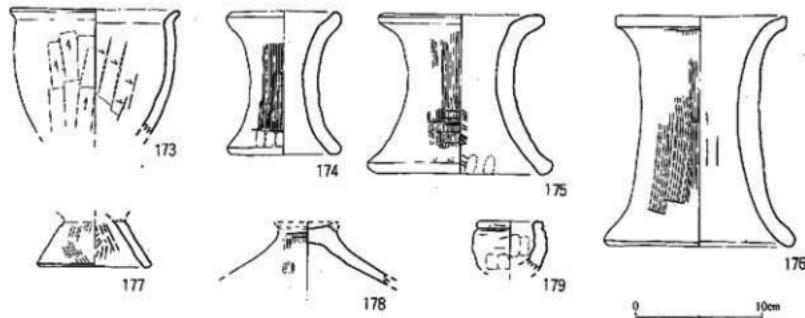


Fig.26 SD41底層出土遺物2 (1/4)

の突帯が巡り、口縁部内外はヘラ研磨である。160は無類壺の1/3片で、復元口径12.3cmを測る。口端部はナデによる凹線が巡り、肩部から胴部にかけて2条の突帯が巡る。外面ナデで丁寧な作りである。161は袋状口縁の壺1/3片である。復元口径20cmを測る。外面は磨滅が著しいがハケ、内面はナデで所々ハケ目が残り、工具痕が残る。162は底部片。外面細かいハケ、内面はナデ。胎土は158が精良。焼成は156・158・160が良好。163～167は甕。163は完形の甕で溝底よりやや浮いた所で横たわって検出された。口径28.1cm器高34.7cmを測る。胴外面は細かいハケを丁寧に施し、内面は幅1.5～2cmの板状工具によるナデ。口縁外面は剥落がひどく、胴部中央やや下に1ヶ所直径6cm程の円孔が焼成後に穿孔される。外面鉄分が付着し、黄味を帯びる。164は163と同形態。1/2片で口径28cm、器高37.1cmを測る。形態はややかたむく。胴外面はタテハケ、内面はナデ。胴部下半に1.6×1cmの楕円形孔が外面から穿孔される。煮炊きに使われたのか、外縁煤が付着する。胎土は163が砂粒が多く含む。焼成は163は良好。165は口縁1/8片強で、復元口径31cmを測る。外面は磨滅するがハケ。内面も細かいハケナデ。口縁上面には5条のヘラ刻みがあるが、破片のため全体の配列は分からぬ。胎土には砂粒のはか赤色粒子を含む。166も163・164と同形態であるが底部を欠失する1/4片。復元口径29.5cmを測る。胴外面は粗いハケ。内面はナデ。胎土は砂粒を多く含む。口縁部から胴部外面に煤が付着する。167は1/3片で、復元口径35cmを測る。頸部に一条の突帯が巡る。胴外面はハケ、内面はナデで指おさえ痕が残り、口縁外面はナデ、内面はヨコハケ。胎土は粗砂を含み雜。168は浅い楕形の1/6片。復元口径14.5cmを測る。内外面丁寧なナデ。口縁外面近くは黒色顔料を塗り、内面は丹塗り、部分的に黒色顔料を塗るか。胎土は良く赤色粒子を含む。焼成は良好。169～171は底が深く口縁がやや内湾する形態。169は1/4片、170は1/2片、171は1/4片で、復元口径はそれぞれ9.4cm、10.8cm、10.4cmを測る。169は内外細かいハケ、170はナデで外面ハケが残る。171の内面にはナデで工具痕が残る。焼成はややあまい。172は直立する口縁の1/4片。復元口径13.3cmを測る。口縁下に1条の沈線が巡り、外面は丹塗りである。外面はハケ。173は口縁部が短く外折する器形の1/4片。復元口径13.4cmを測る。内外面ヘラ状工具痕によるナデ。胎土は170～172に砂粒のはか赤色粒子を含む。174～176は器台。いずれも中空のくびれ部を上半に持つ器台。それぞれ1/3片、1/4片、1/3片で、復元口径は8cm、13.2cm、13.5cm、器高は11.4cm、12.7cm、18.4cmを測る。外面の調整はいずれもハケ、内面はナデ。171は外面に工具痕が残る。176は内面に2ヶ所黒斑があり、整形は丁寧で、胎土も良いが赤色粒子を含む。177は甕か甕の脚部1/3片。内外面ハケを加える。178は蓋である。外面は磨滅するがハケが残り、内面は

ナデ。胎土に赤色粒子を含む。179はミニチュア土器の鉢1/4片。復元口径5cm。外面上半はヘラ、内面は指おさえのちナデ。胎土に細砂粒と黒雲母を少し含む。

180~186は石器。180は石鏃の小片。表面は研磨するが、下面是剥落が著しい。石質は粘板岩か、181は石包丁片で石材は輝緑凝灰岩。表面、刃部は丁寧に研磨されている。182は凹石で石質は粗い砂岩。上面と両側面には使用により凹む、磨滅が著しい。鉄分を帯び暗黄褐色を呈す。183は長方形状の敲石で上下両面に使用により凹みがある。上下端部は使用による敲打痕がある。石質は砂岩。184は扁平な円形の磨石。各面磨かれ、上下両面に敲打痕が残る。185は砥石片。上下両側が使用面。目の細かい砂岩であり、表面には鉄分が付着する。186は大型の扁平な石錐片。長さ11.7cm、幅10.6cm、厚さ6.0cm以上を測る。表面磨って仕上げている。中心に下からやや斜めに穿った直径1.3×1.5cm程の円孔があり、下端から2.2cm程途中で止まった直径1cm程の円孔がある。石質は滑石片岩か。鉄気をおびる。180は上層、183は中層、184は下層、181・185は底層出土である。他に図示していないが、頁岩製の石剣切っ先片が溝底から出土した。

187~200は土製品。187~188は筋鉢形の投弾で長さは3.8cm、3.6cm、直径2.1cm、2.5cmを測る。189~201は土製の円盤。いずれも土器片を利用して、縁辺に調整を加えて円形又は多角形に近い形に成形している。直径は3.8~7.2cmの大きさである。202は阿高系の土器片で、胎土に滑石粉末を混入する。

204・205は木製品。204・205は底からの出土。204は杭に用いられた扁平な柵目の板状の矢板で、長さ36、9cm、幅10、9cm、厚さ1、9cmを測る。先端は削りで扁平に尖る。材質は椎か。206は三叉鉤の一部。残存長50cmを測る。頭部は半円形に作り出され、その中央に方形はぞ穴を穿ち、側刃は五角形に調整する。材質は櫻である。

SD41に伴う遺構

SX52 (Fig. 30)

SD41に伴う遺構で、SX46の南側で検出した壁面が抉れ、奥へ入り込んだ状況を示すもの。幅1.4m、奥行き0.5mを測る。遺物が溝中に落込んだような状況を示していた。

209~213は甕。209は口縁から胴部1/3片。復元口径28cmを測る。口縁部はく字状を呈し、外面は密な粗いタテハケ、内面は雄なハケのちナデ。後期前半のもの。210~213は底部片。底径はそれぞれ9.2cm、9cm、9.2cm、10cmを測る。外底はいずれもわずかに上げ底。外面はハケ、内面はナデ。214は器台で1/5程欠失。復元口径17cm、器高20.1cmを測る。口縁は脚部並に外反して開く、そのくびれ部は上半にある。外面はタテハケ、内面はナデでヘラ状工具痕が残る。

水田面 (Fig. 31, PL. 7)

調査区西側II区、溝SD41西側で検出した水田面。東側台地遺構面より約0.5m程低い。溝SD41の埋土については奈良時代の遺構を検出した面で確認出来たが、水田面についてはこの面を更に30cm程掘り下げた所で、排水口と思われる水の流れた窪みとその周辺に流砂が堆積していた為、この面を水田面と考えた。この面の土は暗灰黄色粘質細砂で、鉄分が上下に貫入している。上層土は灰オリーブ細砂、下層土は暗灰色~黒褐色粘土で、いずれも鉄分を多く含む。レベル的にもほぼ水平である。畦畔、足跡については調査区が狭い事や、砂のかぶりが少ない事から土層断面の観察などを充分行ったが、確認出来なかった。時期的にはSD41に伴う時期であろうか。炭化米や杭などは確認出来なかった。排水口については水田側先端が狭く、溝側に急に広くなる形態で幅2m位に広がる。この水田面を掘り下げる下は黒褐色から黒色の植物を多く含む粘土となり湿地のような淀みの状態を示し、地山面は白色の八女粘土となる。

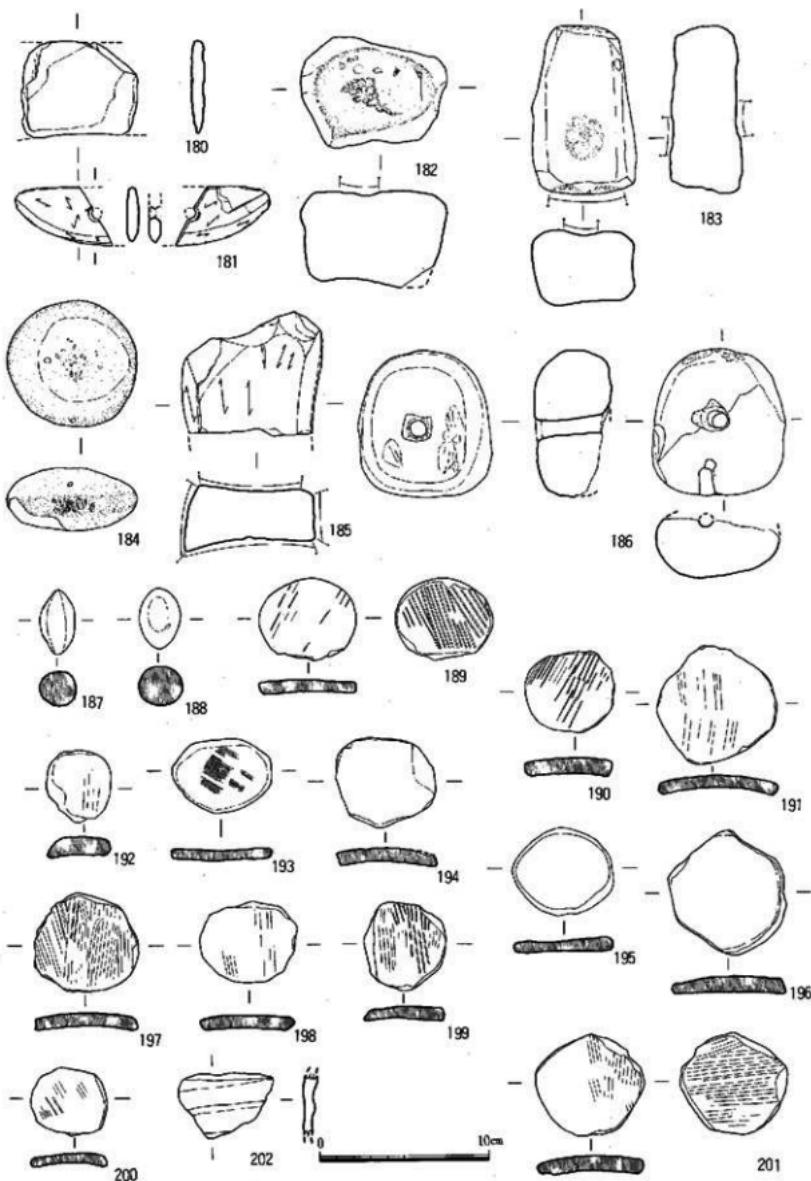


Fig.27 SD41出土石器・土製品 (1/3)

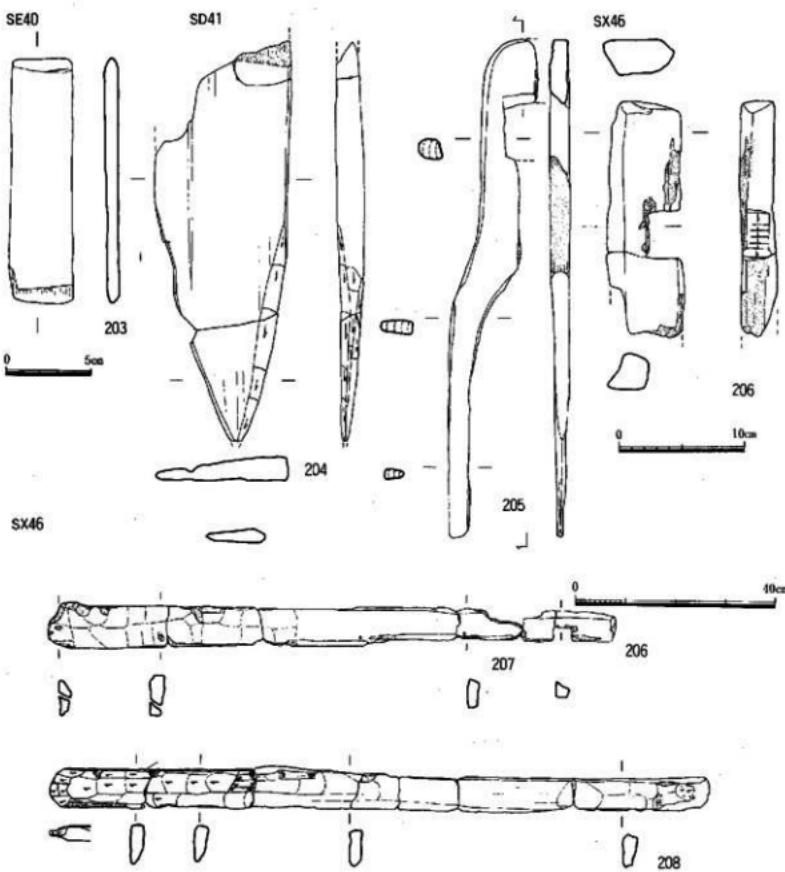


Fig. 28 各遺構出土木器 (1/3・1/4・1/10)

出土遺物 (Fig. 35, PL. 10) いずれも水田面上で出土した遺物である。241は小型壺の胴底部片で、胸部最大径14.6cmを測る。底部はやや凸形を呈す。胴外面は磨滅が著しいがハケがわずかに残り、内面はナデで指押さえ痕が残る。242は甕底部1/2片で、復元底径9.5cmを測る。底部はやや上げ底で布目痕が残る。胴外面はハケ、内面はナデ。243は器台脚部1/3片。復元脚径14.2cmを測る。外面は細かいハケ、内面はナデ。以上から後期前半～中頃の時期か。

包含層・土器群出土遺物 (Fig. 30・34・35, PL. 9)

調査区I区西側3～5ラインのF～H区を中心として黒褐色の包含層が堆積しており、その中から遺物が出土している。一部はSX58として取り上げた。SX58は4G区で検出した土器が集中する部分で、

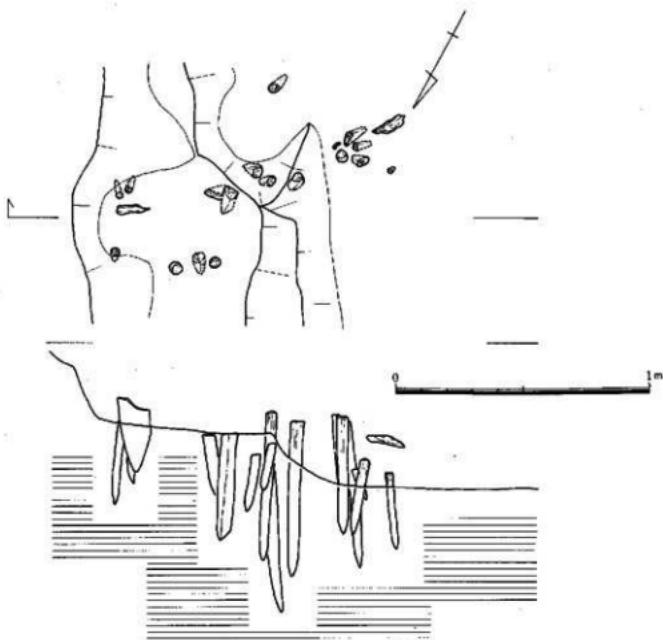


Fig. 29 SP41底杭列 (1/20)

大半が細片で完形に復元出来るものはない。施業されたものであろうか。調査中に大分取り上げている。紙上ではSX58周辺のものを中心に取り上げている。215~217はSX58出土。214・216は甌。215は甌口縁部1/6片で復元口径22.8cmを測る。口縁部がく字状に外反する形態。胴外面は雜なハケ、内面はナデ。216は底部片で底径8.2cmを測る。底部はやや凸レンズ状を呈しナデ。胴外面は磨滅がひどいがハケ、内面はナデで工具痕がかすかに残る。217は蓋で頂部はつまみ状にくびれ、上面はわずかに窪む。口径は26.7cm、つまみ部径5.6cmを測る。外面ハケ、内面口縁部近くは器壁が荒れる。216は粗砂を多く含む。

218~230は包含層の上層の黒褐色から出土したもの。いずれも弥生土器である。218は甌口縁部の1/6片か。復元口径17.5cmを測る。磨滅がひどく調整は不明。219~223は蓋。219は1/6片でく字状に近い口縁部を持つ。復元口径27.2cmを測る。218~220共赤色粒子を含む。220は1/8片で、復元口径29.7cmを測る。逆L字形に近い口縁部を持つ。調整はヨコナデ。外面はハケ。221は丹塗りの甌口縁部1/6片。口縁部は意図的に打欠きされている。外面は丹塗研磨で、ヘラによる暗紋が入る。222は頸部がしまる逆L字形を呈す口縁部1/6片。復元口径28cmを測る。全面の調整はナデ。223は頸部がすばまる錐先状の口縁を持つ1/6片。復元口径39.7cmを測る。全面ナデ。224・225は甌底部1/3片・1/2片である。いずれも底部に直徑2cmの円孔を持つ。円孔は焼成後の穿孔である。いずれも磨滅が著しい。226は弥生時代後期終末墳の甌の底部片か。外面丹塗りで外来系のものか。胎土は良い。227・228はミニチュア土器。

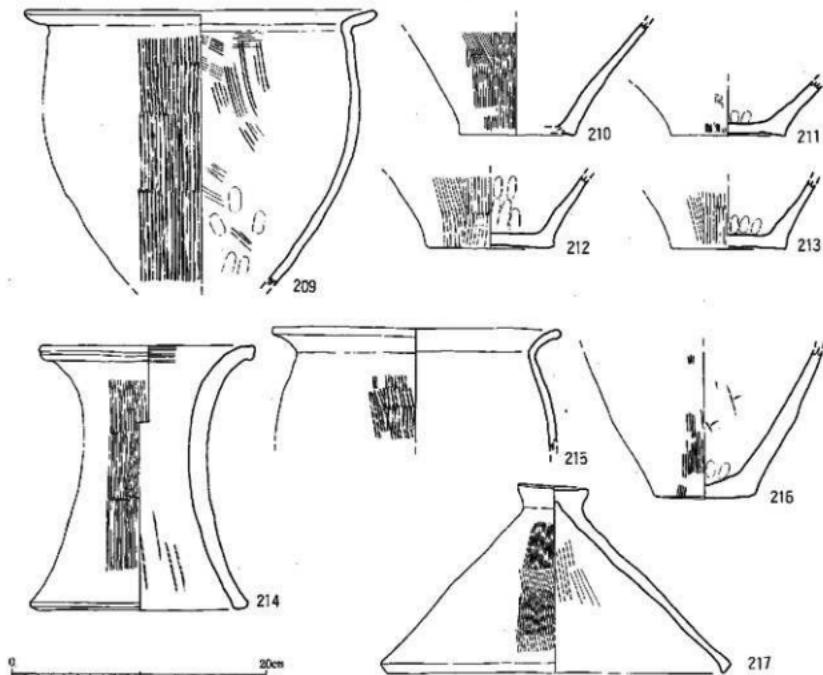


Fig.30 SX52・58出土遺物(1/4)

227は1/6片で小片の為やや形が不明だが、指おさえ痕が明瞭に残る。228も底部片で底径2.6cmを図る。内外面ナデ。229・230は器台。229は脚部1/6片。復元脚径14.8cmを図る。外面ハケのちナデ、内面はナデ。230は小形品で1/3片。復元口径7.4cm、復元脚径7.5cm、器高11.3cmを図る。外面ハケ、内面ナデで工具痕が残る。229は粗砂で赤色粒子を含む。231～237はII区出土のもの。231～233は壺。231は口縁部1/6片で、鋸先状の口縁を持つ。外面はタテハケで口縁から内面はヨコナデ。丹塗りである。232は瓢形の胴頸部1/3片。外面ヘラ研磨で、内面はナデ、指おさえ痕が残る。胎土は良く赤色粒子を含む。233は1/8片で短い鋸先状口縁を持つ。口縁部にハケ目状の条線を巡らす。その他はナデ。233～236は壺。234・235はく字状口縁で1/5片・1/6片、復元口径は32.4cm、27.4cmを図る。234は外面ハケ、内面はナデ。235は頸部に一条の三角突帯が巡る。胴外面はハケが残り、その他はナデ。236は1/8片で逆L字形の口縁部を持つ。胴外面はハケで内面指おさえ痕が残る。234・235は赤色粒子を含む。237は甕形の瓶底部片。底径は7.4cmを図る。底部に約21.7cmの円孔があり、上下からの丁寧な穿孔である。外面タテハケ、内面ナデで工具痕が残る。胎土に粗砂粒を多く含む。238～248は土器群SX58周辺である。238～240は壺。228は袋状の口縁部1/4片で、復元口径15cmを図る。内外面ナデ。胎土に粗砂と赤色粒子を多く含む。239は外面丹塗りの壺か甕の底部片で、全体に磨滅が著しいが、内面はナデ。240は短頸壺底部片。底部はやや上げ底。器壁の剥落磨滅が著しいが、外面は丹塗りで、内面

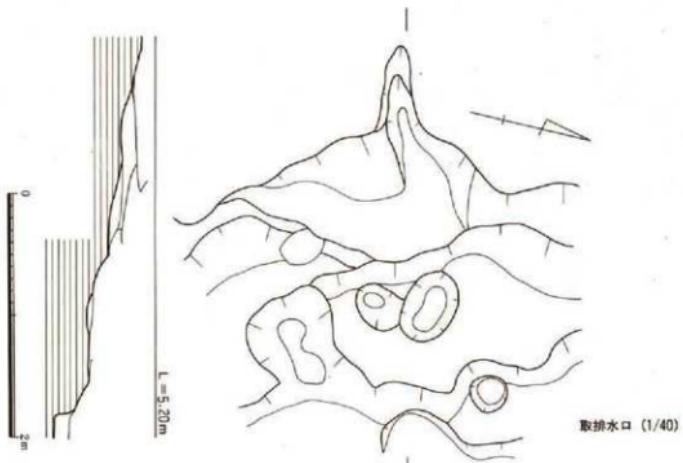
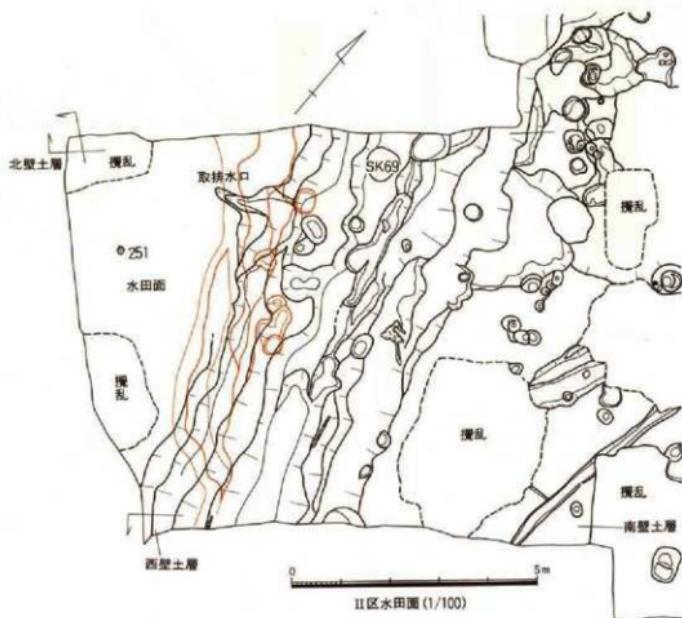
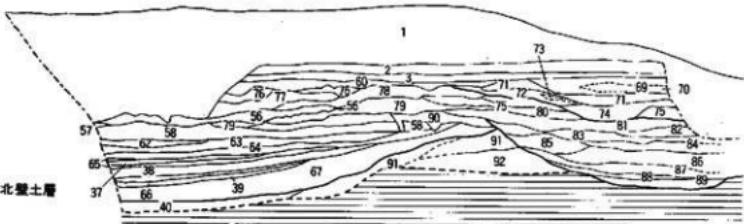
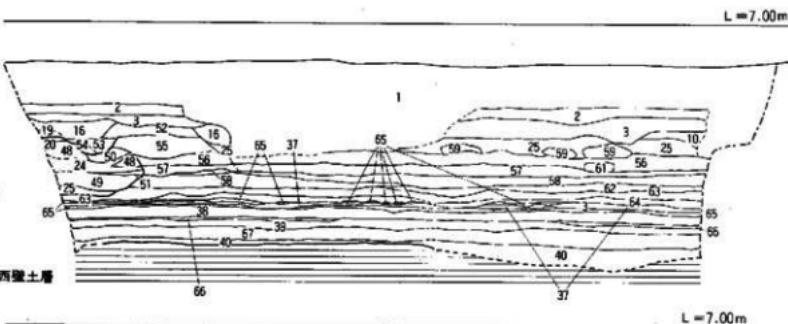
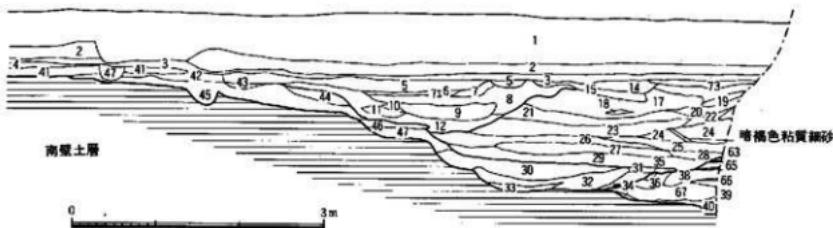


Fig.31 II区水田面・取排水口 (1/100・1/40)

$L = 7.00m$ 

II区周壁土層名称

1. 黒砂土 (風化土と複合)
2. 黄褐色土 (鉄分を含む、水田耕作土)
3. 黄褐色土 (鉄分を含む、未耕作土)
4. 灰色土 (鉄分を多く含む)
5. 喀褐色粘質土 (鉄分を含む)
6. 黑褐色土
7. 黄褐色土
8. 白色砂
9. 灰褐色土
10. 黑褐色粘土
11. 黄褐色土+小ブロック混入
12. 深灰色土+ブロック混入
13. 黄褐色土+ブロック混入
14. 不規則な白色砂 (鉄分を多く含む)
15. 黑褐色粘土 (石を含む)
16. 黑土+リーフルト
17. 黑色粘土に黒褐色シルトブロックを少量混入
18. 黑褐色粘土
19. 黑褐色粘土
20. 黑褐色粘土 (やや暗い)
21. 黑褐色粘土
22. 黑褐色粘土ヒンシルト
23. 黑褐色粘土
24. 黑褐色粘土
25. 黄褐色粘土と褐色粗粒の互層
26. 黄褐色粘土 (鉄分を含む) 中間に喀褐色粘土を薄く挟む
27. 黑褐色粘土
28. 黄褐色粘土
29. 黑褐色粘土
30. 黑褐色粘土と灰褐色粘土の互層
31. 黑褐色粘土と灰褐色粘土をブロック状に含む
32. 黄褐色粘土 (鉄分を含む)
33. 黄褐色粘土 (鉄分を含む)
34. 喀褐色粘土
35. 黑色粘土
36. 黑褐色粘土 (鉄分を含む)
37. 黑褐色粘土 (鉄分を含む)
38. 黑褐色粘土 (鉄分を含む)
39. 黑色粘土 (鉄分を含む)
40. 黑褐色粘土
41. 黑褐色粘土
42. 黑褐色粘土
43. 黑褐色粘土
44. 黑褐色粘土
45. 黑褐色粘土
46. 黑褐色粘土
47. 黑褐色粘土
48. 黑褐色粘土
49. 黑褐色粘土
50. 黑褐色粘土
51. 黑褐色粘土
52. 黑褐色粘土
53. 黑褐色粘土
54. 黑褐色粘土
55. 黑褐色粘土
56. 黑褐色粘土
57. 黑褐色粘土
58. 黑褐色粘土
59. 黑褐色粘土
60. 黑褐色粘土
61. 黑褐色粘土
62. 黑褐色粘土
63. 黑褐色粘土
64. 黑褐色粘土
65. 黑褐色粘土
66. 黑褐色粘土
67. 黑褐色粘土
68. 黑褐色粘土
69. 黑褐色粘土
70. 黑褐色粘土
71. 黄褐色砂 (灰褐色粘土を含む)
72. 黄褐色砂 (灰褐色粘土を含む)
73. 灰白色砂
74. 黑褐色粘土 (褐色斑が強い)
75. 黄褐色粘土 (内に黑色砂を含む)
76. 黄褐色砂 (内に黑色砂を含む)
77. 黄褐色粘土 (内に黑色砂を含む) (比較的細かい)
78. 黄褐色粘土 (内に黑色砂を含む) (比較的粗い)
79. 黄褐色砂 (内に黑色砂を含む) (比較的細かい)
80. 黄褐色粘土 (内に黑色砂を含む) (比較的粗い)
81. 黑褐色粘土 (色斑が細かい)
82. 黑褐色粘土
83. 黑褐色粘土 (内に黑色砂を含む)
84. 黑褐色粘土 (内に黑色砂を含む)
85. 黑褐色粘土と灰褐色砂の互層
86. 黑褐色粘土と白色砂の互層
87. 黑褐色粘土と白色砂の互層
88. 黑褐色粘土
89. 黑褐色粘土 (内に黑色砂を含む)
90. 黑褐色粘土 (内に黑色砂を含む)
91. 黄褐色砂 (内に黑色砂を含む)
92. 黄褐色砂 (内に黑色砂を含む)

42. 黑色土 (ピット)
43. 黑褐色粘土
44. 黑褐色粘土
45. 黑褐色粘土
46. 黑褐色粘土
47. 黑褐色粘土
48. 黑褐色粘土
49. 黑褐色粘土
50. 黑褐色粘土 (45はレンズ状に含む)
51. 黑褐色粘土
52. 黑褐色粘土
53. 黑褐色粘土
54. 黑褐色粘土
55. 黑褐色粘土
56. 黑褐色粘土
57. 黑褐色粘土 (粘分を含む)
58. 黑褐色粘土 (粘分を含む)
59. 黑褐色粘土 (粘分を含む)
60. 黑褐色粘土 (粘分を含む)
61. 黑褐色粘土 (粘分を含む)
62. 黑褐色粘土 (粘分を含む)
63. 黑褐色粘土 (粘分を含む)
64. 黑褐色粘土
65. 黑褐色粘土
66. 黑褐色粘土
67. 黑褐色粘土
68. 黑褐色粘土
69. 黑褐色粘土
70. 黑褐色粘土
71. 黄褐色砂 (灰褐色粘土を含む)
72. 黄褐色砂 (灰褐色粘土を含む)
73. 灰白色砂
74. 黑褐色粘土 (褐色斑が強い)
75. 黄褐色粘土 (内に黑色砂を含む)
76. 黄褐色砂 (内に黑色砂を含む)
77. 黄褐色粘土 (内に黑色砂を含む) (比較的細かい)
78. 黄褐色粘土 (内に黑色砂を含む) (比較的粗い)
79. 黄褐色砂 (内に黑色砂を含む) (比較的細かい)
80. 黄褐色粘土 (内に黑色砂を含む) (比較的粗い)
81. 黑褐色粘土 (色斑が細かい)
82. 黑褐色粘土
83. 黑褐色粘土 (内に黑色砂を含む)
84. 黑褐色粘土 (内に黑色砂を含む)
85. 黑褐色粘土と灰褐色砂の互層
86. 黑褐色粘土と白色砂の互層
87. 黑褐色粘土と白色砂の互層
88. 黑褐色粘土
89. 黑褐色粘土 (内に黑色砂を含む)
90. 黑褐色粘土 (内に黑色砂を含む)
91. 黄褐色砂 (内に黑色砂を含む)
92. 黄褐色砂 (内に黑色砂を含む)

70. 黑褐色粘土
71. 黄褐色砂 (灰褐色粘土を含む)
72. 黄褐色砂 (灰褐色粘土を含む)
73. 灰白色砂
74. 黑褐色粘土 (褐色斑が強い)
75. 黄褐色粘土 (内に黑色砂を含む)
76. 黄褐色砂 (内に黑色砂を含む)
77. 黄褐色粘土 (内に黑色砂を含む) (比較的細かい)
78. 黄褐色粘土 (内に黑色砂を含む) (比較的粗い)
79. 黄褐色砂 (内に黑色砂を含む) (比較的細かい)
80. 黄褐色粘土 (内に黑色砂を含む) (比較的粗い)
81. 黑褐色粘土 (色斑が細かい)
82. 黑褐色粘土
83. 黑褐色粘土 (内に黑色砂を含む)
84. 黑褐色粘土 (内に黑色砂を含む)
85. 黑褐色粘土と灰褐色砂の互層
86. 黑褐色粘土と白色砂の互層
87. 黑褐色粘土と白色砂の互層
88. 黑褐色粘土
89. 黑褐色粘土 (内に黑色砂を含む)
90. 黑褐色粘土 (内に黑色砂を含む)
91. 黄褐色砂 (内に黑色砂を含む)
92. 黄褐色砂 (内に黑色砂を含む)

Fig.32 II区調査区隔壁土層図 (1/60)

はナデ。胎土に3mm以下の砂粒を多く含む。241は壺の口縁部1/6片で復元口径32.8cmを測る。胎土に粗砂と赤色粒子を多く含む。242は大型の鉢1/6片で、復元口径18.2cmを図る。磨滅が著しいが内面はハケ。細砂と赤色粒子を多く含む。243・244は器台。243は1/3片で、復元口径13.5cm、器高17.4cmを測る。外面ハケのちナデ、内面ナデ又は指ナデ。244は脚部を一部欠失するがほぼ完形。頂部は平坦で、 $2.6 \times 2.9\text{cm}$ の円孔がある。上面径7.4cm、復元脚径12.5cmを測る。指おさえのちナデで叩き痕がかかるに残る。内面はナデとハケ。いずれも胎土に粒砂を多く含む。245は大型の鉢と思われるく字状を呈す口縁部1/6片。復元口径31.2cmを測る。外面は磨滅がひどいがタテハケ、内面は丁寧なナデ、胎土に砂粒や赤色粒子を多く含む。246～248は高環。246は環部1/4片、247は脚筒部、248は脚据部1/2片。246の復元口径は24cm、248の脚端径は20.6cmを測る。いずれも磨滅がひどいが、245は外面丹塗り、246もかすかに丹塗り痕が残る。胎土はいずれも比較的良好。249は小型の鉢か壺の口縁部小片。復元口径16.4cmを測る。器壁は磨滅がひどいが、外面ハケが残る。250は手づくねのミニチュア上器の鉢の完形品。口径7cm、器高7.8cmを測る。249・250とも胎土に砂粒と赤色粒子を多く含む。238・239・245・249は4F区、240～244・246～248・250は4G区出土。

ピット (Fig. 36, PL. 10)

ピットの埋土は主に黒色から黒褐色、暗褐色、暗灰褐色粘質土の3種類に別れる。時期的なものと、そのピットの堆積状況の差によるものであろうか。遺物を取り上げたピットは110余りで、各ピットか

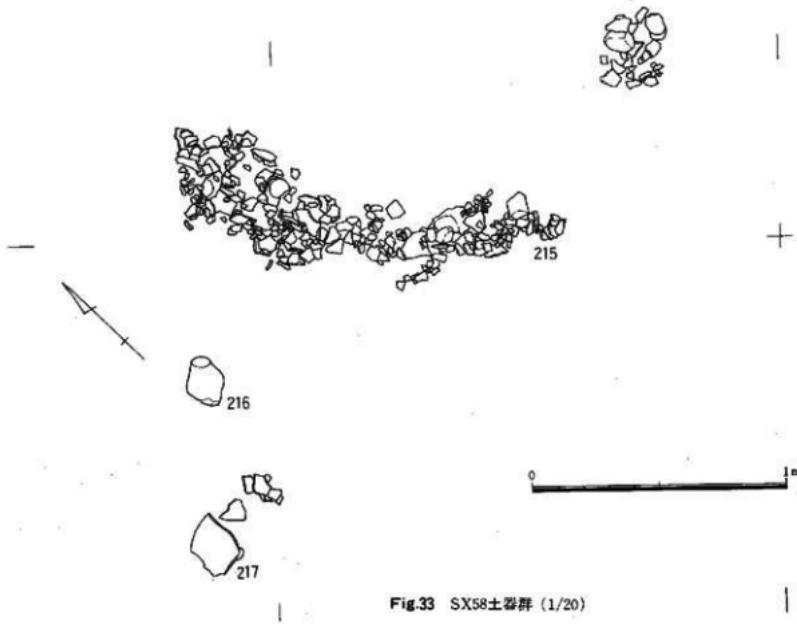


Fig.33 SX58土器群 (1/20)

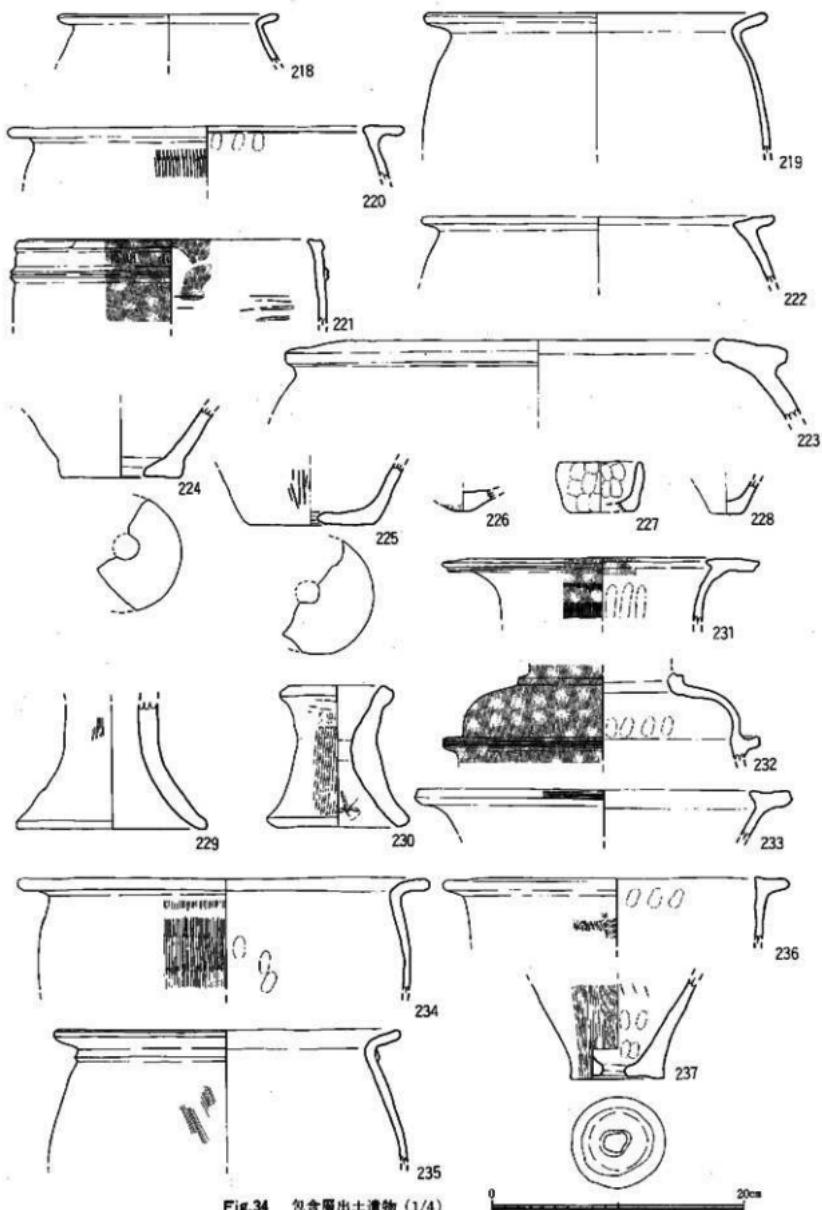


Fig.34 包含層出土遺物(1/4)

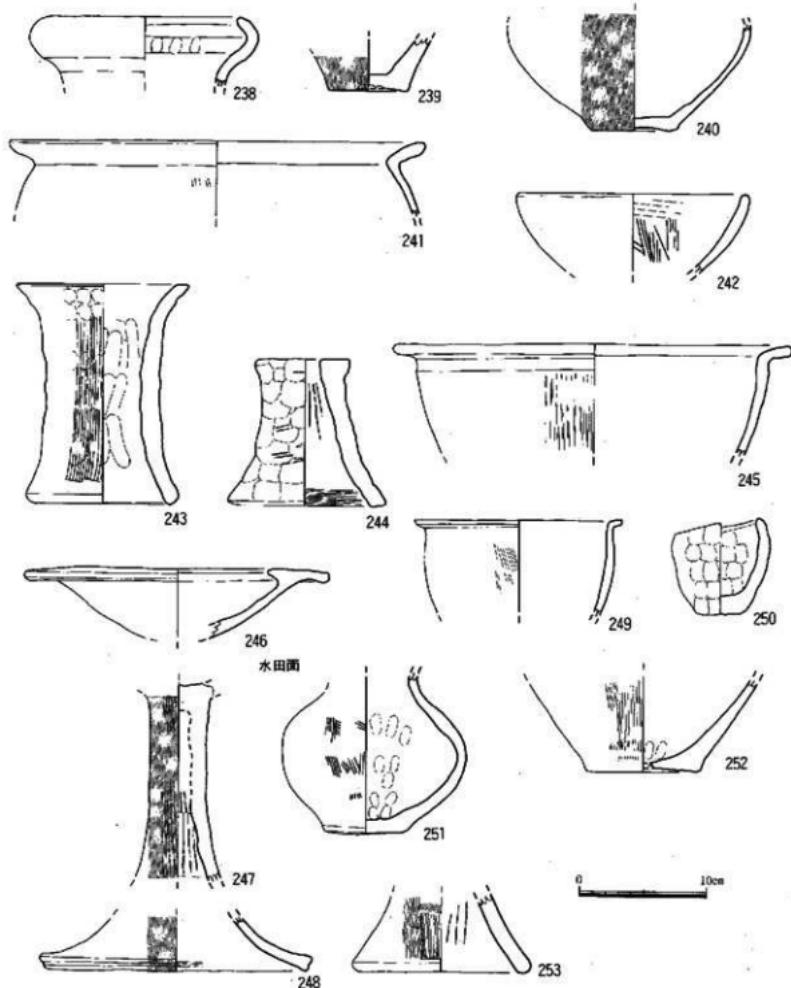


Fig.35 包含層・水田面出土遺物 (1/4)

ら遺物が少量ずつ出土している。大半が土器の細片であるが、図示できる主なものを図示する。

254~262はいずれも弥生土器。254はSP29出土の、小型鉢口縁部1/6片で外反する短い口縁部を持つ。復元口径8.6cmを測る。内外面はナデで、内面に指おさえ痕が残る。胎土に細砂を含む。255はSP66出土の甕口縁部1/8片。後期前半のもの。器壁は剥落・磨滅が著しい。胎土に赤色粒子を含む。256はSP58出土の丈の低い器台1/4片で、復元口径11cmを測る。外面指おさえのちハケ、内面はハケ。粗砂と

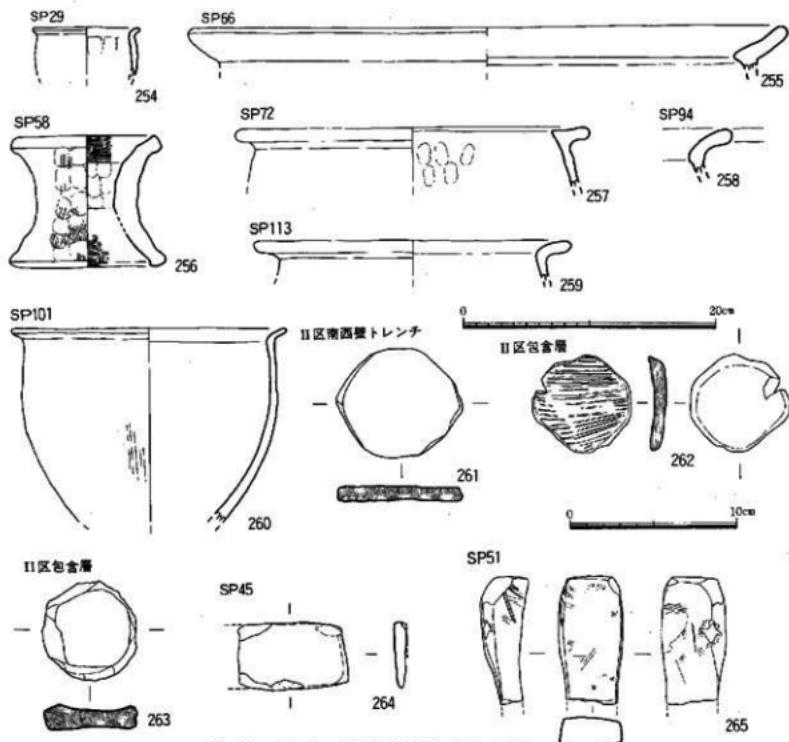


Fig.36 ピット・包含層出土遺物 (1/4・1/3)

赤色粒子を多く含む。257はSP72出土の逆く字状の口縁部1/8片で、復元口径28cmを測る。内外面ヨコナデで、胎土に赤色粒子を含む。258はSP94出土の甕で、く字状に外反する口縁部細片。259はSP101出土の甕の口縁から胴部1/6片。復元口径21.8cmを測る。器壁の磨滅は著しく、外面にハケがかすかに残る。胎土に粗砂と赤色粒子を含む。260はSP113出土で甕の口縁部1/6片。復元口径25cmを割り、胎土に赤色粒子を含む。浅黄橙色を呈し、焼成はややあまい。

261～265は土製品と石器。261～263は土製円盤。いずれも土器片転用で縁辺を打欠いて6角形に近い形に形成している。263は底部を利用している。直径7.4×6.4cm、5.2×5.9cm、6.0×5.6cmである。264は石鏃の破片で、石質は目の細かい砂岩。剥落が著しいが上面は良く研磨されている。現存長6.5cm、幅4.1cmを測る。265は砥石片。各面砥石として利用しており、使用痕が残る。残存長7.6cm、幅3.8cm、厚さ2.0cmを測る。石材はアブライドで鋳型によく使われるものである。良くなりへっている。261は包含層、262・263はII区包含層、264はSP45、265はSP51出土である。

3. 小結

当地点で検出された遺構の時期は大きく3時期、弥生時代と奈良時代、古代末から中世の時期に分かれる。弥生時代の遺構は、井戸SE40、土坑SK16・17・42・49・50、掘立柱建物SB60・72、水路SD41などである。時期的にはSE40が一番古く中期末頃の時期、土坑群は後期の時期である。建物は2棟とも規模・主軸方向もほぼ同じで、同時期のものと考える、SB72が後期後半代のSX47に切られていることから、それ以前の時期である。水路SD41は今回初めての発見であったが、比恵遺跡群も板付遺跡と同じように台地縁辺に水路を兼ねた外濠が巡り、その外側には水田が展開するという状況を確認できた。遺物としては埋土からは中期後半から後期末頃までの遺物を含むが、底から出土している完形の甕などから、後期前半ごろが溝の主要な時期であろうか。この溝はたび重なる洪水で後期の末には埋没してしまったのであろう。この水路がどのように延びていくのかは、今後の周辺の調査に期待したい。

奈良時代の遺構は井戸SE02・12・59、土坑SK68などがあるが、遺構は少ない。しかし、該期の遺物は他遺構からも混入品として出土しており、井戸の存在と併せて考えると、当地点周辺には、本来集落が存在していたのであろう。

古代末から中世の時期の遺構はSK18、SD14・15・20などがある。わずかに青磁を含む。12世~13世紀ごろの時期か。水口状遺構のSX21と併せて考えて水田遺構に伴う水路であろうか。古代末の段階には当地周辺は集落部分からはずれて、水田地帯に変化していたことが考えられる。

第4章 第49次調査（調査番号9318）

1. 調査の概要

発掘調査の経過 調査の現場作業は、1993年6月24日、表土剥ぎから開始した。表土は機力により除去し、一部は調査区外に搬出した。発掘調査は、調査に係る面積793m²のうち建物予定部分513m²を対象とした。現場作業は、場内での廃土の処理が必要となつたため西半分を先行し、その終了後、つづいて東半分についておこなつた。打手返しの後、東半区の調査に着手したのは、7月26日である。東半区を終わり、現場作業は8月5日の埠戻しをもつて完了した。

調査の方法 記録について、平面上の基準および高さの基準は、既設の「博多区内遺跡基準点」によつた。平面上の位置は平面直角座標系上で、高さは標高で示す。

遺構については、本次調査地点内での通し番号を付して登録し、遺構を示す記号「M」を付して表示した。遺構に付いては、20分の1の縮尺で調査区全体を、必要なものについては個別に平面図・断面図を作成した。遺物については取り上げ時、通し番号を付し、記号「R」を用いた。遺物番号が個体の資料を示す場合はそのまま収蔵時に登録遺物番号とすることとした。

調査成果の概要 隣接する道路等への安全対策のため引きをとるなどしたため、結果として464m²についての調査となつた。調査区内では戦時中に設けられた防空壕により、かなりの部分が深く掘削されていた。防空壕は北西方向に長軸をもち、ほぼ等間隔で3列に並んでいる。これと、本地点が台地縁辺部に立地することにより、遺構の遺存状況は不良である。

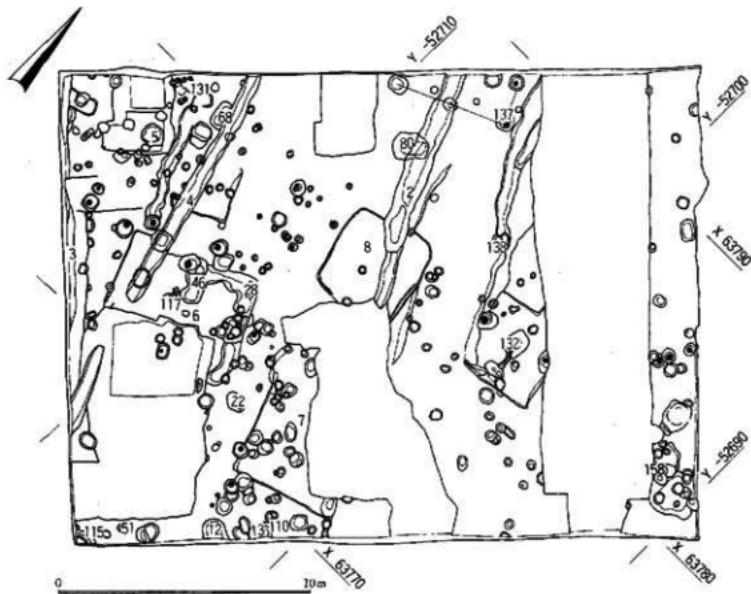


Fig. 37 比恵49次地点遺跡調査区全体図 (1/200)

結果として、竪穴住居、井戸のほかに溝・各種の土壌、小穴・柱穴を調査した。

2. 調査の記録

以下、遺構種別毎に成果を報告する。

段落ち・溝

段落ち及び溝とする遺構は、6基を調査した。段落ち3、溝2・4を報告する。

段落ち3 (Fig. 38, Pl. 12)

調査区西辺で調査区と平行して検出された。断面では西に向かい立ち上がる様な傾斜が観察されるが、判然としない。中位の土層には、大きな褐色土塊が混



■褐色砂質シルト

Fig. 38 段落ち3 土層断面図 (1/30)

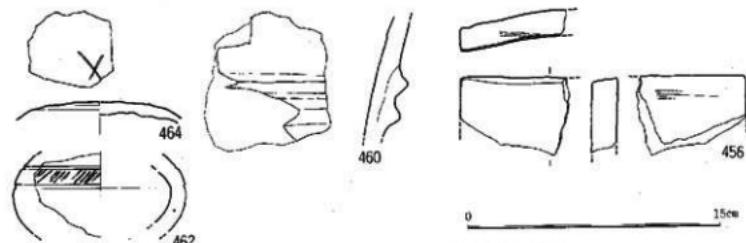


Fig. 39 段落ち3 出土遺物実測図 (1/3)

り、人為的な埋め立てを考えることができよう。遺物は覆土中から散漫に出土した。

段落ち3 出土遺物 (Fig. 39, Tab. 1) 総量でコンテナ $\frac{1}{4}$ 程の分量である。細片の土器が大部分を占める。464・462は須恵器で、164は壺蓋頂部の小破片、462は全体部小破片である。後者は器表の磨耗が著しい。460は甕棺の側部細片であろう。突宍部で、磨耗が著しい。456は平瓦あるいは棟瓦であろう。酸化炎焼成によっており、器表には刷毛目調整痕が残る。

溝2 (Fig. 37)

調整区中央で検出した。北から西へ26度振れた方向には直線状に走る。断面形は逆台形状を呈し、覆土は赤茶褐色を呈す。幅は全体に一定ではないが、およそ0.9mm、深さも部分で深みがあるが、

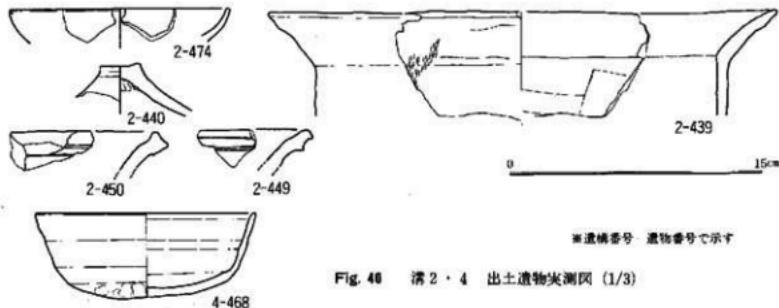


Fig. 40 溝2・4 出土遺物実測図 (1/3)

※遺構番号・遺物番号で示す

0.3m程である。土壌80、竪穴住居8と重複して新しい。遺物は覆土中から散漫に出土した。

溝2 出土遺物 (Fig. 40, Tab. 1) 総量で、コンテナ14程の分量である。磨耗している資料が複数ある。細片・小破片の土器の他に石製品が含まれる。474は染付碗である。口縁部の体部内面に吳須による絵付けがおこなわれている。肥前系磁器であろうか。440は弥生土器蓋の頂部資料であろうか。小破片であり判然としない。449・450は須恵器甕の口縁部細片である。

溝4 (Fig. 37)

調査区西辺部で検出した。北から西へ15度振れる方向に走る。浅い、断面が逆台形状を呈し、幅は全体としては一定で0.7m、深さ0.1mを測る。竪穴住居6に重複して新しい。遺物は覆土中から少量が散漫に出土した。

溝4 出土遺物 (Fig. 40, Tab. 1) 須恵器細片のほかに、土師器電細片が出土している。土師器468は碗で、口縁部の一部を欠く資料である。器表の磨耗が著しい。

竪穴住居

4基の他に可能性のある遺構1基を調査した。調査区中央と西部に位置している。防空壕により大きく損なわれている例がある。長方形の平面形をとるものと、隅丸方形のものとがある。

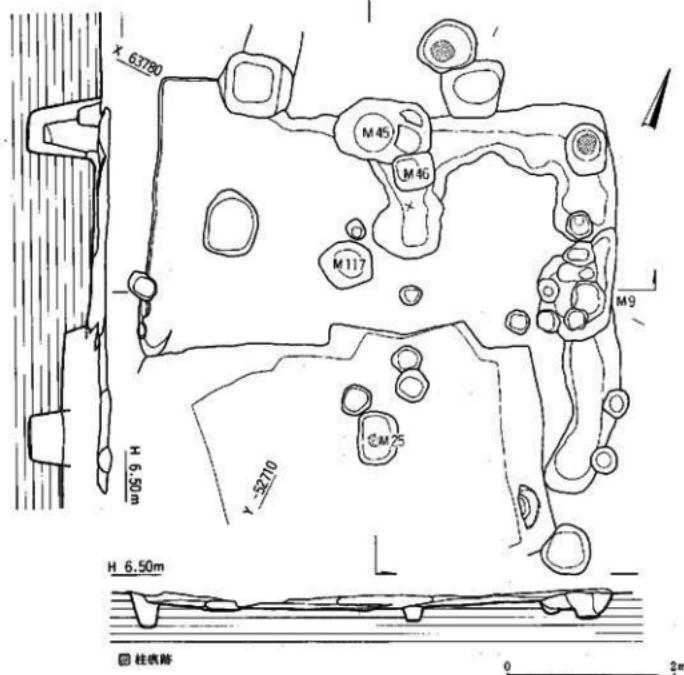


Fig. 41 竪穴住居6実測図 (1/60)

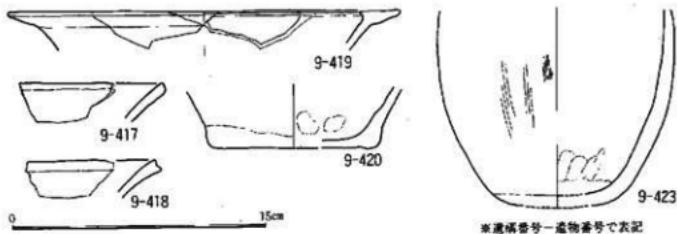


Fig. 42 積穴住居 6 出土遺物実測図 (1/3)

積穴住居 6 (Fig. 41, Pl. 12)

半ば以上を防空壕が切り込んでいる。床面より下位の部分が遺存するものとみられる。黒褐色土を挟んだローム塊の広がりにより、確認した。土壤 9 および住居軸線上に位置するとと思われる柱穴 45・25が住居を構成する遺構と考えられる。柱穴の位置からベッド状遺構を備えていた積穴住居と考えられる。西壁は不明瞭である。掘型の状況を図示する。遺存する深さ 0.1m、柱痕跡間の距離 3.6m を測る。東壁中央に接する土壤 9 は、西端に小穴を配する。

積穴住居 6 出土遺物 (Fig.

42-64, Tab. 1) 住居覆土から弥生土器細片が極少量出土したほかは図示できる資料は土壤 9 および柱穴 45 からの出土遺物である。419は壺口縁部小破片、417・418は甕口縁部の細片、420は甕底部の小破片、423は甕の底部から休部までを接合復元できる資料である。外面では刷毛目調整後施で調整が加えられている。柱穴 45 出土遺物は、Fig. 64 に示す。石器 373 は打製石斧であろう。側縁部に叩打痕がみられ、中央部の側縁部がやや括れをもっている。鉄器 91 は錆による変形があり、元の形状が判然としない。刀子であろうか。

積穴住居 7 (Fig. 43, Pl. 12)

半ば以上を防空壕の建設により失っている。ほとんど貼床部以下の部分のみが遺存しており、黒褐色土を挟んだローム塊の広がりにより、長方形の平面形状

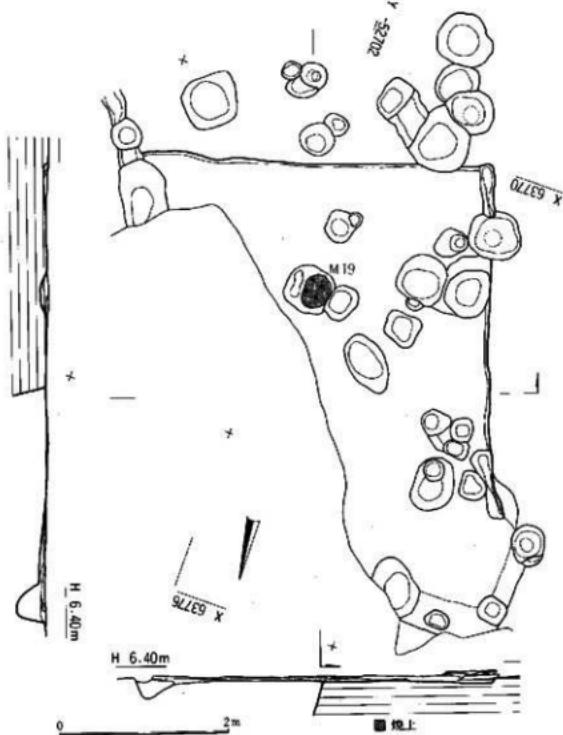


Fig. 43 積穴住居 7 実測図 (1/60)

となり、現状での幅4.2mを測る。多数の小穴、柱穴が重複して、竪穴住居を構成する遺構として炉19があげられるほかは、柱穴も判然としない。炉19は、長径0.6m程の規模で、断面浅い皿状を呈し、西側に寄って焼土が認められる。地床炉である。遺物は極少量の弥生土器小破片・細片が出土したのみで、図示できる資料はない。

竪穴住居8 (Fig. 44, Pl. 12)

清2と重複してそれよりも古い。隅丸の長方形形状を呈する竪穴住居である。南半部には壁溝が巡る。長さ4.1m、幅3.8mをそれぞれ削り、床面までの高さ0.1mが遺存している。床面までを埋める覆土は、暗褐色の粘質土で全体に一致である。床面では、住居を構成する柱穴のほかの遺構は検出できない。中央部ではローム塊を用いて貼床としている。床面下は土壤状に掘り窪められ、幾つかの窪みが合わさった不整な平面形状を呈している。最も深い部分で床面から0.5m程の窪みとなる。窪みは明赤褐色粘質土で埋め

られており、含まれるローム塊の分量によりレンズ状に堆積する4層に分けられる。小穴81・82・83も床面下で検出され、その覆土の状況からこれと一連のものと考えられる。貼床の除去後も住居柱穴は確認できなかった。また、遺構周囲にもそれと判別できる柱穴は見当たらない。

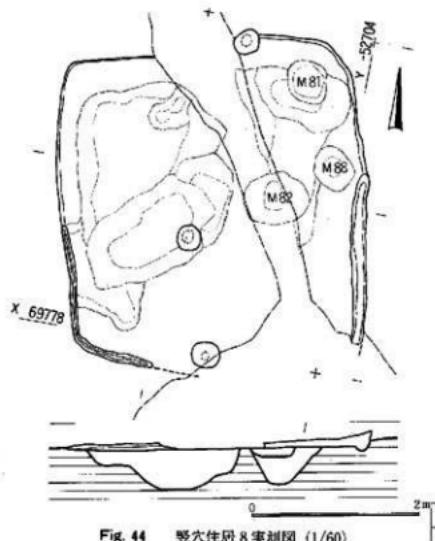


Fig. 44 竪穴住居8 実測図 (1/60)

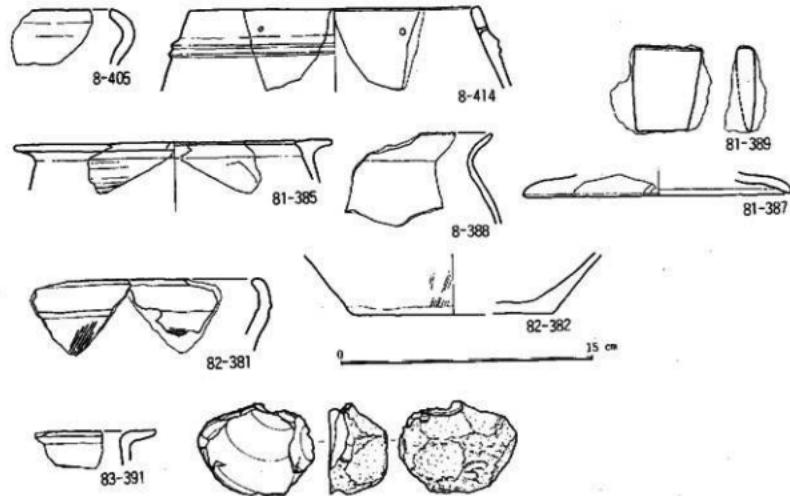


Fig. 45 竪穴住居8 出土遺物実測図 (1/3 - 2/3)

豊穴住居8出土遺物 (Fig. 45, Tab.) 遺物は、弥生土器の小破片、細片が覆土中からコンテナ1/4程の量出土したほか、床面以下の層中から少量の弥生土器が出土した。また床下の小穴からも遺物の出土があった。図化できる資料を以下に掲げる。

405・414・385・388・387・381・382は弥生土器の小破片、細片の資料である。405・414・388が住居覆土から出土したほかは、床下の小穴覆土からの出土である。405・385は壺、388・391は甕の細片資料である。414は、無頸壺、387は蓋、381は鉢であろうか。何れも細片の資料である。389は、床下の小穴81から出土した鉄器である。刀の断片かと思われる。鍔が全体を覆っているが、刃部らしい部分がみてとれる。推定の幅2.4cm、厚さ0.7cm、長さ2.7cm程の資料である。392は石核である。黒曜石小礫を原材として用いている。

豊穴住居132 (Fig. 46,

Pl. 13)

一端を段落ちにより、他端を防空壕により、削除された遺構である。平面観が長方形状を呈し、ベッド状遺構を設ける豊穴住居の、中央部のみが遺存するものと考えられる。ベッド状遺構の上面は削平されてしまっているもののように見える。

柱穴134・135、炉133、土壙136が住居を構成する遺構である。柱穴と土壙136との関係により、柱穴は住居軸状に位置し、住居は東西方向に軸をとる配置であることがわかる。柱穴の位置から、ベッド状遺構は、住居東辺と西辺北辺の

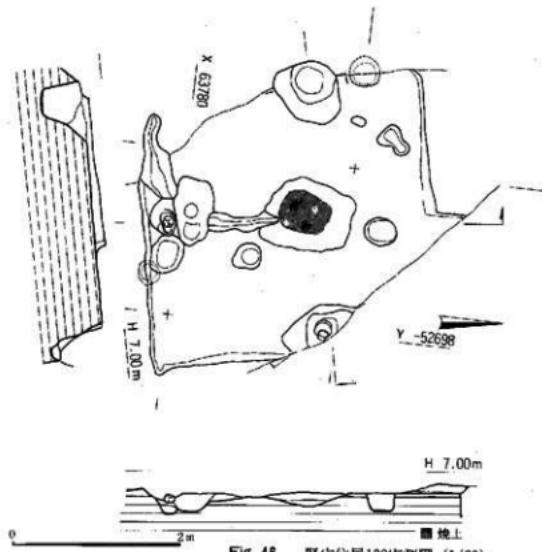


Fig. 46 豊穴住居132実測図 (1/60)

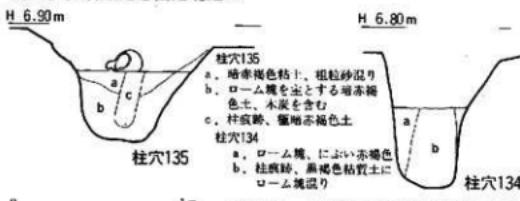


Fig. 47 豊穴住居132柱穴土層断面図 (1/30)

一部とに設けられていたと推測できる。現状で住居中央の床面とは0.1m程の段落ちをもつてている。

土壙136は住居南壁中央に接して設けられた遺構で

あり、複数の窪みが集合したような状態を見ることができる。中央位置のそれには礎が置かれる。柱穴土層断面をFig. 47に示す。いずれも漏斗状に上部が開く形状をもち、柱痕跡が明瞭に残っている。とともにローム塊で柱を埋め込んでいる。底面の高さは同じではない。柱穴135では覆土の中程の位置から、柱痕跡に重なるようにして甕214が出土した。口縁部の大部分を欠く他は、完形充完である。

炉133 (Fig. 48) は地床炉であり、住居中央に位置している。これと南壁際の土壙137とを結ぶように

溝状の遺構が残されている。炉の平面形は不整な橢円形状を呈し、長さ1.1m、幅0.9mを測る。それの中の部分に木炭、焼土粒、加えて灰が混じるかと思われる暗褐色軟質の粘質土が残されている。これを除去すると焼土面が現れる。この位置で炉の断面形は、浅い皿状を呈する。深さは0.2m程である。焼土とみえる土は、更に下方に続き、断面形で逆台形状を呈して0.3m程の深さまで認ることができた。また、炉長軸上の一端では、暗赤褐色粘質土で埋まる小穴を検出した。住居の規模について、遺存状況から規模について計測できるのは、以下の部分である。柱穴間の距離は、柱痕跡間の距離3.0mを測る。柱穴と南壁との距離2.0mを測り、これを北側に折り返して幅4.0m程の規模を考えることができよう。長さについては、幅と同じか、それ以上の規模となるかも知れない。

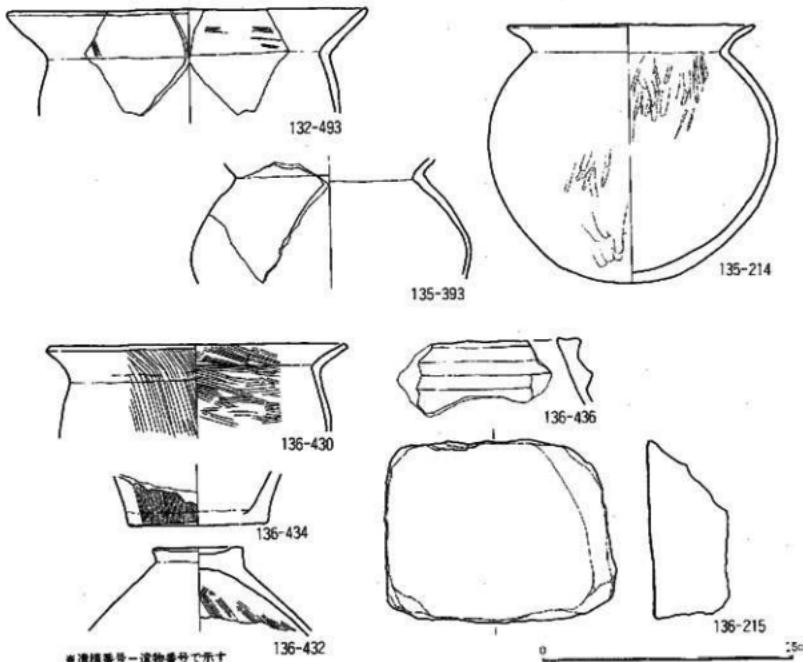
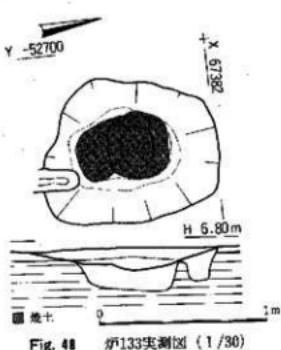


Fig. 49 壁穴住居132出土遺物実測図 (1/3)

壁穴住居132出土遺物 (Fig. 49, Tab. 1) 壁穴住居覆土中からは、弥生土器を主にコンテナ14種の量の遺物が出土した。何れも、小破片・細片の資料である。炉133からは、極少量の弥生土器細片が出土した。柱穴134・135からも極少量の弥生土器細片が出土したほかに、柱穴135からは先術の通り、

完形に近い壺が出土している。土壇136からは、弥生土器を主としてコンテナ44種の分量の遺物が出土した。土器は小破片・細片の資料である。図示できるは、住居覆土出土の493のほかは、柱穴135、土壇136出土資料である。

土器は、493・393・430が甕口縁部の小破片資料である。後434は甕底部の資料である。436は、甕棺かと思われる体部細片の資料である。432は蓋小破片である。215は土壇136壁に沿った位置から出土した砥石である。

炉131 (Fig. 50)

調査区北西部で検出した。検出面で8の字形に焼土、炭の分布がみられた。それは、焼けた地山ロームが円形状に広がる部分に、浅い皿状の小穴が続く。後者の覆土は、灰黄色あるいは黄灰色軟質の粘質土で、灰混りではないかと見える粘質土中に焼土粒、焼けたようなローム塊が混じっている。底面には小穴がある。覆土を除去した底面まで前者部分からの焼土が広がり、このような状況から、両者併せて地床炉として考えることができよう。竪穴住居に付属する炉かもしれないが、ただし、周辺にはそれと分かる竪穴住居壁構あるいは、掘型といった具体的な造構は検出できなかった。

掘立柱建物

掘立柱建物として、確認したのは、遺構137のみである。調査区内で柱穴と判断できる遺構が多いが、いずれも、建物平面形を復元できるような配列を確認することができなかつた。

掘立柱建物137 (Fig. 51・52, Pl. 14)

調査区北壁沿いで検出した。一部は調査区外に延びている。柱穴159・160・175・177で構成される

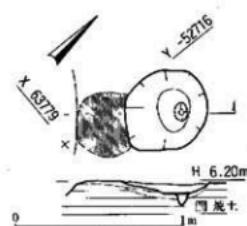


Fig. 50 炉131実測図 (1/30)

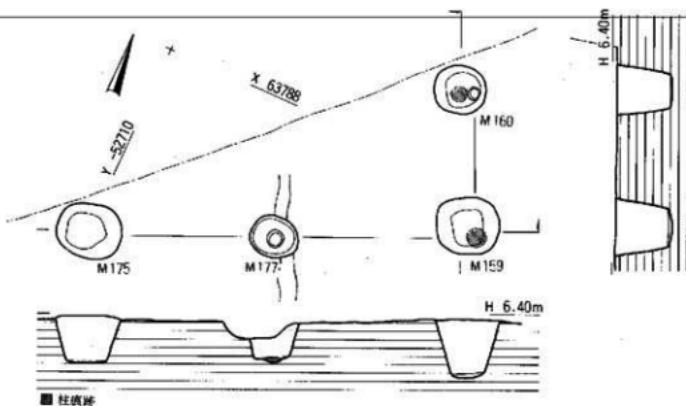


Fig. 51 掘立柱建物137実測図 (1/30)

造構である。現状で1×2間の規模を復元できるが桁行、梁行方向ともそれぞれ、より規模の大きかった可能性を残す。柱間隔は、重心間の距離で、柱穴159-160が1.58m、柱穴159-177が2.28m、柱穴177-175が2.30mをそれぞれ測る。柱穴底面は177を除いてほぼ同じ高さにある。

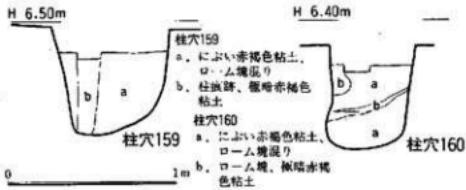


Fig. 52 堀立柱建物137柱穴土層断面図 (1/30)

堀立柱建物137出土遺物 (Fig. 53, Tab. 1)

建物を構成する各柱穴のうち、柱穴159の覆土からは、少量の遺物が出土した。大部分が弥生土器であるが、



加えて大形甕の体部細片を含む須恵器の細片資料が極少量含まれている。

柱穴160でも同様、大部分の弥生土器細片資料に加えて、須恵器の資料が含まれている。Fig. 53に示すのは須恵器甕口縁部小破片である。

柱穴175からは、少量の遺物が出土している。弥生土器の細片あるいは小破片資料が殆どを占める他に須恵器および土師器の細片資料を極わずか含んでいる。柱穴177からは遺物の出土をみていない。

井戸

井戸とする遺構は、遺構5を検出したのみである。

井戸5 (Fig. 54, Pl. 00-0)

調査区北西部で検出した。防空壕により、上部を失っている。平面形状は、不整な円形状を呈し、その径は0.8mほどである。平らな底にむかってやや窄まる断面形で、確認面からの深さ1.1mを測る。調査面からすると1.7mほどの深さとなる。底面は標高4.4mの位置にある。

覆土は上部では黒褐色の粘質土であるが、以下、ローム粒からなる層、黒色粘土の層が堆積している。遺構上半部の壁面には、掘削時の工具痕かと思われる豎方向のV字状の溝が顕著である。底面は地山である阿蘇IV火山灰の粘土化した部分までは達しておらず、湧水による抉れは全く生じて

Fig. 54 井戸5実測図 (1/30)

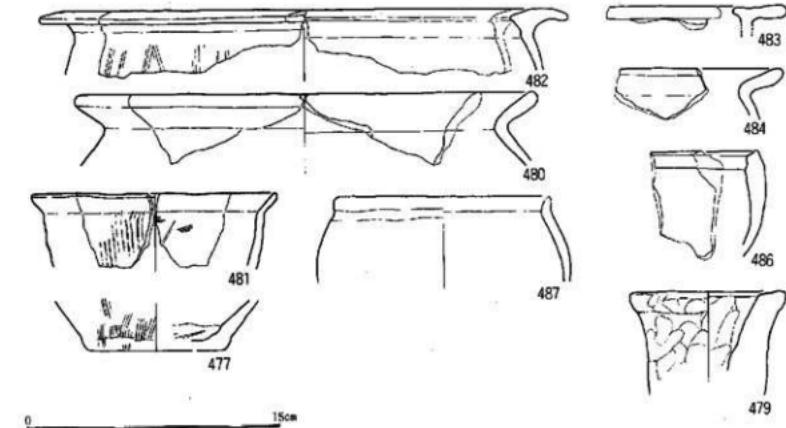


Fig. 55 井戸5出土遺物実測図 (1/30)

いない。

井戸 5 出土遺物 (Fig. 55, Tab. 1) 井戸 5 では、覆土全体から散漫に、少量の遺物が出土した。弥生土器の細片あるいは小破片の資料が大部分である。弥生土器487のみが全周の1/4ほど残る資料である。図示するその他の資料は何れも弥生土器小破片あるいは細片の資料である。

482・483・480・484・481は甕口縁部の資料である。482口縁端部には丹塗りの痕跡が残っている。477は口縁端部を欠いているが、壺であろう。477は同底部の小破片である。486は鉢口縁部か、口縁端部が凹み、外面には丹塗りの痕跡が残っている。479は器台で、端部がやや内傾して上端部の小破片であろうか。

土壙

土壙として登録した造構は、他造構を構成するものと除き 6 基である。そのうち、土壙 12・13・80・115・143 を個別に報告する。

土壙 12 (Fig. 56, Pl. 14)

調査区南壁にかかっている。楕円形状を呈するとと思われる造構である。横断面形は逆台形状を呈する。長さは 0.8m 以上、幅は 1.0m を測る。覆土は全体に一様で、明褐色粘質土中に多量のローム塊を含んでいる。

遺物は覆土中から散漫に極少量が出土した。弥生土器の細片あるいは小破片である。中期に属する資料のはかに後期に属するとみえる資料が含まれる。

土壙 13 (Fig. 57) 土壙 12 と並んで検出した。同様に半ばが調査区外にある可能性が残されている遺構である。底面が一方に偏った位置にある。断面形

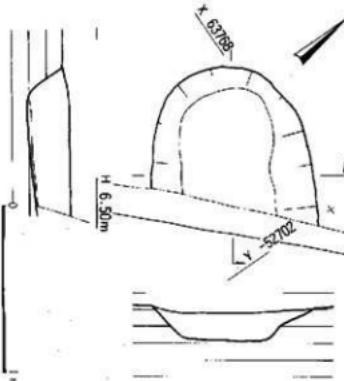


Fig. 56 土壙 12 実測図 (1/30)

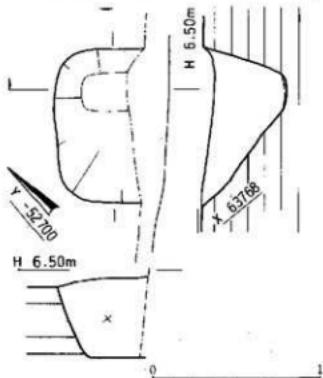


Fig. 57 土壙 13 実測図 (1/30)

は逆台形状を呈する。平面形は隅丸の四角形であると思われる。一边の長さ 0.9m、他辺は 0.5m 以上の規模をもつ。

覆土はローム塊で埋めたような状態を示しておりその間を赤褐色粘質土が充填している。遺物は極少量が覆土中から散漫に出土した。

土壙 13 出土遺物 (Fig. 58, Tab. 1) 土製投弾が 1 点含まれる他は、弥生土器の小破片あるいは細片である。土製投弾 502 は、ほぼ完存する資料である。中央部の長軸と直交する位置に細い条線が全周を取り巻くように残されている。器表が磨れて生じたものか、何らかの先端で削り込まれたものなのか判別が難しい。

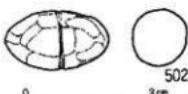


Fig. 58 土壙 13 出土遺物実測図 (1/2)

土壤80 (Fig. 59, Pl. 14)

調査区北辺中央部で検出した。溝2と重複し、古い遺構である。平面形は不整な橢円形状を呈する一方、底面での形状は歪ではあるが、長方形形状を呈する。断面形は、逆台形状を呈するといふようが、壁の一部が外方に大筋で開いた形状を呈する部分がある。長さ1.4m、幅1.1m、深さ0.6mをそれぞれ測る。土層断面を観察すると、遺構北側からの土砂の流入により、埋没したような状態を考えることができよう。シルトあるいは粘土が、あいだに地山ローム塊を挟んで堆積している。以上のような状況から、土壤80が周囲から流入する土砂と壁からの崩落土とで、自然に埋没していくことを推測することができようか。

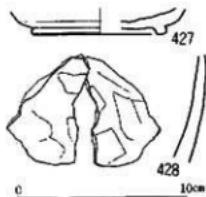


Fig. 60 土壌80出土遺物実測図 (1/3) 土壌80では、覆土中から散漫に少量の遺物が出土した。壺体部細片を主とした須恵器の資料が半ば以上を占めるほかに、土師器、弥生土器の細片あるいは小破片の資料が含まれている。須恵器427は高台壙の底部小破片、土師器428は、壺体部とみえる資料の体部細片である。内面に箇削り調整が観察される。

土壤115 (Fig. 61)

調査区南西隅で検出した。小穴53と重複し、古い遺構である。調査区外に半ば以上の部分があるものと思われ、形状も明確でない。縦0.5m以上、横0.4m以上の規模となる。断面形は逆台形状を呈し、深さ0.3mを測る。覆土は黒色の粘質土でローム塊が混じる。覆土中から遺物が散漫に出土した。遺物量は極少量の何れも弥生土器であり、細片もしくは小破片の資料である。

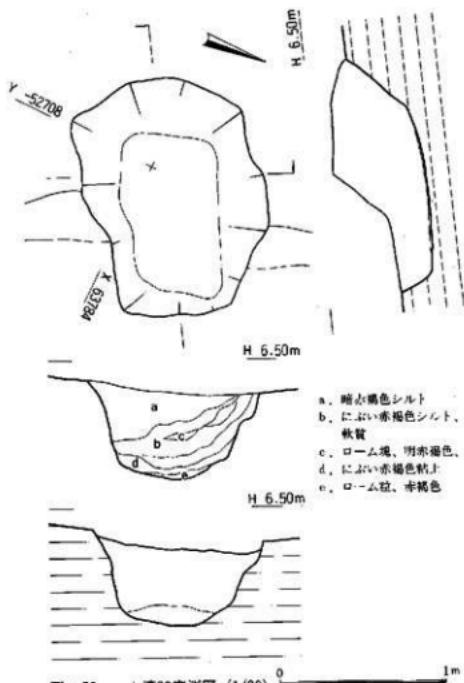


Fig. 59 土壌80実測図 (1/30)

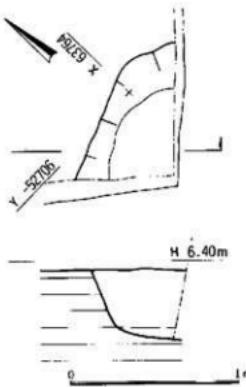
土壤80出土遺物 (Fig. 59, Tab. 1)

Fig. 61 土壌115実測図 (1/30)

土壤143 (Fig.

62, Pl. 12)

調査区東辺部

で検出した。平

面形は不整な橢

円形状を呈し、

長さ0.9m、幅

0.7mを測る。断

面形は逆状であ

るが、上半部が

大きく外方へ開

く。底面の平面

形は隅丸の長方

形状を呈する。

覆土は暗赤褐色

粘質土であるが、

下方になる程含

むローム塊の量が増え最下部では殆どがローム塊となる。遺構壁の中位では壁に沿った状態で礫（石製品）が出土した。以上の様な状況から、土壤80と同様、遺構の埋没はかなりゆっくりと遺構壁の崩

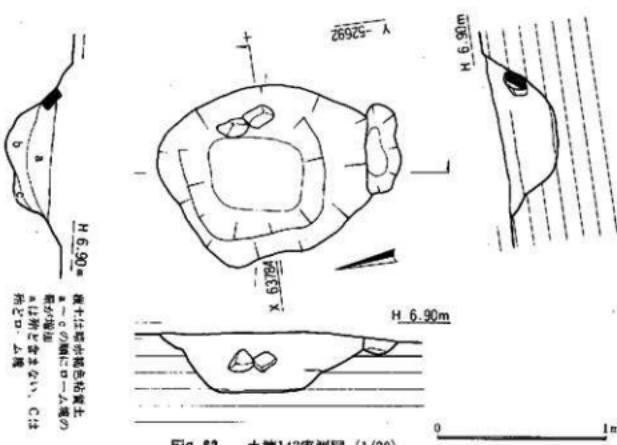


Fig. 62 土壌143実測図 (1/30)

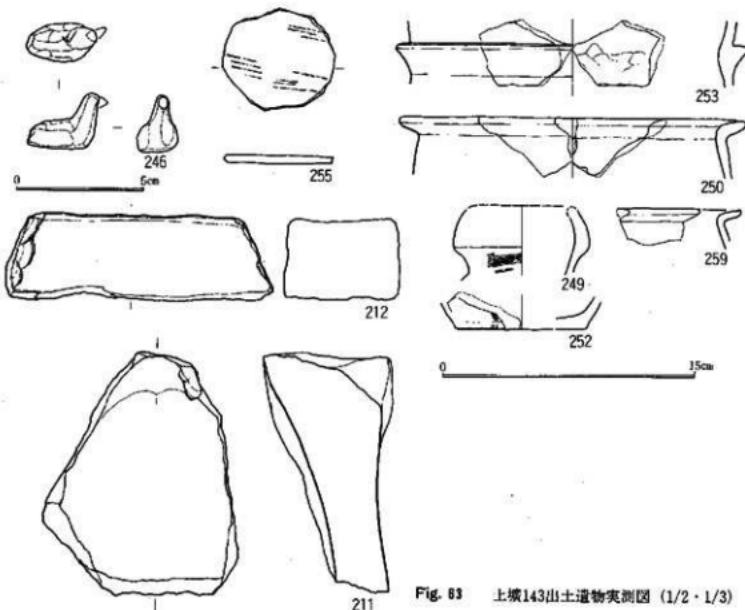


Fig. 63 土壌143出土遺物実測図 (1/2 - 1/3)

落を伴いながら進行して行ったのではないかと考える。

土壙143出土遺物 (Fig. 63, Tab. 1) 土壙143では、覆土中からコンテナ143の分量で遺物が出土した。遺構壁に張り付いたようにして出土した、砥石212、石皿211の他に黒曜石製の剥片が極少量含まれるほかは、全て弥生土器、それを利用した製品の資料である。土製品246は、図上で下面とする部分が半らで、それを底面として据えて考えるならば、鳥をかたどったものようである。とするならば、上部の欠損部が図示するように、嘴状に突出していたことが考えられる。全体を手捏ねによって製作している。長さは現状で2.7cm、幅は1.6cm、高さは2.3cmをそれぞれ測る。土製品255は、整体部破片の周囲を打ち欠いて円盤状に整形したもののようにみえる。甕外面にあたる器表面は、磨耗している。長軸長4.3cm、端字句4.0cm、厚さ0.3cmを測る。253は瓢形土器の細片である。外面に丹塗りの痕跡がある。250・251は甕口縁部の資料である。249は壺かと考えられる資料である。袋状の口縁部破片であるが、端部を欠く。器表は黒色ないし灰色で、胎土は精良である。252は甕底部である。石製品は何れも砂岩製である。211は破片資料であろう。

小穴・柱穴

これまで報告してきた分類以外の、比較的小規模の遺構については、柱痕跡など直接の要件を満たしている遺構と、遺構の構成単位として確認できる遺構とについては柱穴とし、他は小穴として分類、調査、記録した。以下、小穴および柱穴の出土遺物を中心に報告する。

小穴22 (Fig. 64, Tab. 1)

不整な楕円形状の小穴である。底面では隅丸の長方形状となる。長さ0.9m、幅0.5m、深さ0.4mを測る。覆土はローム塊を含む黒色粘質土である。遺物は、少量が出土している。ほとんどが細片あるいは小破片の弥生土器である。図示する266は袋状口縁部の口縁部小破片である。器表の荒れが著しい。

小穴28 (Fig. 64, Tab. 1)

柱痕跡が明確でない遺構である。楕円形状を呈し、長軸長0.6m、深さ0.4mを測る。覆土は、暗赤褐色、にぶい赤褐色の粘質土でローム粒を含んでいる。遺物は、極少量が覆土中から出土した。弥生土器の細片あるいは小破片の資料である。356は高壇口縁部の細片資料である。口縁部の形状は復元できない。内外面とも器表の磨滅が著しい。

小穴46 (Fig. 64, Tab. 1)

翌穴住居6の柱穴45と重複し新しい小穴である。隅丸の方形状を呈し、一辺が0.4mを、深さは0.4mを測る。覆土は黒褐色粘質土で、全体に一様である。遺物は弥生土器で、細片あるいは小破片の資料が覆土中から散漫に出土した。

小穴51 (Fig. 64, Tab. 1)

円形の小穴である。少量の遺物が覆土中から出土した。すべて弥生土器の破片資料であり、細片あるいは小破片が含まれている。321は甕上半部の小破片である。他に、接合はしない複数の同一個体と思われる資料がある。

小穴88 (Fig. 64, Tab. 1)

隅丸の長方形状を呈する遺構である。遺物は少量が覆土中から出土した。図示する石核の他は弥生土器の細片あるいは小破片の資料である。中期の壺、甕の資料が含まれている。348は石核とする資料であるが、極小形である点疑問である。

小穴110 (Fig. 64, Tab. 1)

土壙13と重複し、古い遺構である。極少量の遺物が覆土中から出土した。弥生土器と思われる細片

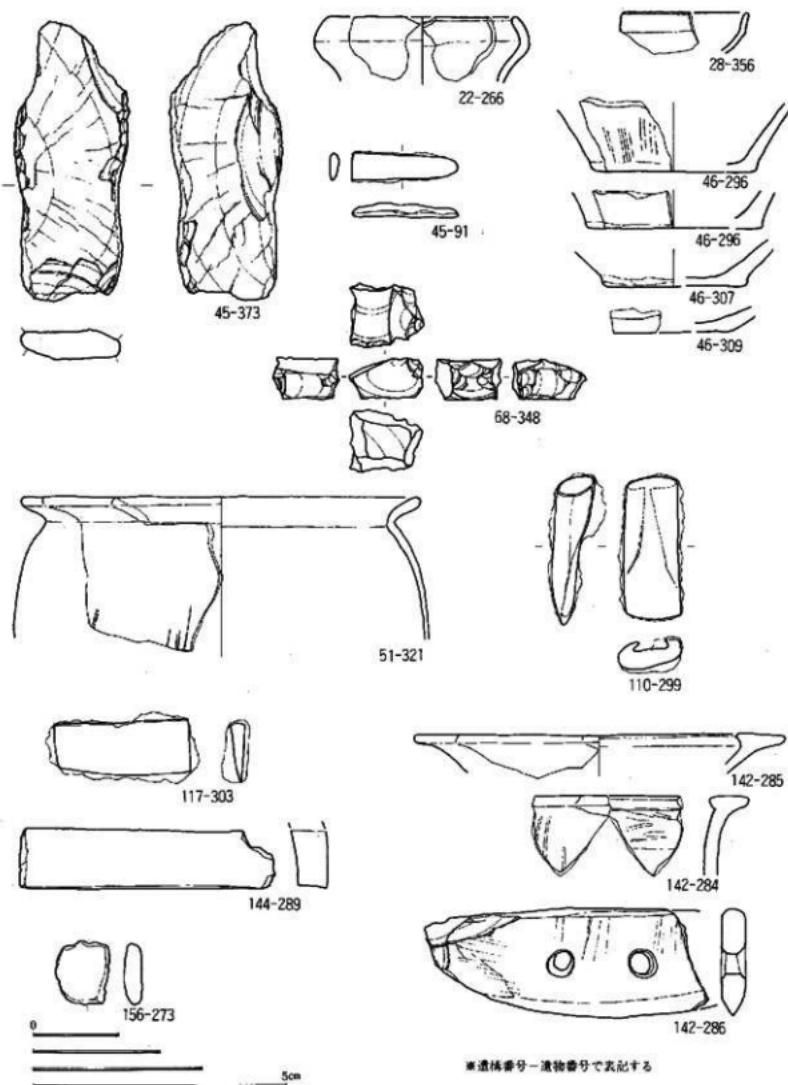


Fig. 84 小穴・柱穴出土遺物実測図 (1/3・2/3・1/2・1/1)

の土器資料のほかに、鉄斧299が出土した。鎌に厚く覆われて特に基部の形状は不明確であるが、袋状を呈するものであろう。該当する部分が空隙となって残っている。

小穴117 (Fig. 64, Tab. 1)

不整な円形を呈し、浅い遺構である。径は0.6m、断面は浅い皿状を呈し、0.1m程の深さとなっている。竪穴住居6と考える範囲にあり、柱穴との位置関係からあるいは、これの構成遺構かもしれない。遺物は覆土中から極少量が出土した。弥生土器の細片資料のほかに鉄器303が出土した。他の鉄器資料と同様鎌が厚く、形状が不確実であるが、刀の破片と観察される。

小穴139 (Fig. 65, Tab. 1)

不整な形状の遺構である。縦横

0.7mの規模をもち、深さは0.2mを測る。覆土は地山ローム塊である。遺物はコンテナ4箱の分量が出土した。比較的密な状態での出土である。遺物はすべて弥生土器の破片資料であるが、図示する斐500は、接合により、底部以外を復原できる資料である。

小穴142 (Fig. 64, Tab. 1)

覆土中から少量の遺物が出土している。石包丁286の他は、弥生土器小破片あるいは網片の資料である。弥生土器壺285・284を図示する。いずれも口縁部の小破片資料である。

小穴144 (Fig. 64, Tab. 1)

平面形は円形で、径0.4m、深さ0.4mを測る。覆土中から少量の遺物が出土している。図示する砥石289の他はすべて、弥生土器細片あるいは小破片の資料である。

小穴156 (Fig. 64, Tab. 1)

平面形が円形で、径0.4m、深さ0.4mを測る。遺物は極少量が覆土中から出土した。鉄器156のほかは弥生土器の細片資料である。

3. 小結

比恵49次地点では縄文時代晩期の遺物に始まる人間の活動を認めることができる。遺構からみると、弥生時代中期（井戸、土壙）、後期（竪穴住居）さらに奈良時代（溝、土壙）、加えて近世以降（溝、段落ち）という時期を辿ることができる。さらに出土遺物からみると古墳時代後期も痕跡を認めることができる。遺物の数量についていえば、上述遺構も含めて出土資料の大半を弥生土器の破片資料が占め、他資料は痕跡的である。なかでも中期に属する遺物が殆どと言え、遺構のあり方とは異なる。

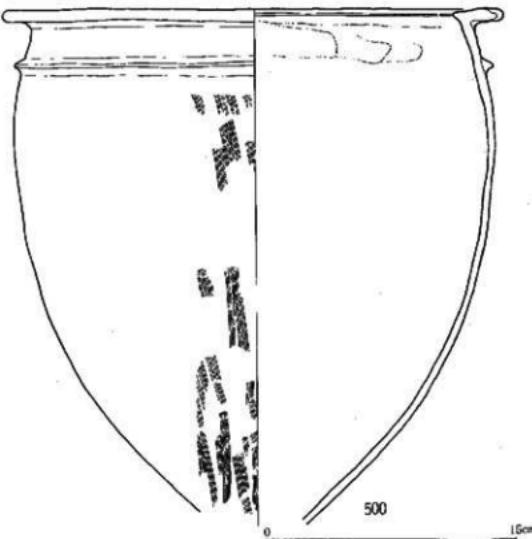


Fig. 65 小穴・柱穴出土遺物実測図 (1/3)

Tab. I 報告遺物



(1) 調査区Ⅰ区全景(西から)



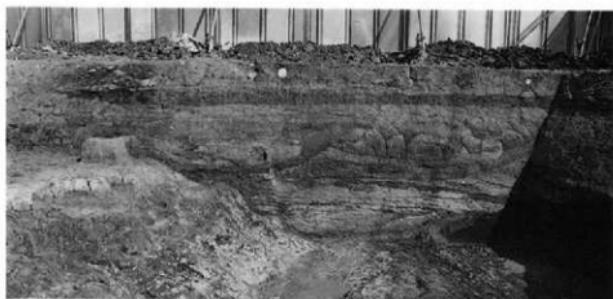
(2) 調査区Ⅰ・Ⅱ区全景(南から)



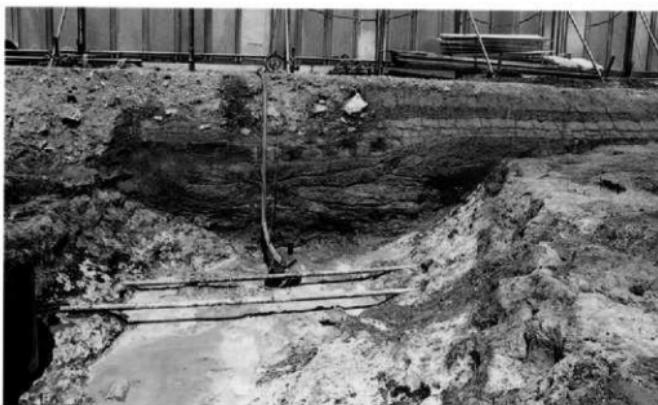
(3) 同Ⅱ区上面全景(北から)



(4) Ⅱ区SD41検出状況(北から)

(1) SD41検出状況
(南から)

(2) SD41北壁土層 (南から)

(3) 同南壁土層
(北から)



(1) SD41検出状況（南から）



(2) 同遺物検出状況（南西から）



(3) SD03・14・15・20（西から）



(4) 同（南西から）



(5) SB62（南から）



(6) SE02（南から）



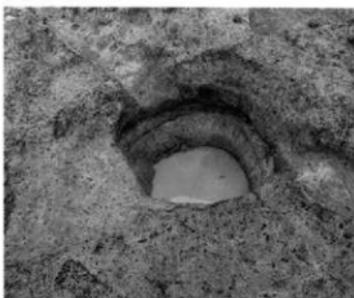
(7) SE40上層（東から）



(8) SE40井戸底（東から）



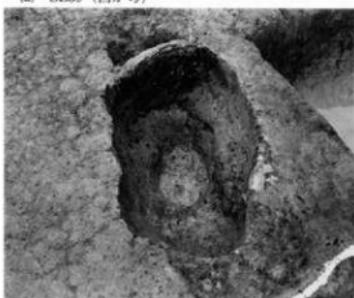
(1) SE12 (南から)



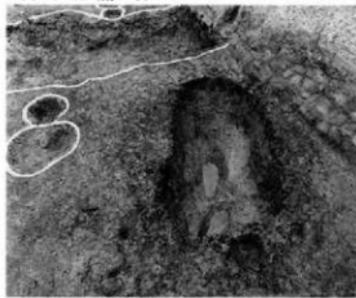
(2) SE59 (西から)



(3) SK12 (南から)



(4) SK16 (南から)



(5) SK17 (東から)



(6) SK18 (北東から)



(7) SX21 (北西から)



(8) SK28 (北から)



(1) SK42 (北西から)



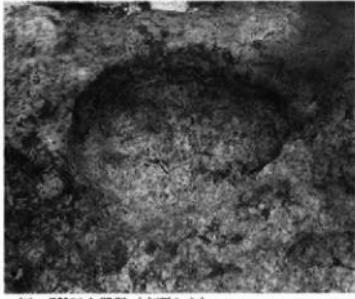
(2) SK49・50 (西から)



(3) 同遺物出土状況 (西から)



(4) SK54 (南西から)



(5) SX58土器群 (南西から)



(6) SK63 (南西から)



(7) SK67・68 (北西から)



(8) SK69 (北西から)



(1) SX47 (北から)



(2) 同遺物検出状況 (北から)



(3) 同遺物検出状況 (西から)



(4) SX52遺物出土状況 (西から)



(5) SX46 (西から)



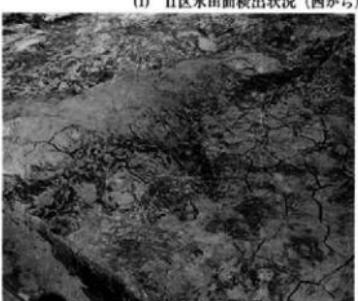
(6) SX46 (南から)



(7) SD41上層遺物出土状況 (北東から)



(1) II区水田面検出状況（西から）



(2) 取排水口検出状況（北西から）



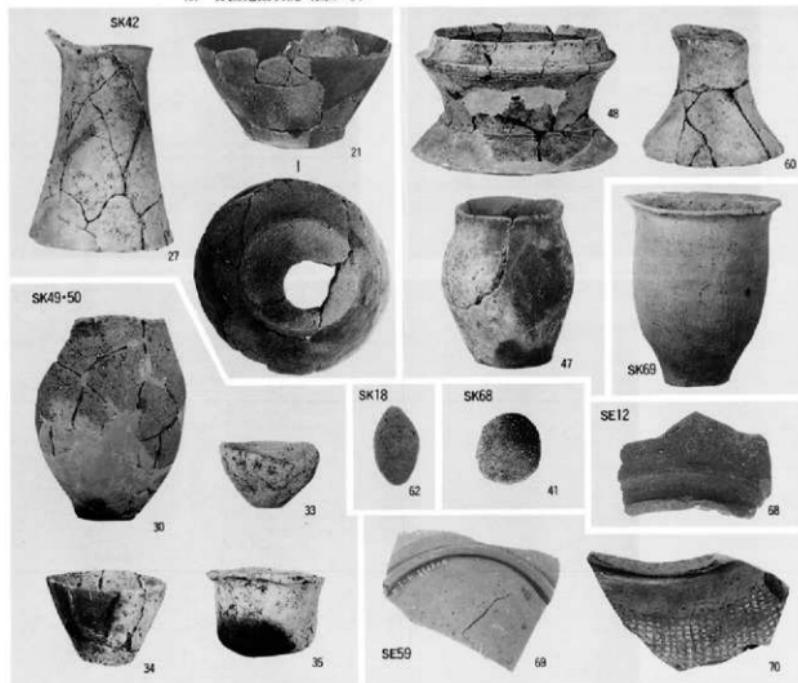
(3) 水田面遺物検出状況



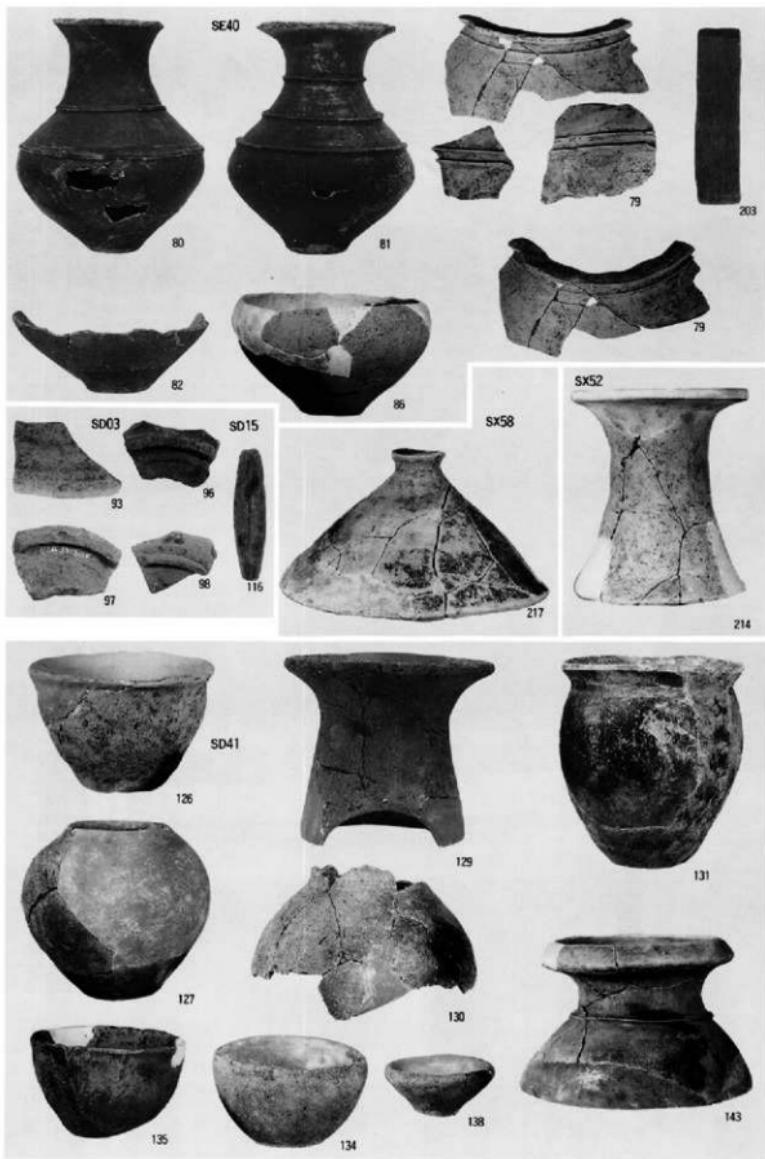
(4) II区完掘後土層（南東から）



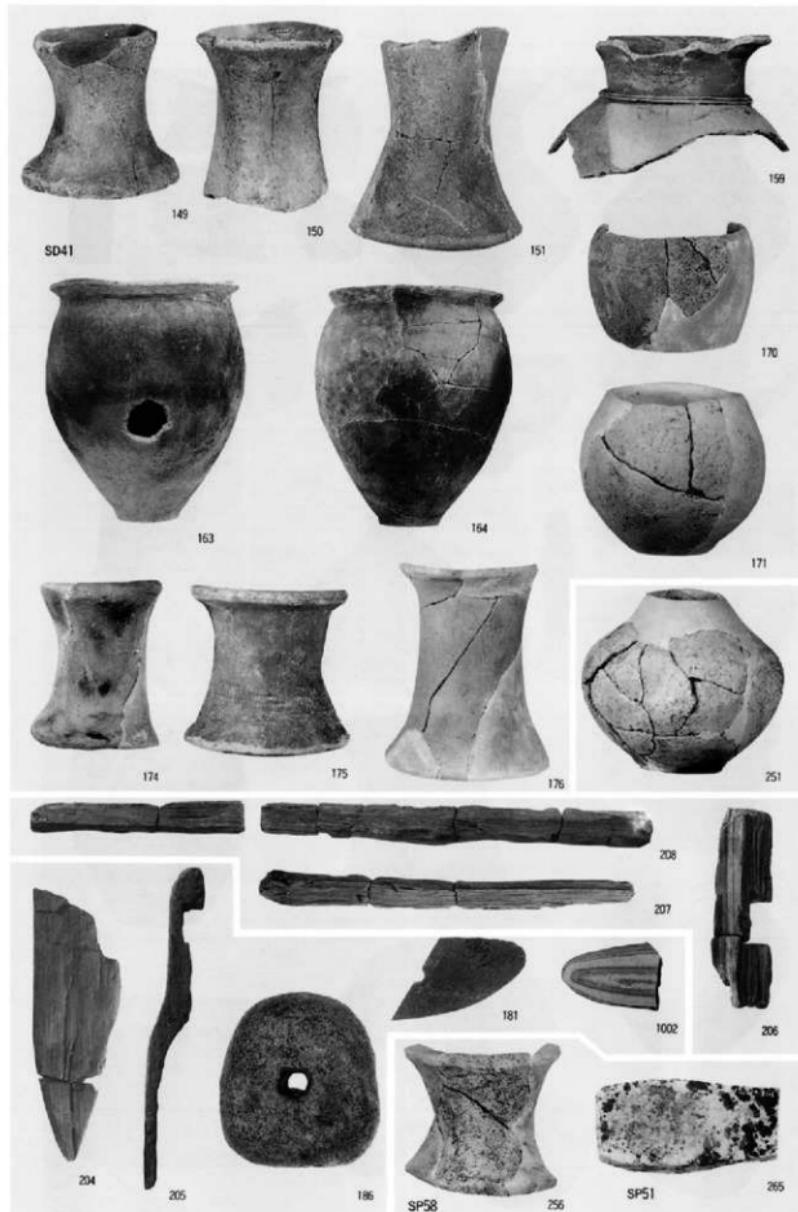
(1) II区完掘状況(西から)



(2) 土坑・井戸出土遺物



井戸・溝・土器群出土遺物（縮尺不統一）



溝・水田面・ピット出土遺物と各遺構出土木器



1. 調査区西半部（東から）



2. 調査区東半部（北から）



1
調査区南東隅部
道標 (北から)



2
段落ち3土層断面
(北から)



3
調査区南東隅部
道標 (北から)



4
巣穴住居7
(北から)





△ 1.
掘立柱建物137
(北から)



△ 2.
井戸5 (東から)
+環礁 (東から)



△ 3.
土壙12 (北から)
+環礁 (東から)



△ 4.
土壙12 (北から)
+環礁 (東から)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第401集

比恵遺跡群(15)

—比恵遺跡群第41次・49次発掘調査報告書—

1995年（平成7年）3月31日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印 刷 筑西日本新聞社刷
福岡市博多区吉塚8-2 15